

伊方城園遺跡

方城中学校校舎改築に伴う埋蔵文化財調査

方城町文化財調査報告書

第 7 集

2004

方城町教育委員会

巻頭図版



伊方城園遺跡遠景（西から）

序

筑豊はその名が示すように、筑前と豊前が接する東西文化の交流地帯であり、筑豊の一角にある方城町は、福智山系と遠賀川の支流である英彦山川の間に位置しています。

古代においては、この地にも遠く中国や朝鮮から文化が渡来して来たと思われます。海を渡ってきた人々は、川を渡り山を越えてこの地に根を下ろし、新たな文化を伝え独自の文化を育んだものと考えられます。

このたび長い間土中に埋もれていた文化が、ようやく陽の目を見ることができました。これらは私たち方城町民の先祖の偉大な遺産であり、私たちの財産であります。

この貴重な物言わぬ歴史の証言者については、詳しく記録にとどめ、今後末永く保存し次代に継承しなければならないと考えています。そして「ふるさと」再発見、「まちおこし」の一助になればと思います。

本書は、平成13年度に調査を行った、方城町伊方城園遺跡の報告書であります。いにしえ人の生活を思い、文化財保護への意識向上、並びに地域の歴史を知る上で、ご活用いただければ、幸甚に存じます。

なお、今回の発掘調査、報告書の刊行に際し、ご指導・ご協力くださいました方々、および関係機関に対して、心から感謝いたします。

平成16年3月

方城町教育委員会
教育長 金山 松榮

例　　言

1. 本書は、方城町立方城中学校校舎改築事業に伴い実施した、田川郡方城町大字伊方所在の伊方城園遺跡の報告書である。方城町文化財調査報告書の第7集にあたる。
2. 発掘調査及び報告書作成は方城町教育委員会が主体となり、福岡県教育庁筑豊教育事務所の援助を受けて実施した。
3. 本書に掲載した遺構図は、杉原敏之・森井啓次・宮地総一郎・大庭孝夫・八木健一郎・小杉山大輔・吉岡淳子・仲谷あかねが作成した。
4. 掲載した遺構写真は杉原が撮影した。空中写真は株式会社東亜航空技研による。
5. 出土遺物の整理・復元、実測製図作業は方城町教育委員会が主体となり、県文化財保護課の協力を得て九州歴史資料館・文化財保護課太宰府事務所で実施した。
6. 本書に使用した方位は全て座標北である。また、建物・柵の方位軸については「°' "」で記載した。なお、遺構番号に付した記号は SA－柵、SB－建物、SE－井戸、SI－住居、SK－土坑、SX－その他・特殊遺構である。
7. 本書の執筆はI・III・IV章を杉原が、II章を井上がそれぞれ行った。編集については、井上が行った。

本文目次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 調査の記録	7
1. 調査の方法	7
2. 古墳時代の遺構と遺物	8
3. 古代以降の遺構と遺物	9
4. その他の遺構と遺物	43
IV おわりに	47

図版目次

巻頭図版 伊方城園遺跡遠景（西から）

図版 1	1 伊方城園遺跡遠景（西上空から）	2 伊方城園遺跡遠景（北上空から）
図版 2	1 調査区東全景（北上空から）	2 調査区中央全景（北上空から）
図版 3	1 調査区全景（西南から）	2 調査区東半全景（西南から）
	3 調査区西半全景（東南から）	
図版 4	1 調査区南西端付近（西から）	2 調査区南端付近（南から）
	3 調査区基本土層（東から）	
図版 5	1 SB01・02（南上空から）	2 SB01（北東から）
	3 SB03（北から）	
図版 6	1 SB05・06（南から）	2 SB05・06（東から）
	3 SB05・07（南西から）	
図版 7	1 SB07（東から）	2 SB10・11（南から）
	3 SB11・12（北から）	
図版 8	SB01・02・05柱穴	
図版 9	SB06・07・10柱穴	
図版 10	1 SE01 埋積状況（南から）	2 SE01（北から）
	2 SE01 完掘状況（北から）	
図版 11	1 SE02（北から）	2 SE04 土層（西から）
	3 SK07・08 遺物出土状況（北から）	
図版 12	1 SD03・05（北上空から）	2 SD03 北半（南から）
	3 SD03 北半土層（南から）	
図版 13	1 SD03 南半（南から）	2 SD03 南半土層（南から）
	3 SX11（東から）	
図版 14	1 調査区東下層遺構（北から）	2 調査区東下層遺構（西から）
	3 SX12 遺物出土状況（南から）	
図版 15	出土土器・陶磁器1	
図版 16	出土土器・陶磁器2	
図版 17	出土土器・陶磁器3	
図版 18	出土瓦・土製品・石製品	

挿図目次

第 1 図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	4
第 2 図	遺跡周辺字図（1/5,000）	5
第 3 図	伊方城園遺跡周辺地形図（1/2,500）	6

第 4 図	伊方城園遺跡遺構配置図 (1/300)	折込
第 5 図	調査区土層図 (1/40)	7
第 6 図	竪穴住居 SI01 実測図 (1/60)	8
第 7 図	竪穴住居 SI01 出土土器実測図 (1/3)	9
第 8 図	掘立柱建物 SB01 実測図 (1/60)	10
第 9 図	掘立柱建物 SB02・03 実測図 (1/60)	11
第 10 図	掘立柱建物 SB04・06 実測図 (1/60)	13
第 11 図	掘立柱建物 SB05 実測図 (1/60)	14
第 12 図	掘立柱建物 SB07～09 実測図 (1/60)	15
第 13 図	掘立柱建物 SB10・11 実測図 (1/60)	17
第 14 図	掘立柱建物 SB12～14 実測図 (1/60)	18
第 15 図	掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)	19
第 16 図	柵 SA01～06 実測図 (1/60)	20
第 17 図	井戸 SE01 実測図 (1/40)	22
第 18 図	井戸 SE02～04 実測図 (1/40)	23
第 19 図	井戸 SE01 出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	25
第 20 図	井戸 SE01～04 出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	26
第 21 図	土坑 SK01・07～09 実測図 (1/40)	27
第 22 図	土坑 SK01・07・08 出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	28
第 23 図	溝 SD03・05・09 実測図 (1/200、1/40)	29
第 24 図	溝 SD03 出土土器・陶磁器実測図 1 (1/3、1/4)	31
第 25 図	溝 SD03 出土土器・陶磁器実測図 2 (1/3、1/4)	32
第 26 図	溝 SD03 出土土器・陶磁器実測図 3 (1/3、1/4)	33
第 27 図	その他の溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3、1/4)	35
第 28 図	暗渠 SX11 実測図 (1/60)	37
第 29 図	その他の遺構等出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	39
第 30 図	出土瓦実測図 1 (1/4)	40
第 31 図	出土瓦実測図 2 (1/4)	41
第 32 図	その他の出土遺物実測図 (1/2、1/4)	42
第 33 図	下層遺構 SX12・13 実測図 (1/60)	44
第 34 図	下層遺構出土遺物実測図 (2/3、1/3)	44
第 35 図	その他の土器・石器実測図 (1/2、1/3、1/4)	45

スナップ[°]

スナップ1	完成した新方城中学校舎	1
スナップ2	伊方小学校児童現地説明会風景	46

I はじめに

1. 調査の経緯

福岡県央北部に位置する方城町は、かつては方城三菱炭礦に代表される炭鉱都市として発展した。しかし炭鉱閉山後、当時の町並みは鉱害復旧事業等によって急速に失われてしまった。近年は、県道22号線直方一田川バイパス開通により、北九州・筑豊地域のベットタウンとして発展している。

往時を偲ばせる旧方城三菱炭礦工作室は、現在、国登録文化財・九州日立マクセル赤煉瓦記念館として活用されている。今後も、消え行く炭鉱遺産・資料の組織的保存が望まれる。その一方で、伊方小学校、方城中学校に近接する福岡県指定史跡伊方古墳の保存・修復事業が平成15年度より開始されている。伊方古墳は、大正年間より地元有志によって保存・顕彰されてきた。現在、住宅地の中で修復されているが、周辺は史跡と町並みが調和する文教区として新たな景観を呈している。今後、文化財愛護、歴史教育の場として学校・地域住民に積極的に活かされることを期待したい。

今回報告する伊方城園遺跡は、現方城中学校内に所在する。方城町では、平成13・14年度にかけて、公立学校施設整備費国庫負担事業・方城中学校校舎改築工事を予定していた。平成13年8月、方城町教育委員会より筑豊教育事務所へ、方城中学校敷地内における文化財有無確認についての依頼があった。すでに伊方遺跡群として周知されており、丘陵上に残る地形から埋蔵文化財の包蔵が予測された。その後、日程調整等の協議を行い、校舎上部の解体が終了した10月9日より試掘調査を開始した。その結果、造成や基礎埋設による掘削を逃れた部分で、古代から中世にかけての大規模な遺構群が拡がることを確認した。そして再度、工事等の日程調整を行い、本調査することになった。方城町教育委員会と筑豊教育事務所で文化財担当職員派遣の協定書を締結し、11月1日より発掘調査を開始した。調査は、解体事業と一部並行して行うため、校舎北棟より開始した。表土剥ぎののち、校舎基礎内や東側の空き地から掘立柱建物等を検出した。校舎基礎内でも造成による掘削を逃れた部分での遺構の残存状態が良く密集度も高かった。そのため、年明け以降、町、教育委員会で再度協議を行い、平成14年3月まで、調査を延長した。最後は、調査と解体工事が並行することとなったが、関係機関の協力により、3月8日に無事終了した。

また、学校地内での遺跡調査のため、記者発表に先立って、2月8・9日の両日、方城中学校生徒をはじめ伊方小学校、弁城小学校の児童に遺跡の公開と説明会を実施した。この公開終了後、記者発表を行い、2月11日に現地説明会を実施した。結果、100名を超える参加者があった。今後、この遺跡より出土した資料が地域の財産として活用されることを期待したい。



スナップ1 完成した新方城中学校舎

2. 調査組織

発掘調査・報告書作成に係る関係者は下記のとおりである。

平成13年度

平成15年度

方城町

町長 白石 博文

白石 博文

方城町教育委員会

教育長 金山 松榮

金山 松榮

学校教育課長 三宅 貞子

澤田 富子

課長補佐 松本美智枝

係長 中山 光信

係員 池長 伸之

奥 一幸

社会教育課長 中山 利彦

中山 利彦

課長補佐 石谷 敏行

係長 朝部 信恵

担当 井上 勇也 (報告書作成)

福岡県教育庁筑豊教育事務所

主任技師 杉原 敏之 (調査担当)

杉原 敏之 (報告書作成)

発掘調査に参加された方々は下記のとおりである。記して感謝いたします。

発掘作業員 (敬称略・五十音順)

安部香名子、内野陽子、加藤英樹、木村貴嗣、木村力、木村玉美、木森敦、幸丸みやこ

許斐美幸、桑野雛子、重藤玲子、下瀬元子、角寛子、佐藤政広、立花陽子、竹清多津子

田代美知子、茶園孝子、仲谷あかね、仲村タミエ、西岡壽江、西岡義雄、西村裕達、原忠義

堀川智美、松田雪風、村坂数馬、村坂美枝子、吉岡淳子

調査にあたっては、方城町、方城中学校、方城町文化財専門委員会、工事関係者の皆様には多大な御理解と協力を得た。また、以下の方々には調査・報告書作成において、有益な御助言・御教示をいただいた。記して感謝いたします。

田中正日子 (第一経済大学)、森本弘行・福本寛 (田川市石炭資料館)、岩本教之 (添田町教育委員会)、野村憲一 (香春町教育委員会)、末吉隆弥 (川崎町教育委員会)、岩熊真実 (糸田町教育委員会)、志摩紀郎 (大任町教育委員会)、春本篤・松浦幸一 (赤村教育委員会)、嶋田光一・樋口嘉彦 (飯塚市歴史資料館)、長谷川清之・尾園晃 (桂川町教育委員会)、福島日出海 (嘉穂町教育委員会)、三浦康浩 (庄内町教育委員会)、毛利哲久 (穂波町郷土資料館)、杉内郷・櫛山範一 (筑穂町教育委員会)、須原縁・八木健一郎 (穎田町教育委員会)、松浦宇哲 (碓井町教育委員会)、矢野和昭 (新吉富村教育委員会)、吉留秀敏 (福岡市教育委員会)。

II 位置と環境

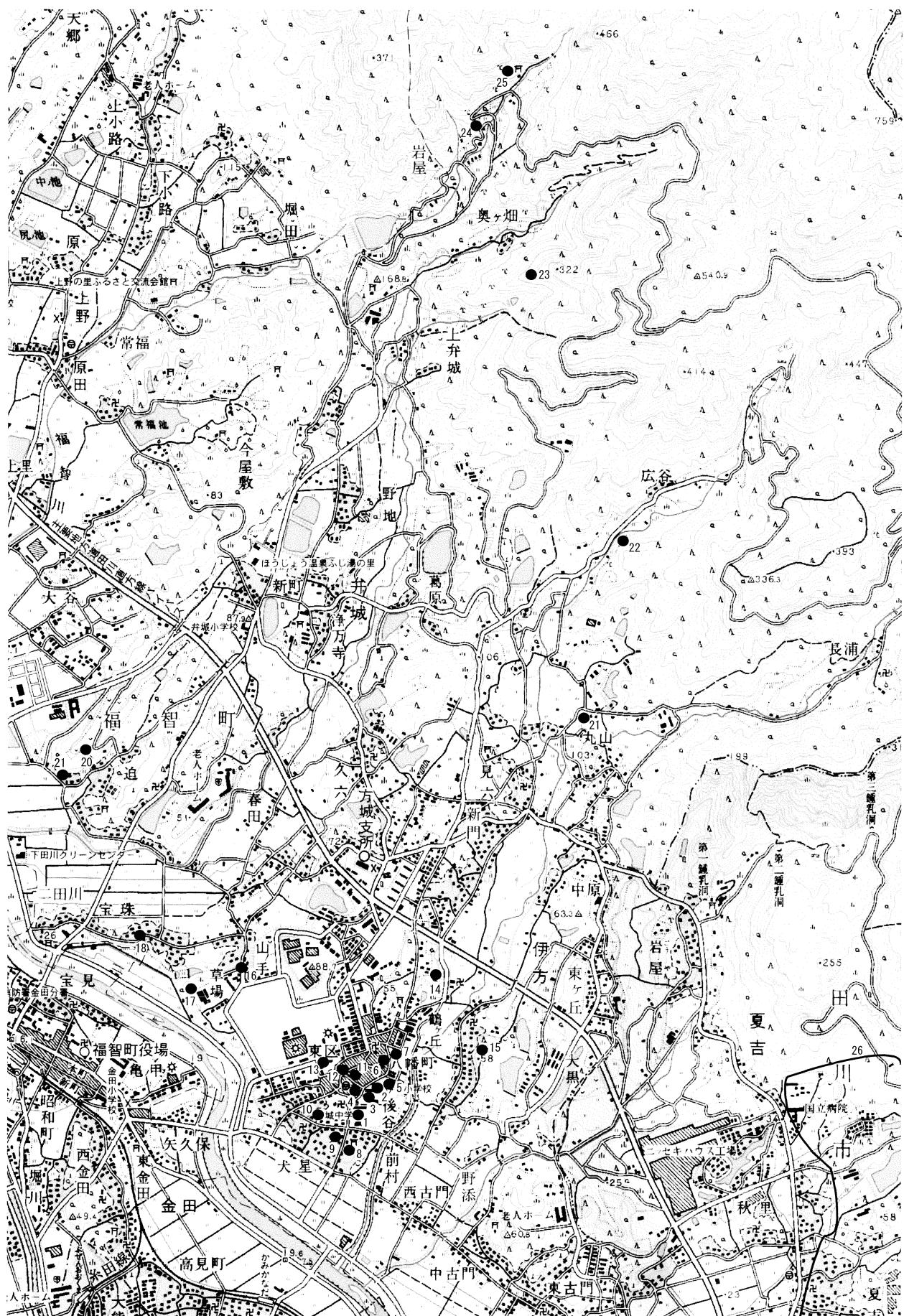
方城町は田川郡の北端に位置し、遠賀川の支流彦山川と金辺川の合流点にあり、北は北九州市、南は田川市、東は香春町、西は赤池町、金田町にそれぞれ隣接する。町の東北部は福智山系に属する山岳地帯であり、これより派生する中原、伊方、弁城の三本の丘陵が南へ派生し緩やかな傾斜をもちながら彦山川の低平地に向かい、谷や丘陵が多く全体的に起伏に富んだ地形である。

方城町の成立は、伊方村と弁城村が明治 22 年に合併して方城村となり、明治 33 年町制を施行したことによる。方城の名はそれぞれの名前から一字取り生まれた。旧伊方村は慶安元年に一度伊方村と畠村に分村し、明治 20 年に再び合併している。それぞれの由来については、「弁城」は応永年間に永野新九郎貞恒が築城したと伝えられる弁天城にちなみ弁城と呼ばれるようになったと伝えられる。もう一方の「伊方」は仲哀天皇の熊襲平定の際、優秀な弓の射手を出したことから射方の里と呼ばれ、字が転じ伊方になったと伝えられる。

確認されている文化財では縄文時代より人々の生活の痕跡が残される。町内では伊方犬星遺跡で縄文時代後期の土器片、磨製石斧が採集されている。本格的な調査が行われた遺跡に金山遺跡がある。この遺跡は平成 14 年度に農業基盤整備事業に伴い調査が行われた。調査では後期～晚期の土器が出土し、磨製石器の製品、未製品、剥片類が多量に出土し石器製作址と考えられる。また、打製石斧が少ない点は注意され、打製石斧から磨製石斧への移行を考えるうえでも重要な遺跡である。明確な住居は確認されていないが遺物の量から遺跡周辺に存在するのであろう。

続いて、弥生時代になると遺跡の数も増え、さまざまな種類の遺跡が見られるようになる。特に伊方城園遺跡のある伊方の丘陵上には数多くの遺跡が存在する。古くからこの丘陵上からは石劍や弥生土器が出土し、主な遺跡として前村遺跡、石戈、石劍、磨製石鏃等を出土した中原遺跡や甕棺墓、石棺墓の出土した後谷遺跡等が知られていた。最近では本格的な調査が行われた、伊方小学校遺跡群、法華屋敷遺跡、伊方石丸遺跡などの遺跡が確認されている。伊方小学校遺跡では弥生時代前期後半の貯蔵穴、ほぼ同じ時期の土坑墓、後期後半の住居が確認され、法華屋敷遺跡においても弥生時代前期後半～末の貯蔵穴が確認されている。伊方石丸遺跡では弥生時代中期前半～後半にかけての土坑墓、木棺墓、甕棺墓が確認されている。弥生時代中期の墓地は伊方石丸遺跡の隣接地、伊方古墳からも平成 15 年度の範囲確認調査の際に土括墓、甕棺墓が確認された。しかし、最近の調査成果からも具体的な集落の状況はいまだ不明である。ただ、前期後半～末の貯蔵穴、さらに前期後半～末、中期前半～後半にかけての墓域、後期後半の住居が存在することから伊方周辺には弥生時代を通じ有力な集落が存在したことは十分推定できる。また、この伊方丘陵の端、宝珠遺跡の弥生時代後期後半～終末の石棺墓と三本松遺跡の弥生時代終末～古墳時代前期の石棺墓からも内行花文鏡が出土している。このことも有力な集落の存在を裏付ける資料となろう。

古墳時代に入っても、伊方丘陵とその周辺が主要な生活の場となっていたようである。伊方丘陵上の草場遺跡、前村遺跡、宝珠遺跡などで小型丸底壺を主体とした土師器が採集されている。これらの土師器は墓地に伴うものではないため付近に集落が存在した痕跡と考えられる。一方、田川郡では古墳時代の墓制として横穴墓が主流を占め、数多くの横穴墓群が知られる。方城も例外ではなく野添横穴墓群、迫横穴墓群、長谷横穴墓群などがある。一方、古墳には前期と考えられる三本松古墳群、迫古墳、後期では高崎山古墳、県指定史跡の伊方古墳などが確認されている。

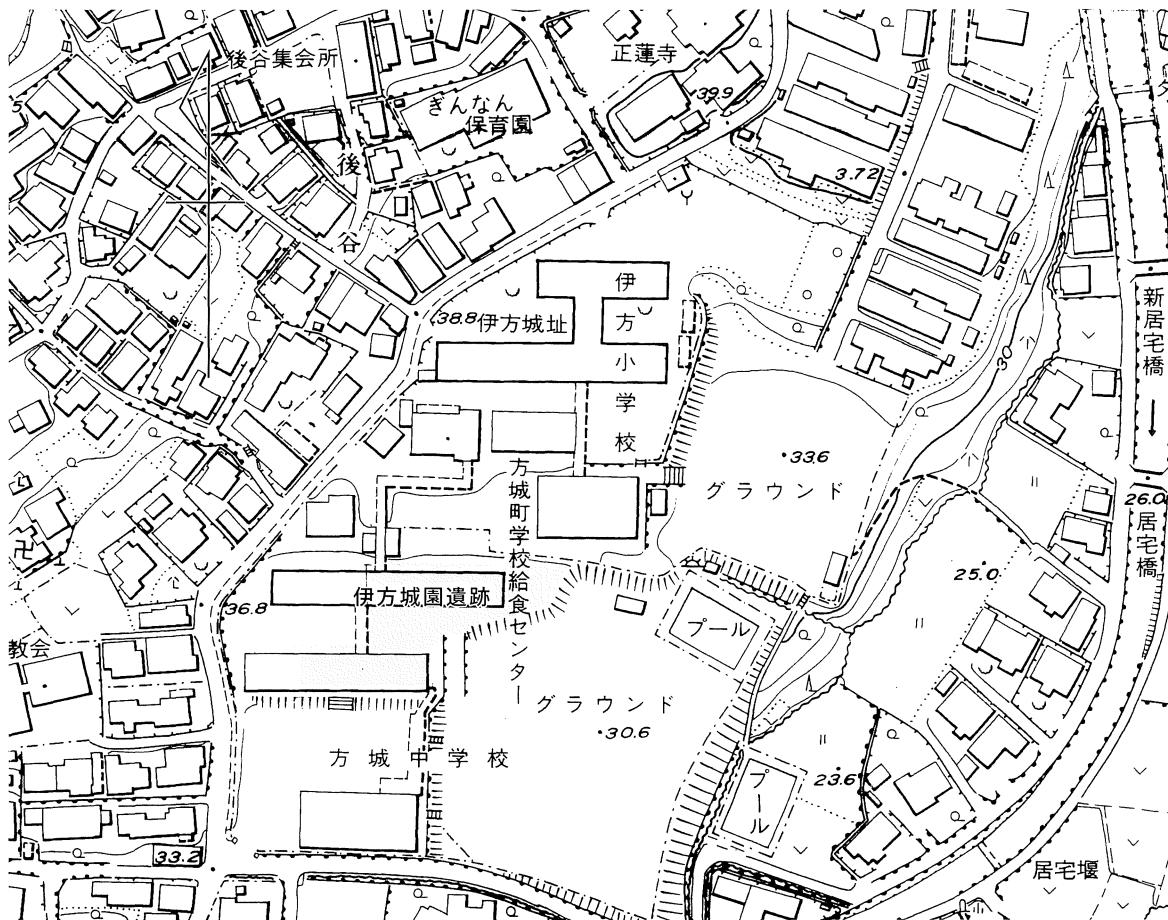


第1図 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)

1. 伊方城園遺跡 2. 伊方城址 3. 伊方小学校遺跡第2地点 4. 伊方小学校遺跡第3地点 5. 伊方小学校遺跡第1地点
6. 伊方石丸遺跡 7. 伊方古墳 8. 法華屋敷遺跡 9. 犬星遺跡 10. 音丸宝篋印塔 11. 後谷遺跡 12. 長樂寺宝篋印塔
13. 九州日立マクセル赤レンガ記念館 14. 長谷横穴墓群 15. 野添横穴墓群 16. 三本松古墳群 17. 草場遺跡 18. 宝珠遺跡
19. 追遺跡 20. 追横穴墓群 21. 金山遺跡 22. 出口遺跡 23. 弁天城 24. 岩屋高麗窯 25. 岩屋磨崖梵字曼荼羅
26. 夏吉古墳群



古墳時代後期以降は、中小の古墳から構成される群集墳の増加する時期である。方城町においては、群集形態をとるのは横穴墓である。横穴式石室を内部主体に持つ古墳は確認できるものでは伊方古墳がある。この伊方古墳の石室全長は 11 m を超え、石室の構造は三室構造を意識した複室の横穴式石室である。筑豊地域では最大規模、県下でも有数の規模の横穴式石室を持つ古墳であり、昭和 52 年には県指定史跡に指定されている。現在墳丘はかなり削平されているため、本来の姿をとどめていない。平成 14・15 年度に保存整備に伴う発掘調査を実施した結果、墳丘の復元径は直径約 32m と推定しており、築造は 6 世紀末頃と考えている。現時点で、伊方古墳は単独で存在し、付近に同規模の古墳は見られず前後に連なる首長系譜は判明していない。しかし、伊方古墳を営んだ集団が突然現れる可能性は低く、付近の調査を続ける必要があろう。

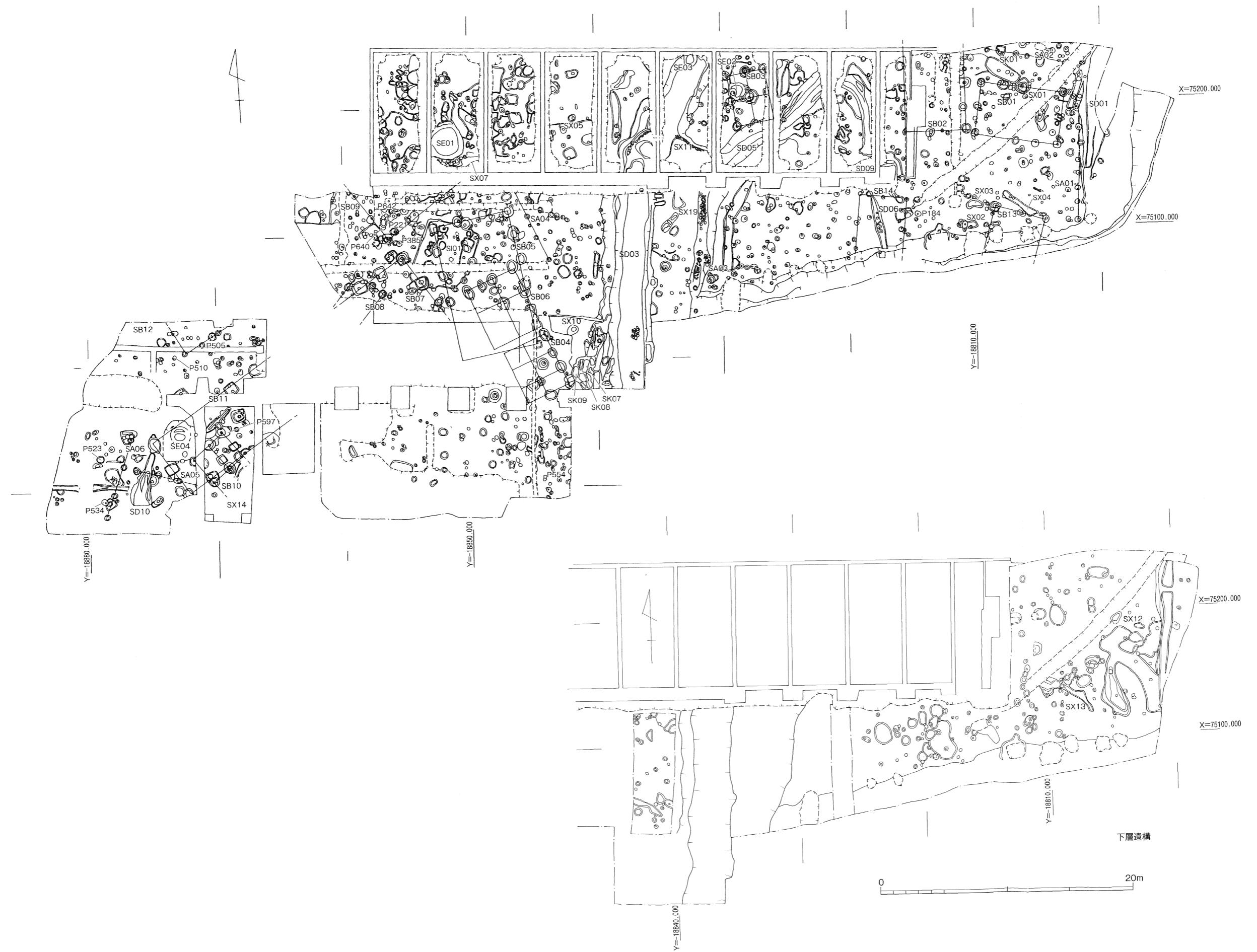


第3図 伊方城園遺跡周辺地形図 (1/25,000)

古代から中世には伊方丘陵では、今回報告する伊方城園遺跡が営まれる。詳細は報告に譲るが、遺構や遺物等から公的な性格も考えられ、依然この地域が中心地であったことを物語っている。伊方の地名は「伊方庄」として資料に残ることからも推定できる。「伊方庄」は成立、境界域等不明な部分が多いが鎌倉時代以降の資料に散見できる。南北朝時代以降室町期までは佐田氏による知行が行われ、伊方丘陵上には伊方石丸遺跡の井戸、今回報告する伊方城園遺跡等で鎌倉時代～室町時代の遺構も見られることを裏付けている。また、英彦山修験道の盛行により岩屋には建武二年(1335年)建立の磨崖梵字曼荼羅が残されており、中世山城もいくつか知られる。平安時代末期平家方の築城とされる弁天城、戦国時代では豊前国古城記によると新田城、弥次郎畠城が存在し、他にも貴船城、伊方城等が存在した。また、町内には古屋敷、平家屋敷などの地名も残り城や屋敷の名残が認められる。これらの城址、屋敷などのほかに寺のつく地名も残る。

近世になると周辺では上野焼が知られ町内でも弁城に岩屋高麗窯が営まれる。皿山窯、釜の口窯と並び近世上野焼を代表する窯のひとつとして注目されている。

近代は方城だけでなく筑豊地方全体が石炭と歩んだ時代であった。方城では三菱方城炭鉱が有名であり、当時の抗務工作室であった赤煉瓦建物は九州日立マクセル赤煉瓦記念館として国の登録文化財に指定され今も残されている。



第4図 伊方城園遺跡遺構配置図（1/300）

III 調査の記録

1. 調査の方法

(1) 経過と記録の方法

伊方城園遺跡の調査は、試掘調査後、平成 13 年 11 月 1 日より実施した。調査地は、大きく北側と南側とに分かれるが、特に地区設定はしていない。調査は解体工事との日程調整から調査区北側より行った。バックホーによる遺跡内の表土剥ぎののち、東北部より人力による遺構の検出を開始した。その後、平安時代末頃と考えられる建物を検出した。さらに、中央付近では、複数の大型建物群、井戸などを検出した。遺構の残存状態が良く柱穴の深さが 1 m 以上のものもある。調査は、2 月 11 日の現地説明会以後、北側より解体工事と調査を並行して行い、3 月 8 日に終了した。

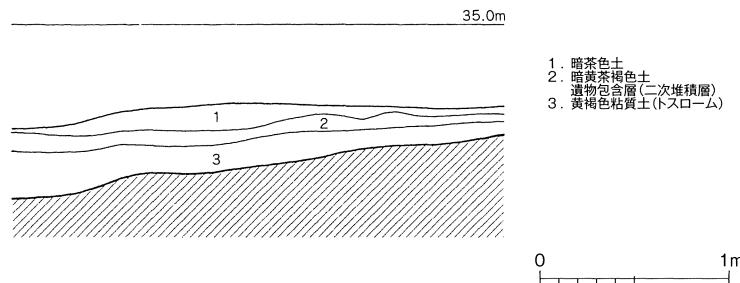
調査区の杭設定は、旧校舎のコンクリート基礎が残っていたため、基礎の軸に併せて行った。そのため、座標より若干東に触れる。この杭に併せて、20 分の 1、10 分の 1 の遺構図や、地形測量図を作成した。遺構の登録については、略記号を使用した（例言参照）。これらのうち、報文で欠番となるものは、発掘・整理の過程で該当遺構と認められなかつたものである。そのため、報告では割愛した。ただし、遺物取り上げの際、原図にも番号を付しておき追認可能である。

主な検出遺構として、古墳時代の竪穴住居 1 棟、古代以降の掘立柱建物 14 棟（古代 10、中世 4）、柵 6 条、井戸 4 基、土坑 4 基、溝 6 条、特殊遺構 6 基などを検出した。

(2) 基本層序（図版 4、第 5 図）

遺跡は、遠賀川水系彦山川に面しながら福知山山麓から南に派生する丘陵上の南側に立地している。そのため、丘陵先端付近は河川により削平された状態となって、台地状の地形となっている。調査以前は、学校用地であった。

試掘調査の結果では、遺跡西北部の地形が最も削平を受け、東～南側では、盛土で嵩上げがおこなわれていた。そのため、中央部～南と東側では、遺構が良好に残存していた。基本土層は、調査区東側の削平を受けてない箇所で作成した。1 層は暗茶色土である。上面は、古代、中世の遺構検出面となる。遺跡内で削平を受けてない箇所で、ほぼ普遍的にみとめられる。2 層は、暗黄茶褐色土である。弥生・縄文時代の遺物が認められる。二次堆積層と考えられる。3 層は、黄褐色粘質土である。自然堆積層で Aso-4 火碎流による鳥栖ロームである。これより下位の土層観察は行っていないが、西北部の削平箇所では八女ロームが観察できた。さらに下位には、流紋岩礫層が混在し花崗岩盤に到達する。井戸 SE01 はこの岩盤上まで掘り込まれている。



第 5 図 調査区土層図 (1/40)

2. 古墳時代の遺構と遺物

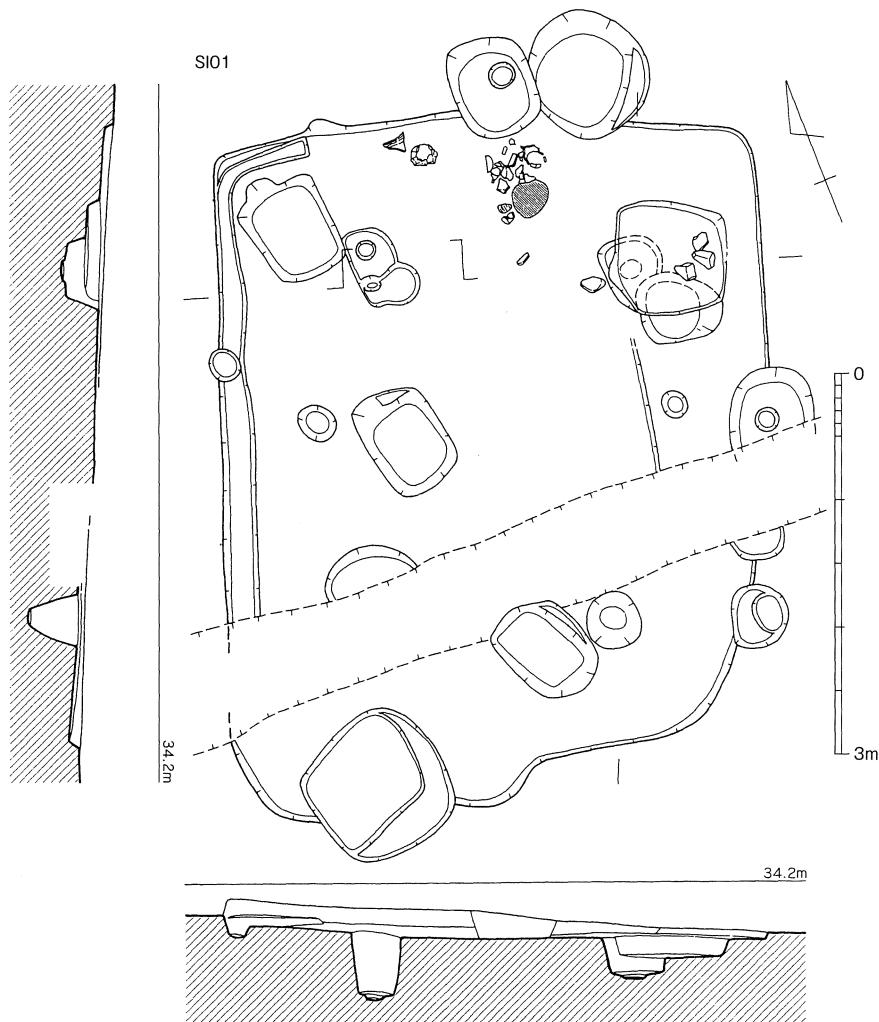
(1) 穫穴住居

SI01 (第6図)

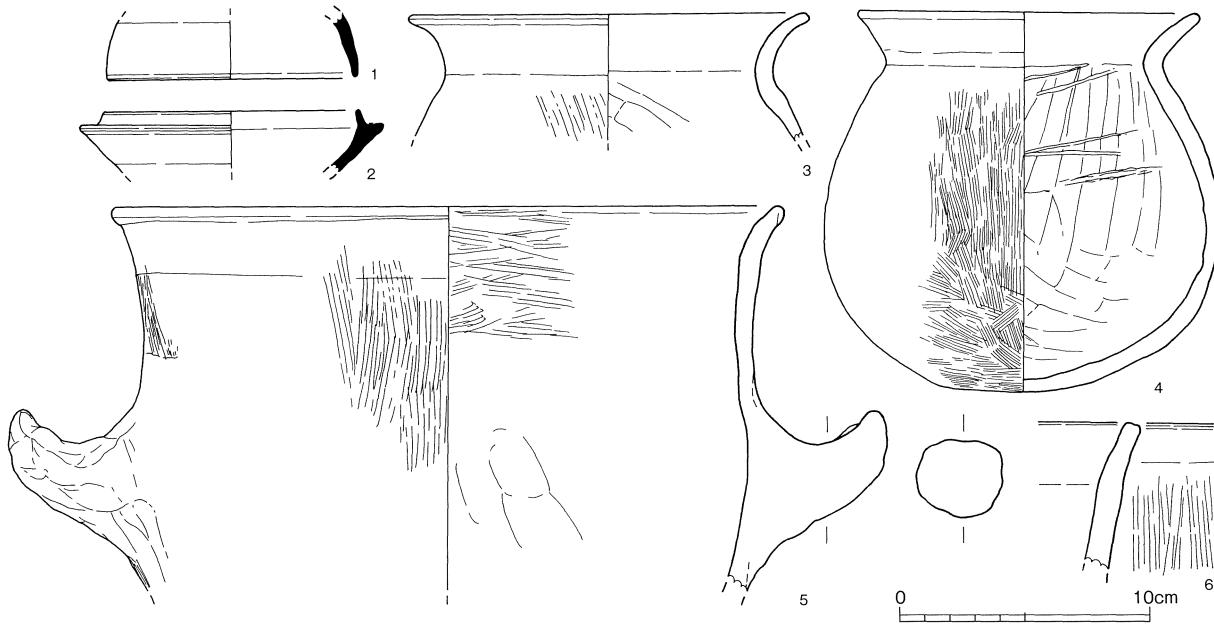
調査区中央西側で検出した。SB05、07に切られる。平面プランは隅丸方形を呈しており、長軸5.10m、短軸4.20mを測る。主軸方位はN 32°Eである。上部が大きく削平されており、壁高は残りの良い場所で0.20mを測る。また、西側には上縁幅0.20m程度の壁溝が巡る。主柱穴は、4本柱であり、最も残りの良いところで床面から深さ0.50mを測る。北壁中央付近で焼土を確認したが、カマドの壁体片などは検出できていない。遺物もこの北壁中央付近の床面上より、まとまって出土した。出土遺物から6世紀後半頃の年代が与えられる。

出土遺物 (図版15、第7図)

1・2・6は黒褐色土埋土中から、3～5は床面上よりそれぞれ出土した。1の須恵器壺蓋は、復元口径9.6cm、2の壺身の口縁部は低く内反する。3の土師器甕の口縁部は大きく外反し、内面頸部下位はケズリ。4の土師器甕は球形の胴部と鋭く外反する口縁部に特徴がある。内面頸部の下位はケズリ後に一部工具によるナデ。5・6は土師器瓶。5は外反気味の口縁部が肥厚し、内面には横位のハケ。6は角張る口縁端部をナデて、沈線状の溝みが入る。



第6図 穫穴住居 SI01 実測図 (1/60)



第7図 積穴住居 SI01 出土土器実測図 (1/3)

3. 古代以降の遺構と遺物

ここでは、掘立柱建物や井戸、溝を中心とする主に古代から中世にかけての遺構と遺物について報告する。また、比較的新しいと考えられる時期不明の遺物についても併せて報告する。

(1) 掘立柱建物

SB01 (図版5・8、第8図)

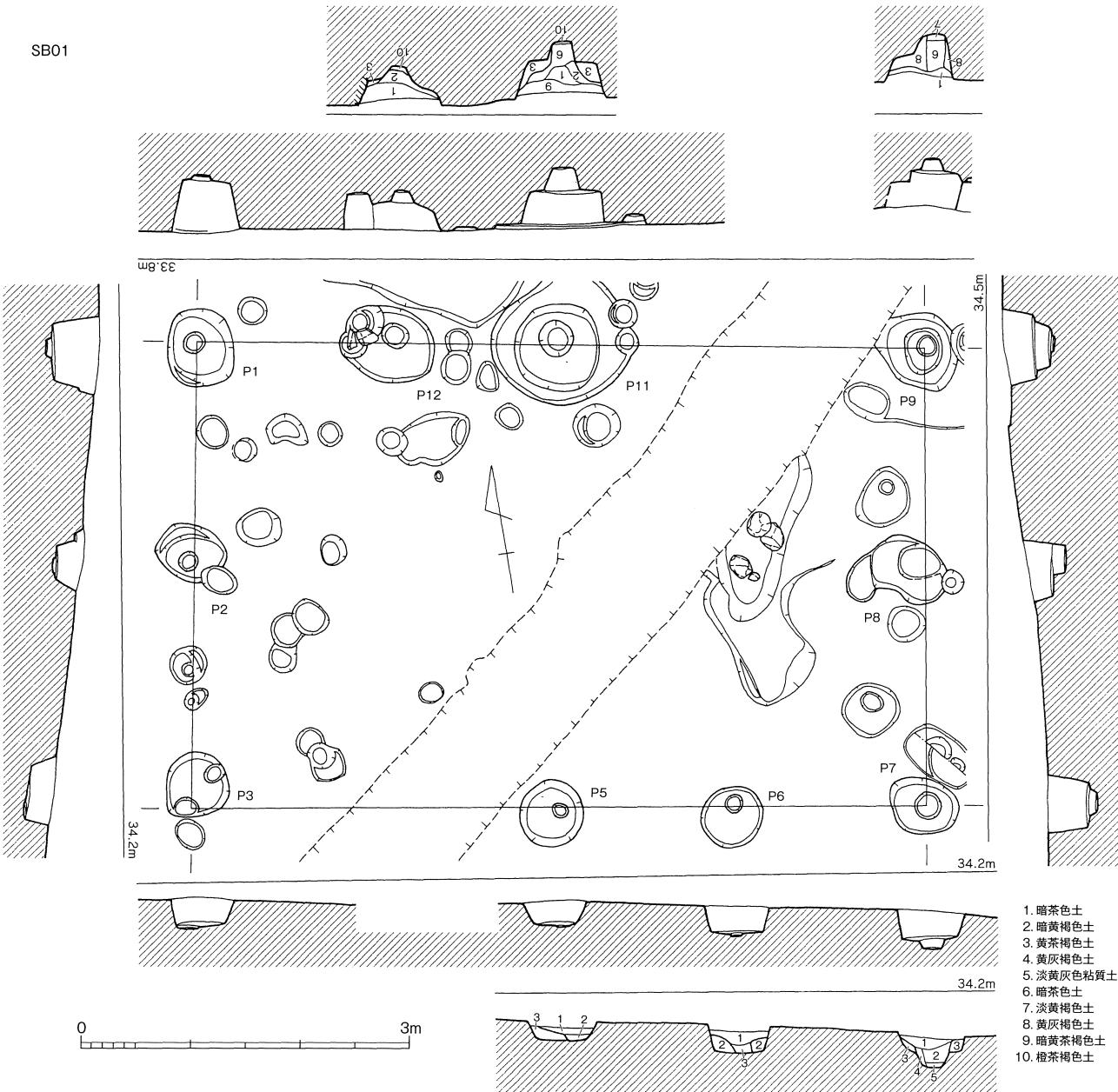
調査区東端で検出した 4×2 間の東西棟建物である。斜面部に配されており、下位では柱穴の上部が大きく削平を受けている。また、東北から南西にかけて大きく搅乱を受けている。桁行長は南北どちらも 6.60 m である。残る柱穴から、北側の柱間は西から 1.80 m、1.50 m、南側柱間は東から 1.80 m、1.50 m となる。そのため、中央 2 間 1.50 m、両端間が 1.80 m であることが分る。梁行長は 4.20 m で、柱間は 2.10 m の等間となる。柱掘形は平面長楕円形や円形を呈しており、北側の残りの良いもので上縁 0.80 m、深さ 0.50 m 程度である。埋土は黒褐色土が深く落ち込んで堆積しており、版築状ではない。いずれも柱痕跡を残している。座標北に対し、 $10^{\circ} 33' 50''$ 東偏する。

出土遺物 (図版15、第15図)

1～4 は、いずれも柱穴の埋土より出土。1 は大型の土師器壊蓋で口端部を肥厚する。8 世紀後半以降であろう。2～4 の土師器は、胎土と焼成を見る限り古墳時代に属する。2 は小壺、4 は甕。

SB02 (図版5、第9図)

調査区東端で検出した。桁行 3 間 + α 、梁行 2 間の南北棟建物で、さらに北側に伸びる可能性がある。斜面下位では柱穴上部が大きく削平されている。現状で桁行長は、東西共に 5.4 m、柱間は 1.80 m の等間となる。また南側梁行は 4.80 m で、柱間は東より、2.70 m、2.10 m となる。柱掘形の平面は、長楕円形や円形を呈しており、上縁 0.60～0.80 m、深さ 0.20～0.60 m となる。



第8図 掘立柱建物 SB01 実測図 (1/60)

柱痕跡が明瞭なものと、不明瞭なものがある。座標北に対し、 $5^{\circ} 51' 56''$ 西偏する。

出土遺物（第15図）

5は須恵器甕の胴部片。外面のタタキが格子状に巡る。古墳時代資料である。

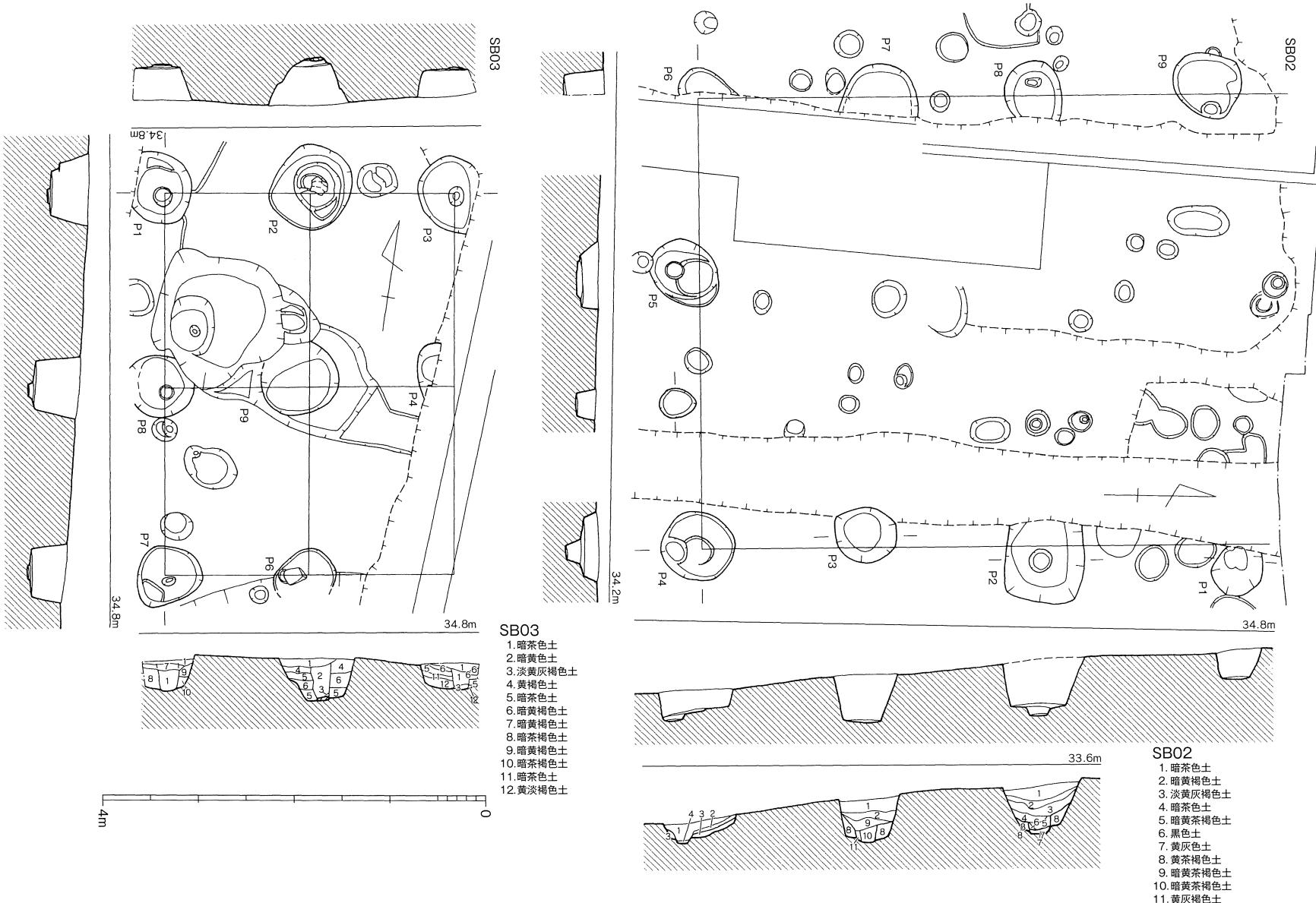
SB03（図版5、第9図）

調査区中央北側で検出した 2×2 間の総柱建物である。SE03やSD05に切られ、学校基礎の搅乱を受けている。南側の桁行長は4.00 mで、柱間は2.00 mの等間となる。また西側梁行長は、3.00 mで、柱間は1.50 mの等間となる。柱掘形はほぼ円形を呈しており、上縁0.70～0.90 m、深さ0.50 m程度である。柱穴床面には礎板となる根石が置かれているものもある。いずれも柱痕跡を残しており、柱を切り取りしたとみられる。座標北に対し、 $9^{\circ} 25' 48''$ 西偏する。

出土遺物（第15図）

6は朱塗りされた弥生時代中期頃の土器片である。

第9図 挖立柱建物 SB02・03 実測図 (1/60)



SB04 (第 10 図)

調査区中央南端で検出した 3×2 間の総柱建物である。西側に大きな搅乱を受け、北側で SB06 を切る。東側桁行長は 4.50 m で、柱間は 1.50 m の等間となる。南側梁行長は 3.63 m で、西から 1.80 m、1.83 m となる。柱掘形は、平面長楕円形や円形を呈しており、上縁 0.70 ~ 0.80 m、深さ 0.40 m 程度である。埋土は黒褐色土と黄褐色土の互層で粗い版築状である。一部柱痕跡を残すものもある。座標北に対し、 $24^{\circ} 47' 48''$ 西偏する。12世紀中頃を下限に考えることができる。

出土遺物 (第 15 図)

7 は玉縁口縁を持つ白磁IV類片である。柱穴掘形内に柱痕跡を確認できなかったため、柱の抜き取り後に混入した下限を示す資料であろう。

SB05 (図版 6・8、第 11 図)

調査区中央付近で検出した 5×3 間の南北棟建物である。南側が搅乱を受けている。また、SB06 を切る。東側桁行長は 10.50 m で、柱間は北から 1.80 m、2.10 m、2.10 m、1.80 m、2.70 m となる。西側の柱間は東から、1.80 m、2.10 m、2.10 m となり、東側桁行き同様の柱間である。梁行長は 6.00 m で、柱間は 2.00 m の等間となる。柱掘形は、平面長楕円形を呈しており、一部不定形なものもあるが、一辺は 0.60 ~ 0.90 m を測る。深さは、残りの良いもので約 0.60 m ある。埋土は黒褐色土や黄褐色土の粗い互層から成る。柱痕跡は 0.18 ~ 0.20 m であり、一部抜き取りされている。座標北に対し、 $8^{\circ} 11' 31''$ 西偏する。

出土遺物 (図版 15、第 15 図)

8 ~ 15 はいずれも柱穴出土資料。8・9 は須恵器环蓋で、9 はボタン状の攝みから 8世紀前半代であろう。10・11 は高坏の脚部で 7世紀後半頃であろう。12 は須恵器甕片で一部自然釉がかかる。13 ~ 15 は土師器甕片。15 は赤色に焼成され、胎土は精良である。

SB06 (図版 6・9、第 10 図)

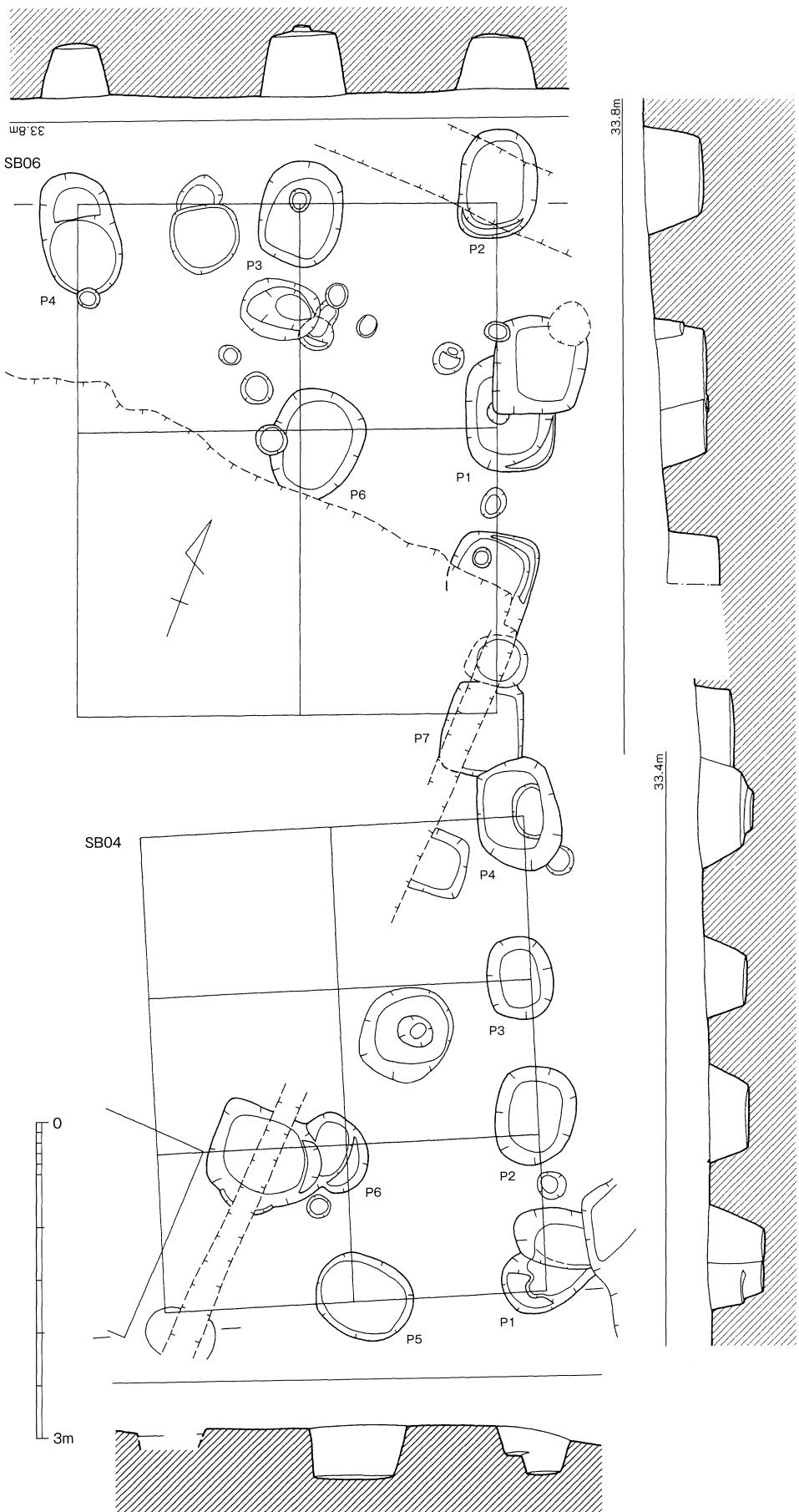
調査区東端で検出した 2×2 間の総柱建物である。南西付近が大きく搅乱を受けている。また、SB04・05 に切られる。東側桁行長は、4.80 m を測る。柱間は北から 2.10 m、2.70 m となる。梁行長は 3.00 m で、柱間は 2.10 m、1.90 m となる。柱掘形は長楕円形で、長軸では 1.00 ~ 1.10 m の大きさを測る。深さは約 0.60 m 程度である。埋土は黒褐色土や黄褐色土の版築状の互層から成る。柱痕跡を残しており、0.18 ~ 0.20 m を測る。座標北に対し、 $23^{\circ} 43' 27''$ 西偏する。

出土遺物

16 は P 1 の上部から出土した。低高台で、椀状の形態を取る土師器椀。17・18 は土師器鉢片、19 は土師器甕。特に 18 は、赤色に焼成され胎土は精良である。7世紀後半以降であろう。

SB07 (図版 6・7・9、第 12 図)

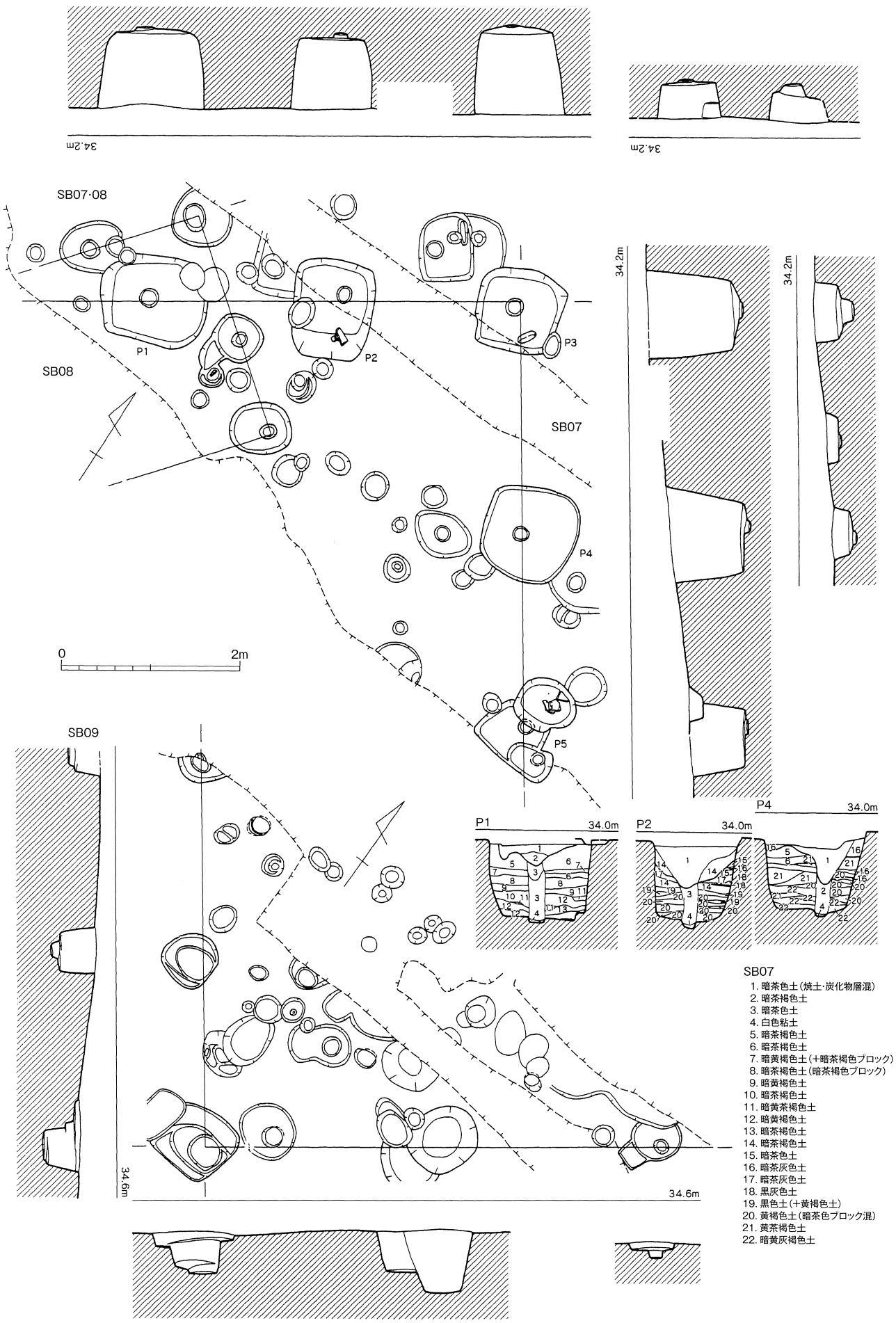
調査区中央付近で検出した 2×2 間以上の東西棟建物である。西側が大きく搅乱を受けている。また、SB08 を切る。配置状況を見る限り、SB11 と並んでいる。北側桁行柱間は東から、1.80 m、2.10 m だが、東側梁行柱間は北から 2.40 m の等間となる。柱掘形は隅丸方形を呈しており、一辺 0.90 ~ 1.20 m を測る。深さは、残りの良い所で 1.20 m 程度ある。P 2 の埋土上部には、焼



第10図 挖立柱建物SB04・06実測図(1/60)



第 11 図 掘立柱建物 SB05 実測図 (1/60)



第12図 掘立柱建物SB07～09実測図 (1/60)

土や炭化物が混じっていた。また、掘形埋土は黒褐色土や黄褐色土の粗い互層から成る。0.18～0.20 mの柱痕跡を残しており、切り取りされたとみられるが、最下部は粘土化していた。またP 2、P 5には、柱痕跡上部に瓦片が落ちこんでいた。座標北に対し、 $33^{\circ} 23' 21''$ 西偏する。

出土遺物（図版 15、第 15 図）

20 は P 2 出土の土師器椀で、低く鋭い高台から直線的に立ち上がる体部の特徴から 8 世紀末頃の特徴を持つ。建物の上限を考える上で重要である。21 は口端部が内傾する土師器甕。

SB08（第 12 図）

調査区中央付近で検出した 3×2 間以上の建物である。SB07 に切られる。周辺の搅乱が激しく、本来の建物規模を特定できない。北側柱間は東より 1.10 m、1.50 mとなるが、さらに西側に求めた場合は搅乱部にあたり不明である。西側の柱間は 1.20 mである。柱間から、総柱建物が想定される。柱掘形は 0.50～0.60 m の円形や長楕円形で深さ約 0.50 mとなる。座標北に対し $39^{\circ} 2' 26''$ 東偏する。

SB09（第 12 図）

調査区中央付近で検出した 2×2 間以上の建物である。学校基礎の搅乱や造成によって削平を受けている。西側の柱間は 2.10 m の等間となる。南側は西より 2.70 m、2.40 m となる。柱掘形は 0.60～0.80 m の隅丸方形で、深さ 0.40～0.70 m を測る。座標北に対し $54^{\circ} 30' 14''$ 東偏する。

SB10（図版 7、第 13 図）

調査区西端で検出した 3×2 間以上の総柱建物である。東や南側は大きく削平を受けており規模は不明である。北側の東西柱間は西より 1.65 m、1.50 m、1.80 m となる。確認できる西側の南北柱間の 1 間分は 2.40 m である。柱掘形は円形を呈しており、一部隅丸形も見られる。残りの良いもので上縁 1.00～1.20 m、深さ 1.00 m 程度である。いずれも柱痕跡を残しており、径 0.20～0.25 m を測る。埋積土は、黒色土と黄褐色土の版築状の互層となる。遺物はほとんど含まれない。また、柱の下端部は礫を巻くように根固めしている。このような状況や柱穴の平面形態から、倉庫であった可能性が高い。座標北に対し $49^{\circ} 8' 0''$ 東偏する。

SB11（図版 7、第 13 図）

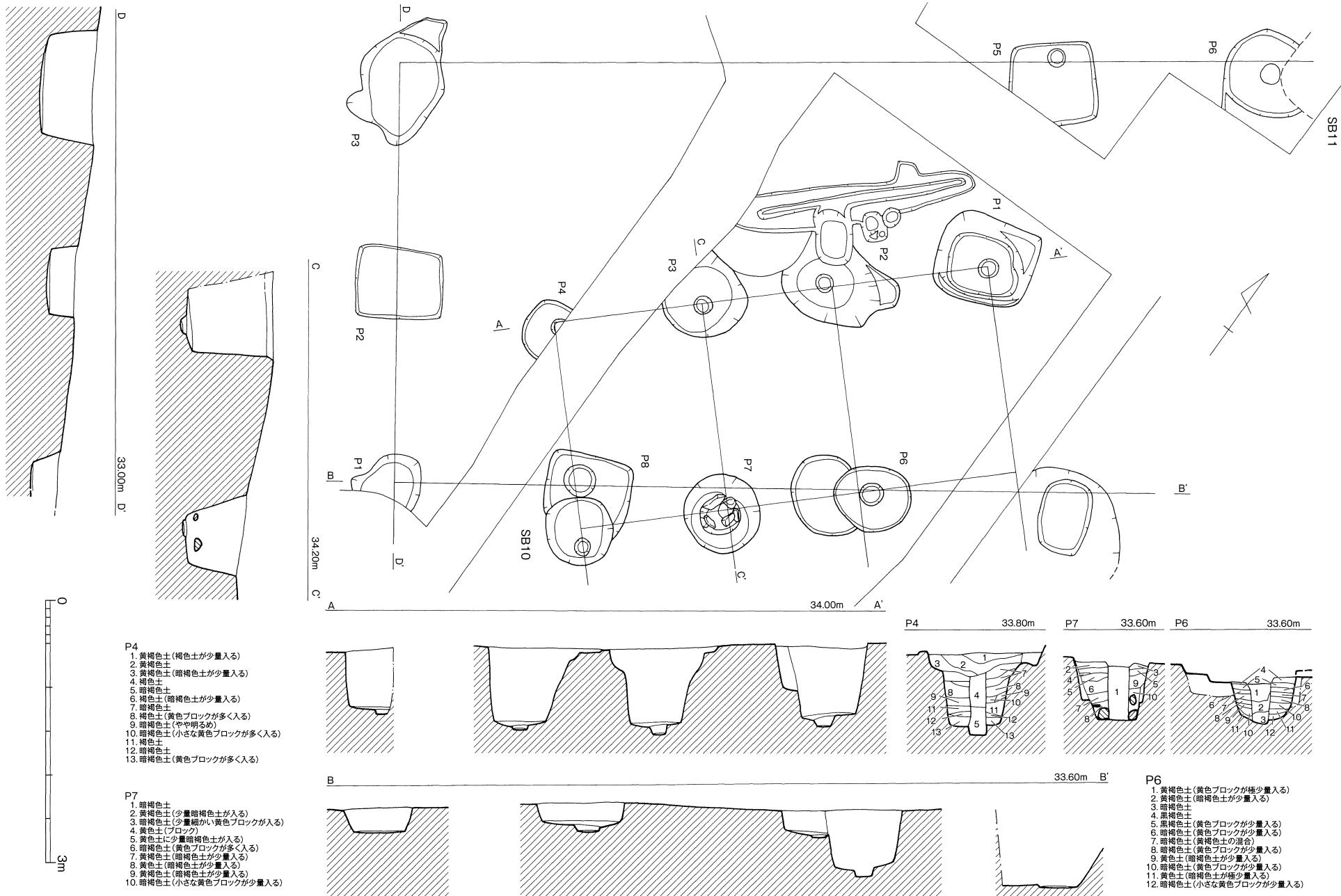
調査区東端で検出した 4×2 間以上の東西棟建物である。SE04 に切られる。また、学校基礎によって大きく搅乱を受けている。SB07 と柱間や規模が同じで、現状では東西に並列した状態に復元できる。桁行、梁行共に 2.40 m の等間である。柱掘形は隅丸方形を呈し、一辺 0.80～1.00 m の規模となる。深さは残りの良いもので約 0.60 m を測る。埋積土は黒褐色土、黄褐色土などが版築状の互層となっている。柱痕跡が確認できるもので、径は約 0.20 m である。座標北に対し $36^{\circ} 5' 28''$ 西偏する。

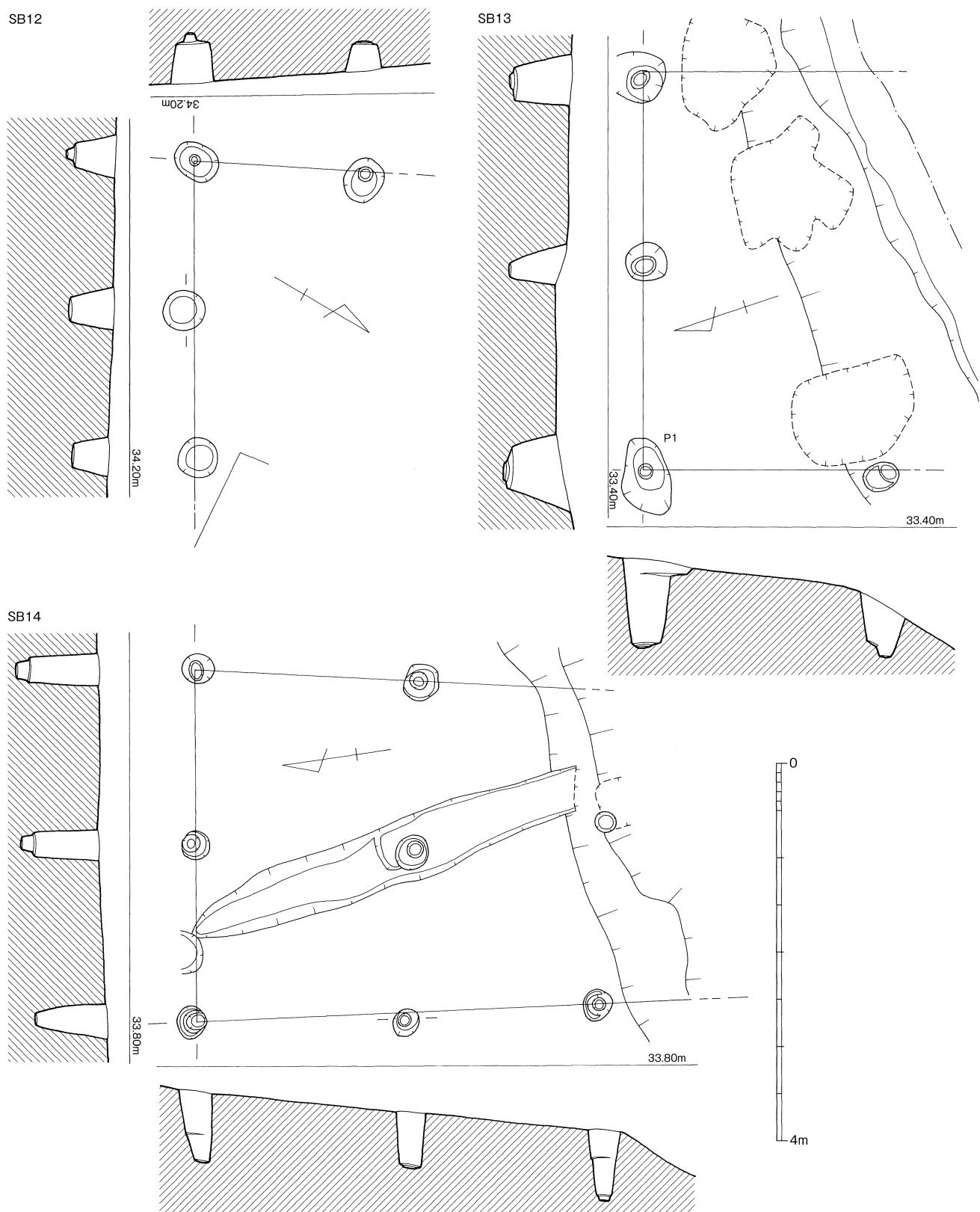
SB12（図版 7、第 14 図）

調査区西端で検出した。 2×2 間以上の掘立柱建物である。東西の柱間は、1.60 m、1.60 m、

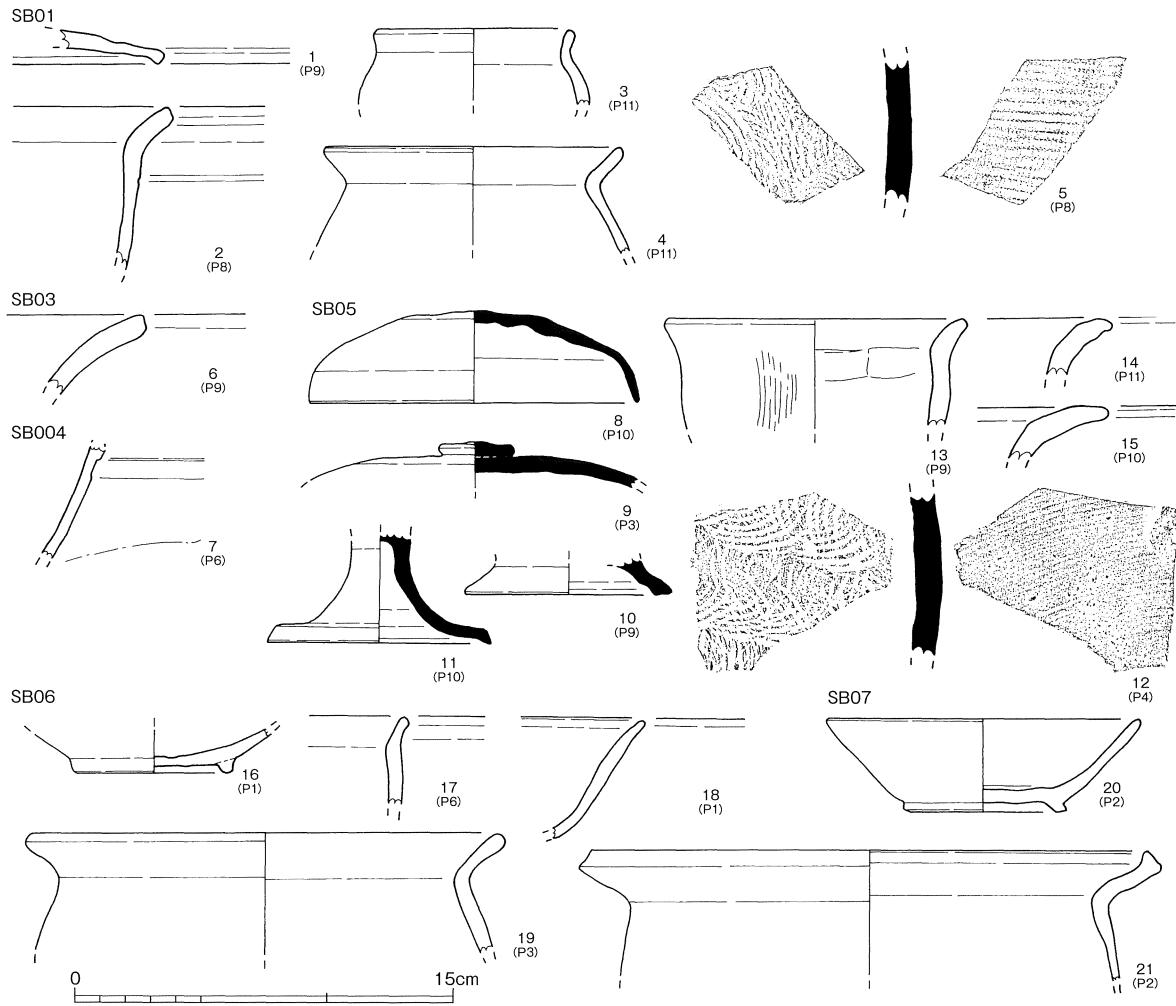
第13図 挖立柱建物SB10・11実測図 (1/60)

- 17 -





第14図 掘立柱建物 SB12～14 実測図 (1/60)



第15図 掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)

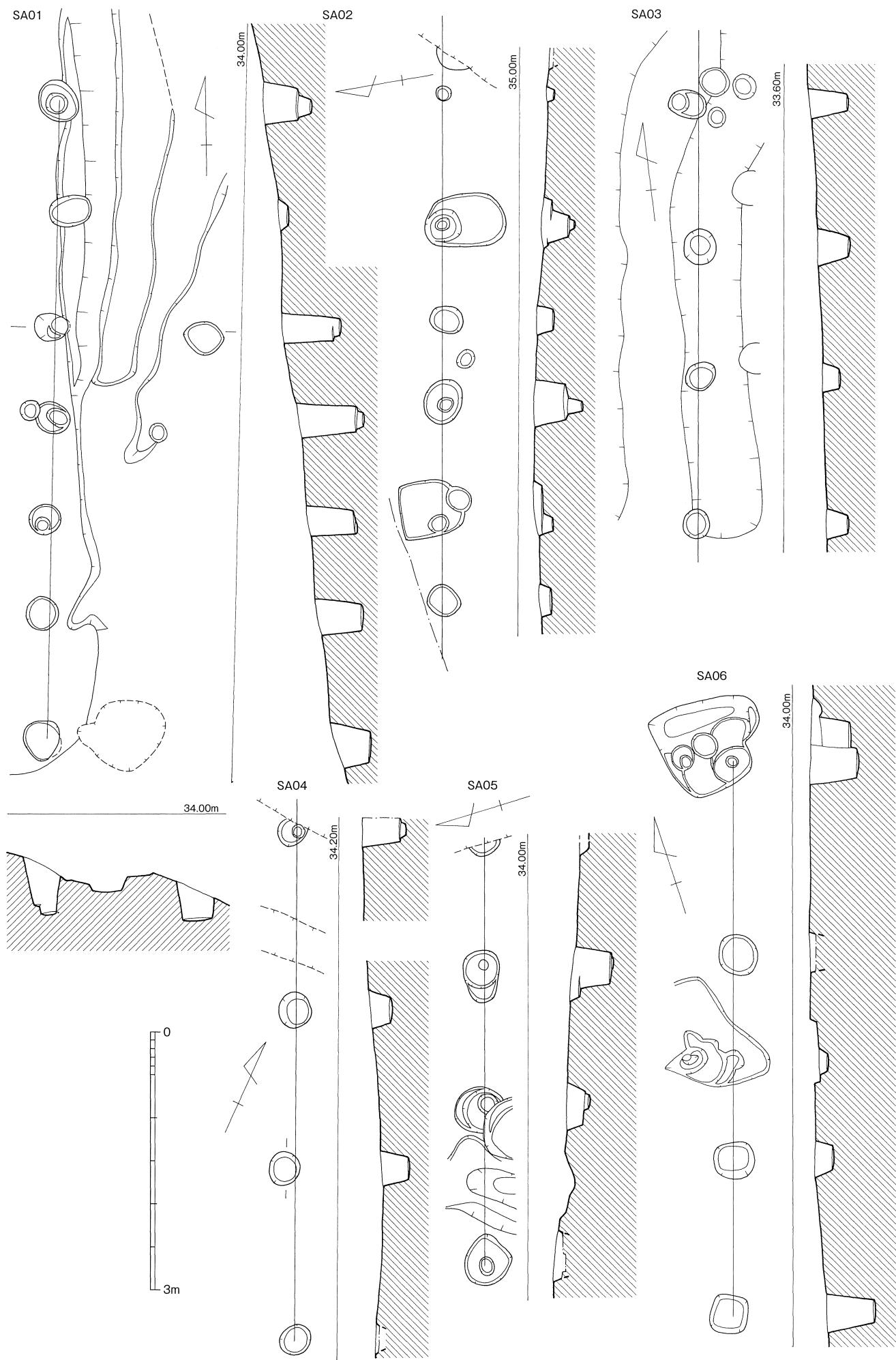
南北は1.80mである。柱掘形は0.40m、残りの良いもので深さは約0.60m前後である。一部床面付近で0.15m程度の柱痕跡が確認できた。座標北に対して $26^{\circ} 59' 22''$ 西偏する。

SB13 (第14図)

調査区東端で検出した。2×2間以上の南北棟建物である。南側が大きく削平されている。確認できる西側の桁行柱間は2.70mである。梁行長は4.20mで、柱間は2.10mの等間となる。柱掘形は0.30～0.40m、深さは0.70m前後である。東隅が抜き取りされるが、他は0.15m程度の柱痕跡を残す。座標北に対し、 $19^{\circ} 56' 54''$ 東偏する。

SB14 (第14図)

調査区東端で検出した。2×2間以上の南北棟建物である。南側が大きく削平されている。桁行西側の柱間は北から2.20m、2.00mである。梁行長3.70m、柱間は1.85mの等間となる。柱掘形は0.30～0.40m、深さは0.60～0.80mである。削平を考慮しても南側が深くなっている、緩斜面上に置かれたことが分る。いずれも柱痕跡を残す。座標北に対し、 $13^{\circ} 32' 10''$ 東偏する。



第16図 構 SA01～06 実測図 (1/60)

(2) 槵

SA01 (第 16 図)

調査区東端で検出した。南北方向 6 間の柵である。総長約 7.40 m で、柱間は約 1.10 ~ 1.50 m である。柱穴はいずれも円形で、0.35 ~ 0.50 m を測るが、斜面上部に向かうに連れて深くなり、残りの良いもので 0.73 m を測る。そのため標高 32.4 ~ 32.6 m 付近が柱穴の床面となる。柱痕跡を残し、残りの良いもので径 0.15 m ある。主軸方位は 6° 19' 49" である。

SA02 (第 16 図)

調査区東北で検出した。東西方向 3 間分以上に広がる柵である。さらに西側の調査区外に延びている。現存長約 6.50 m を測る。柱掘形は 0.30 ~ 0.40 m、深さは残りの良いもので 0.40 ~ 0.60 m 程度である。柱間は 0.90 ~ 1.40 m で等間にならない。座標北に対して主軸方位は 79° 43' 46" 西偏する。S B 01 とほぼ軸が同じであり、検出状況からも同時期に比定される。

SA03 (第 16 図)

調査区中央付近で検出した南北方向 3 間の柵である。S D 03・05 と並走している。総長 4.90 m を測る。柱間は北より 1.70 m、1.50 m、1.70 m となる。柱掘形は 0.30 ~ 0.40 m、深さ 0.40 m を測る。座標北に対し、9° 53' 41" 東偏する。出土遺物は無いが、S D 03 等と同時に考えて良いであろう。

SA04 (第 16 図)

調査区中央西側付近で検出した南北方向 3 間の柵である。現状で総長 5.90 m を測るが、さらに北側に延びる可能性がある。柱間は北から 2.10 m、1.80 m、2.00 m になる。柱掘形は 0.30 ~ 0.40 m で、深さは残りの良いもので 0.50 m 前後を測る。座標北に対し、24° 57' 46" 西偏する。

SA05 (第 16 図)

調査区西端で検出した東西方向 3 間以上の柵である。S B 11 を切る。現状で総長 4.90 m を測るが、さらに東側に延びる可能性がある。柱間は西より 1.80 m、1.60 m、1.50 m となる。柱掘形は 0.50 ~ 0.60 m で、残りの良いもので深さ 0.50 m 前後を測る。また、径 0.20 m 程度の柱痕跡を残すものもある。座標北に対し、73° 55' 53" 西偏する。

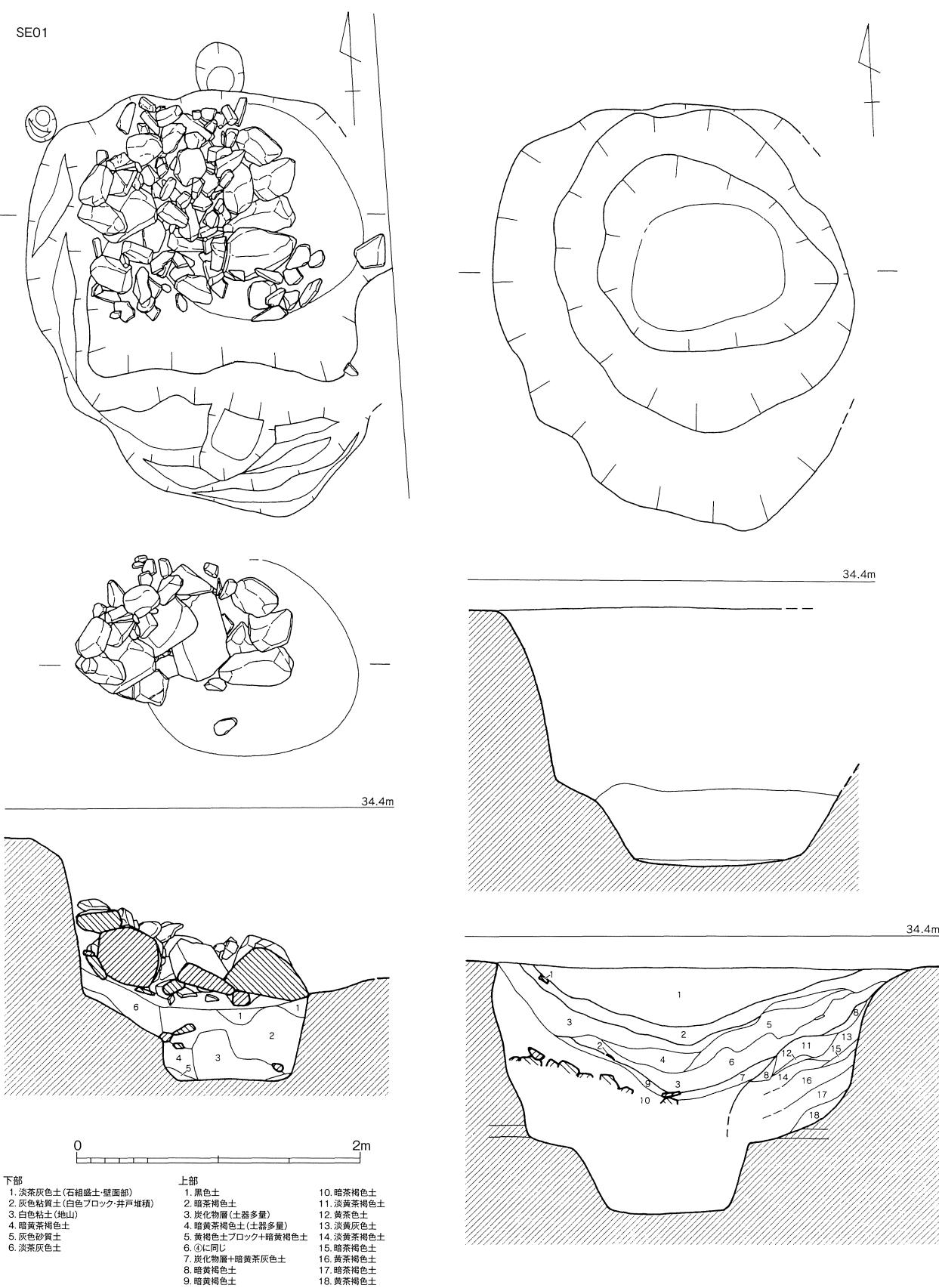
SA06 (第 16 図)

調査区西端で検出した南北方向 3 間以上の柵である。S A 05 に直交する。総長 6.30 m を測るが、さらに南側に延びる可能性がある。柱間は北より 2.10 m、2.40 m、1.80 m となる。柱掘形は約 0.40 ~ 0.50 m の隅丸方形で、深さ 0.60 m 前後を測る。座標北に対し、17° 8' 46" 東偏する。

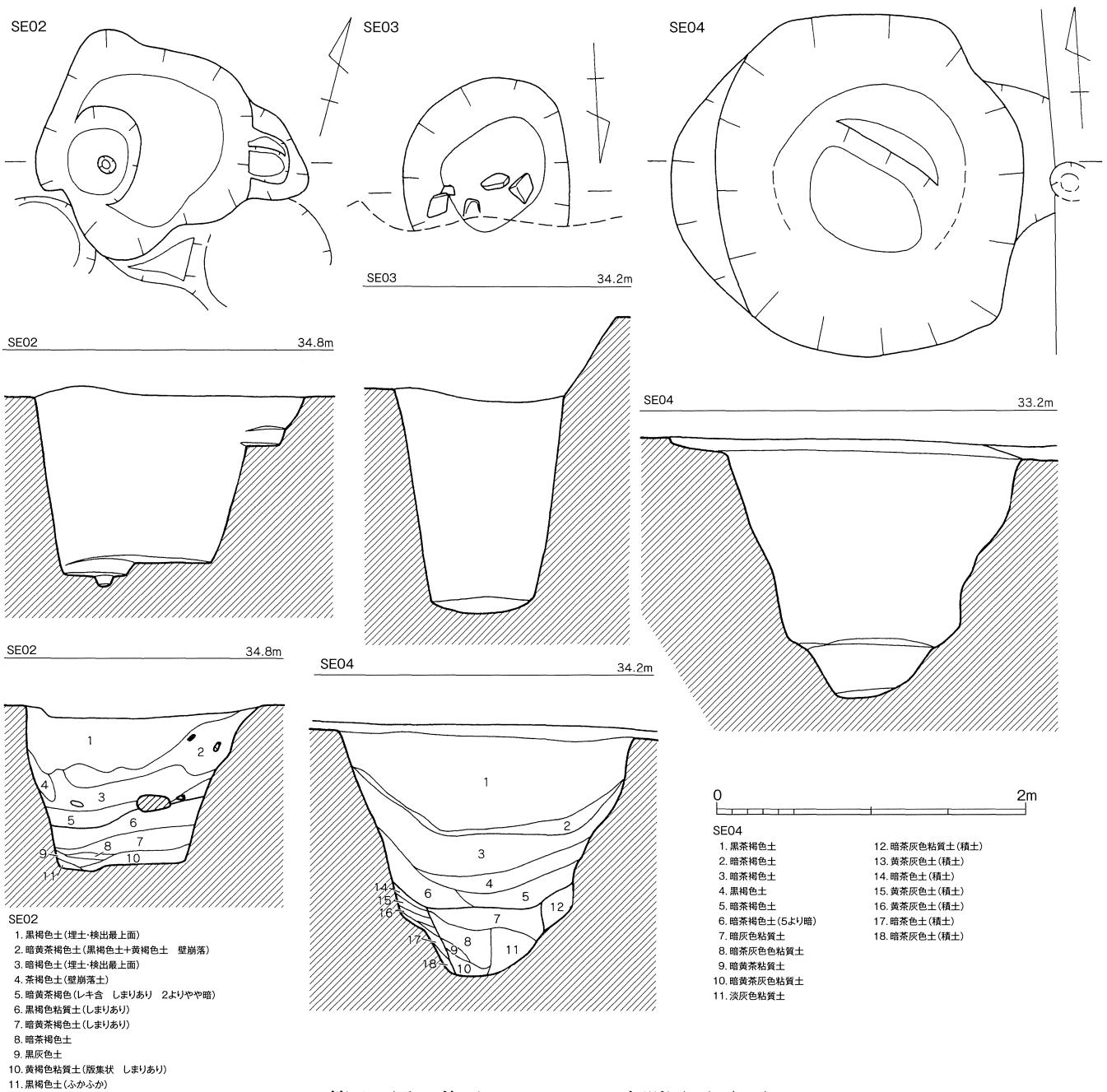
(3) 井戸

SE01 (図版 10、第 17 図)

調査区北西で検出した。平面形は 2.40 ~ 3.00 m の橢円形を呈している。周囲の状況から上部



第 17 図 井戸 SE01 実測図 (1/40)



第18図 井戸SE02～04実測図 (1/40)

はかなり削平を受けているが、それでも残存する深さは1.80 mを測る。また、床面上から0.50 m付近に段を有しているが、この段の下位より僅かに木質が出土しており、木製枠が据えられていた可能性もある。さらに埋土中位には、一部掘形を埋めたと考えられる版築状の層が残る。埋土中位に固まっている礫は円形に配されていたため、調査当初は井戸の石組みが破壊された状況を想定していた。ただし、礫群は円形プランで一箇所にまとまるこことや、石組み中央部には人為的に加工された板状の花崗岩が置かれ、段下位からは礫が出土しないことなどから、これらの礫は井戸廃絶時に置かれた可能性が高い。そして、別地点で被熱した土器等を炭化物や暗茶褐色土と共に埋められたとみられる。それは、出土遺物より12世紀中頃に比定される。最上部の黒褐色土層は出土土器(第19図1・5)から、13世紀頃までには堆積して完全に埋没したと考えられる。

出土遺物（図版 15、第 19・20 図）

ここでは、取上げた層位ごとに報告する。遺構の廃絶状況とも関係するが、最上層黒褐色土を除いて時期的变化のない出土状況である。さらに、最下層で陶磁器片などが見られない点は、時期差と理解するより、遺構廃絶の手順と遺物廃棄の過程を示すものであろう。

1～6 は最上層の黒褐色土より出土した。1 の土師器小皿は体部がやや外反する。2 の瓦器碗は強い横ナデによって口縁部が肥厚して端部に沈線が巡る。高台は鋭い三角形で、内外面共に丁寧な横位のミガキ。3・4 は玉縁口縁の白磁碗IV類。5 は直立する口縁端部に口禿が見られ、また外面に横位の沈線が走る。龍泉窯系の碗か。6 は須恵質土器で焼成は緻密で端部が肥厚する。

7～13 は炭化物層直上となる暗茶褐色土出土。7 は丸みを持って内湾する瓦器碗の体部片。横位を中心とした丁寧なミガキを内外面に施し、口縁部は帯状に燻された痕跡がある。8 は瓦器碗の底部片で方形高台を丁寧な横ナデで仕上げる。9 は玉縁口縁の白磁IV類。10 は白磁V類の底部片で高台部は露胎。復元底径 5.6cm。11・12 は白磁皿。12 はIII-1 類で内面の釉を輪状に掻き取る。13 は外面に縦位の櫛目文を持つ同安窯系の碗III-1 類。

14～23 は炭化物層出土。14・15 の土師器小皿はどちらも口径 8.8cm。16～18 は土師器壺 a。16 の体部下端付近は強いナデにより稜がつく。口径 15.1cm、底径 10.0cm、器高 3.0cm で底部は糸切り。18 は口径 16.4cm、底径 10.2cm、器高 3.45cm。二次的に被熱。19・20 は瓦器碗。19 は大きく内湾気味の体部に対して底部径は 6.0cm 程度。20 の高台は低いが丁寧なナデによって仕上げる。21 は白磁IV類、22 はIV-1 類、23 は同安窯系の青磁碗 I-1a 類、24 は白磁合子片。

25～44 は暗黄茶褐色土出土。出土状況から一括性が高い。25・26 は土師器小皿で 25 の復元口径は 5.8cm。27 は口縁端部を嘴状に屈折する土師器蓋。内面に煤が付着しており灯明皿としたか。28 の土師器壺の体部は強いナデによって稜線を持つ。29～33 は土師器壺 a。29 は底径が小さく体部がやや外半するが、他の土器は口径 15.6～16.3cm、底径 10.0cm、器高 3.5～3.9cm と齊一性が高い。底部は 32 に板状圧痕が見られる他は糸切り。34 は土師器碗底部片。35～37 は瓦器碗底部片。35・36 の高台部は細く鋭く、37 は方形で丁寧な作り。38～41・43 は白磁類。38 は IV 類、40・41 は V 類、42 は同安窯系碗。43 は IV-1b 類の底部片。44 は須恵質土器甕の底部片で復元底径 9.0cm。

45～48 は黄褐色土出土。45 の瓦器碗底部は細く鋭い高台。46 の白磁IV類碗は体部に丸みを持つ。47 は内面見込みを掻き取りする白磁皿III類。48 は青白磁の合子で景德鎮窯系か。

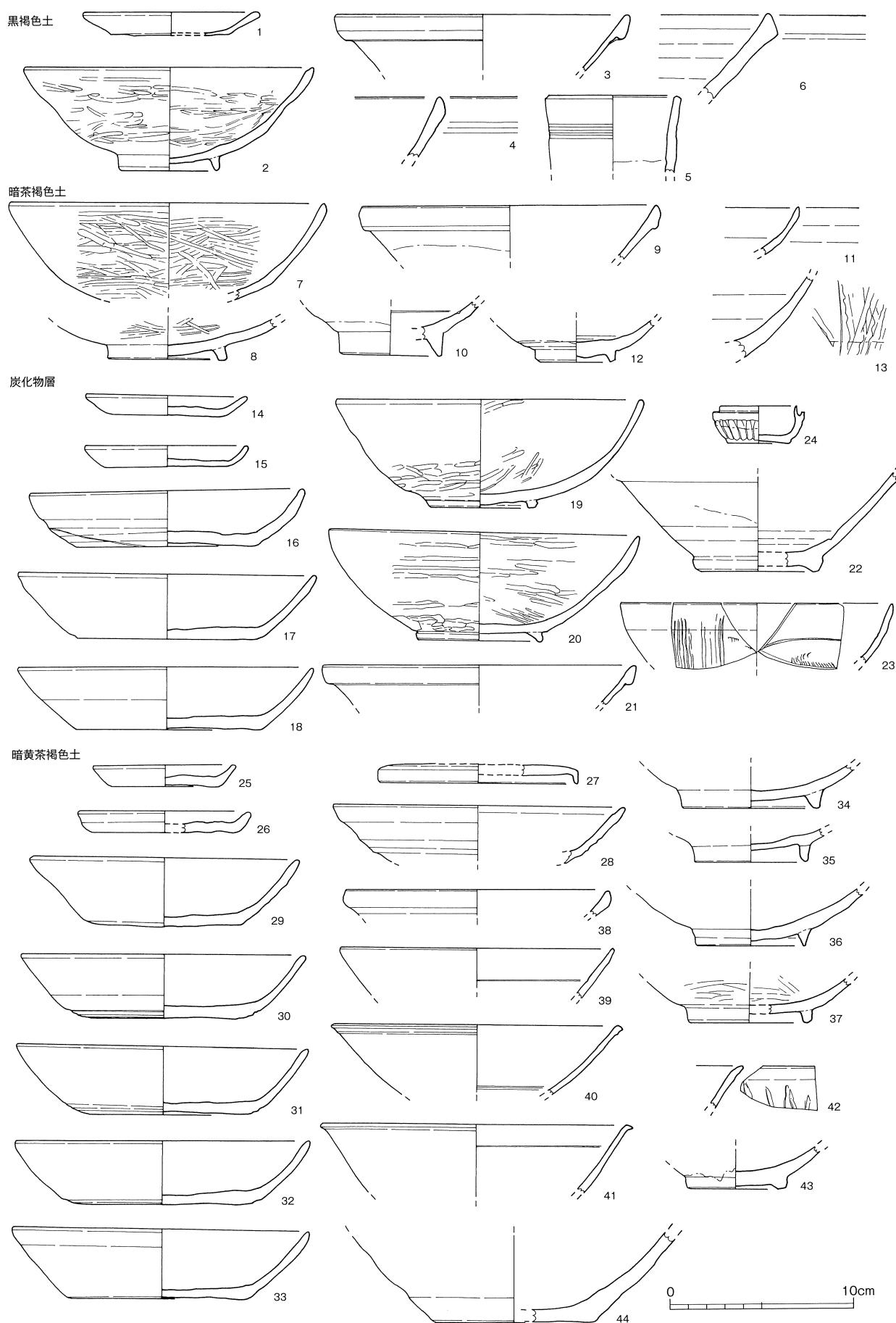
49～53 は最下層・井戸石組み背後の掘形出土。49 の玉縁下位は強い調整のため窪む。51 は石組内出土の須恵器壺片。52 は外面の一部タタキ、把手の痕跡がある。53 は須恵質土器の鉢片。

SEO2 (図版 11、第 18 図)

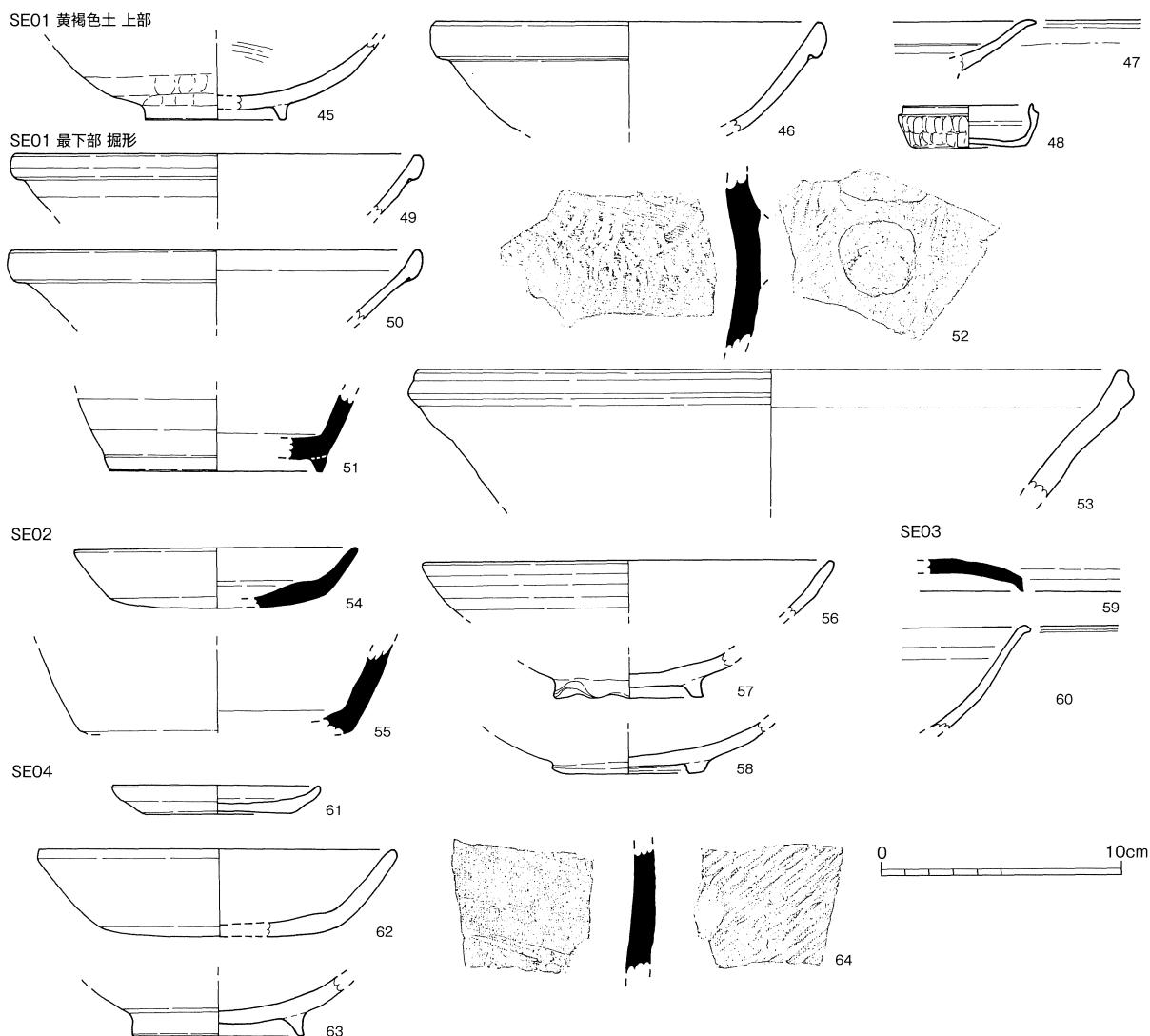
調査区中央北側で検出した。上縁部は崩落し、やや不定形だが、床面は円形を呈している。上縁 1.40～1.70 m、深さ 1.30 m を測る。床面中央部にはピット状の落ちがある。埋土は、上部の黒褐色土以外は版築状の互層であり、礫も水平に堆積している。このことから、井戸は埋め戻されたと考えられ、溜井戸の可能性が高い。出土遺物から 12 世紀前後に比定されよう。

出土遺物（図版 15、第 20 図）

54 は須恵器壺で復元口径 11.6cm。55 は須恵器壺の底部片と見られ、体部下位付近はヘラケズリ。



第19図 井戸 SEO1 出土土器・陶磁器実測図 (1/3)



第20図 井戸SE01～04出土土器・陶磁器実測図（1/3）

56は底部を欠損する土師器坏片。57・58は土師器椀の底部片で、57の高台は少し歪む。

SE03（第18図）

調査区中央北側で検出した。径1.10m程度のほぼ円形を呈し、深さ1.40mを測る。SD03の床面を下げる過程でプランを確認できた。埋土は、黒色土で腐食した木質や礫などが出土地している。出土遺物から見る限り、時期は溝SD03埋没期と差はない。しまりのない埋土の状況や、床面上でプランを確認できたことから、SD03以降に位置づけられよう。

出土遺物（図版15、第20図）

59は須恵器坏蓋で口縁端部が嘴状となる。60は白磁V類片である。

SE04（図版11、第18図）

調査区南西付近で検出した。上縁2.20～2.30mのほぼ正円形プランを呈し、深さ1.75mを測る。断面形は上に向かって撥状に開くが、床面より0.30m付近に段を有する。そしてこの段下位の埋土には大きな落ち込みが認められる。このような堆積状況はSE01と同じであり、木製枠

が据えられていた可能性もある。これに対して、段より上の埋土は大きくレンズ状の堆積となっている。出土遺物から、廃絶は12世紀前半頃であろう。

出土遺物（図版15、第20図）

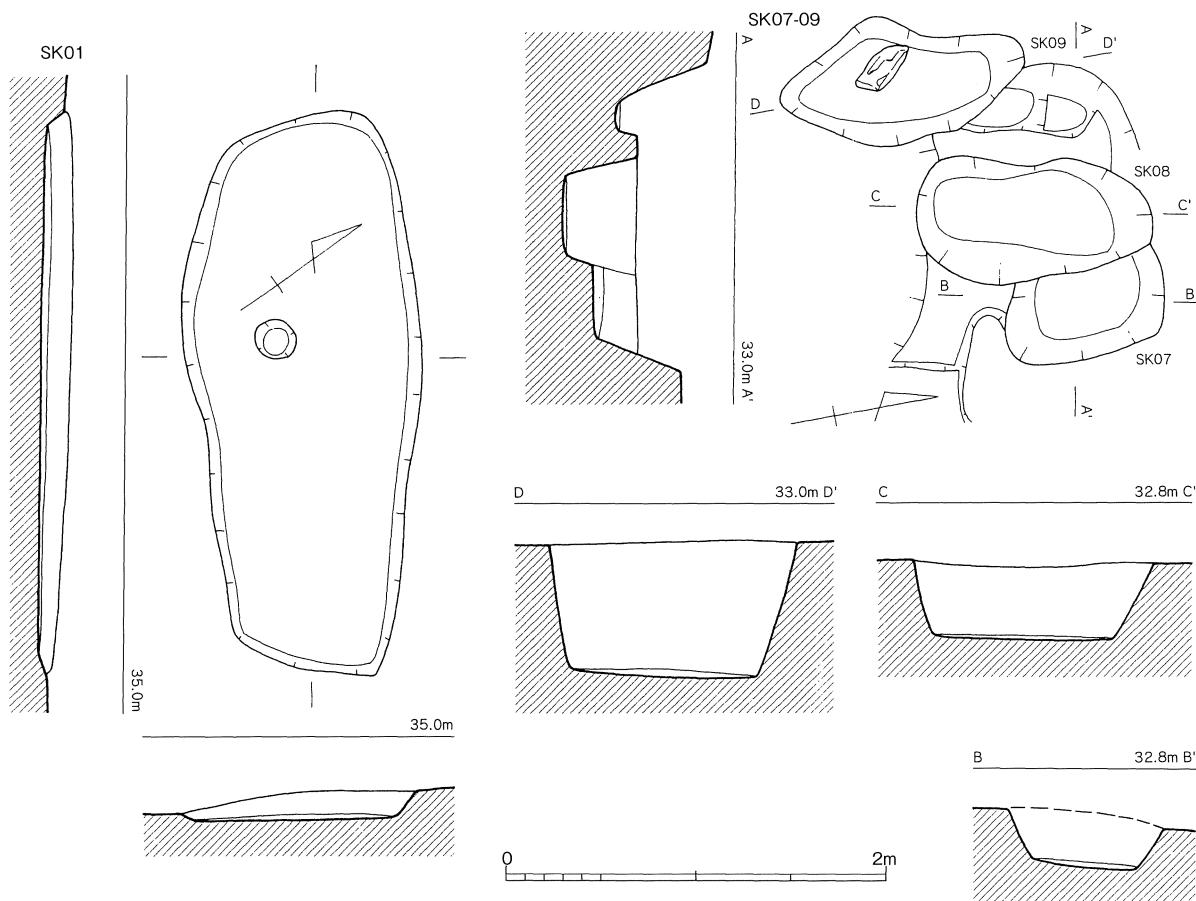
61～63は埋土の黒色土中より出土した。61の土師器小皿は口径8.6cm。62の土師器壺aの外底部には板状圧痕。63は高台が鋭い三角形となる土師器椀。64は須恵質の甕片。外面には線状のタタキ痕で一部線刻あり。内面はナデ調整。

（4）土坑

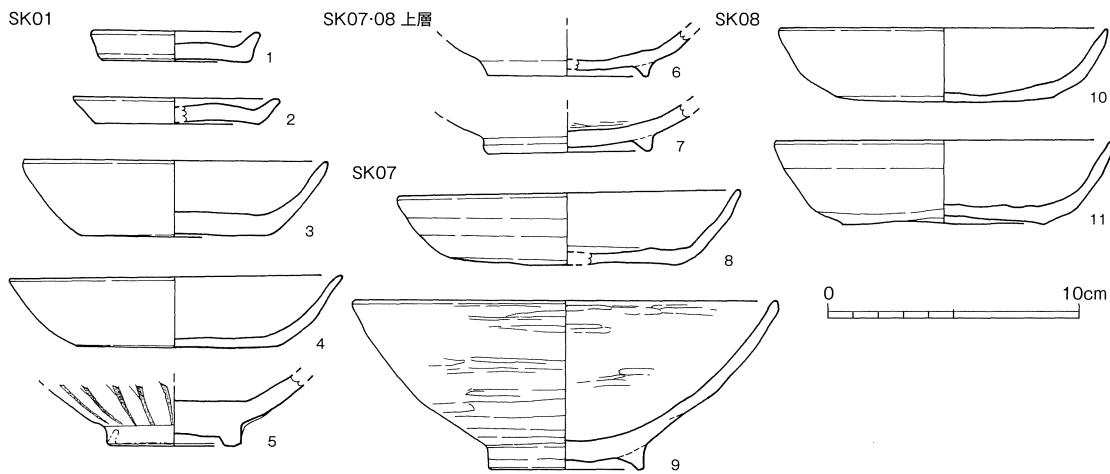
ここでは、調査時に井戸等と峻別された人為的掘り込みを持つ遺構について報告する。なお、SK03・04が欠番なのは調査時に井戸と理解できたため、番号を振り替えている。また、05については不明瞭な遺構のため、06は新しい搅乱のためそれ除外した。

SK01（第21図）

調査区東北付近で検出した。長軸3.00m、短軸1.20mの隅丸長方形を呈している。床面はほぼ平坦で深さは0.20mだが、斜面下位では0.10m程度になる。主軸方位はN 56°Wである。埋土にはしまりがなく、多量の炭化物と共に土師器片が出土した。墓の可能性もある。出土遺物から13世紀代に比定される。



第21図 土坑SK01・07～09実測図（1/40）



第22図 土坑SK01・07・08出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

出土遺物 (図版15、第22図)

1・2は土師器小皿で外底部は糸切で内湾気味である。1の口径は6.6cm。3・4は土師器壺aで、体部は外底部との境が内湾気味に立ち上がる。5は鎬蓮弁を持つ龍泉窯系青磁碗。

SK07 (図版11、第21図)

調査区中央付近、SD03西側で検出した。SK08に切られる。また、包含層の落ち込みと考えられるSX10下位に位置づけられる。残存長軸0.90mで、平面は不定形を呈する。深さは約0.30m、主軸方位はN11°Eである。埋土は黒褐色のほぼ単一層であり、中央部床面より土師器壺が出土した。墓の可能性もある。12世紀後半から13世紀頃であろう。

出土遺物 (図版16、第22図)

6・7はSK07・08埋土上部出土の白色に焼成された土師器碗で、丸みを持った体部に方形や三角形の高台が取り付く。8は床面上より出土。丸みを持って直線的にたち上がる体部で、底部は糸切り後、板状圧痕。9の瓦器碗は、埋土上部黒色土出土。小さく断面三角形の高台に丸みを持った体部が直線的にたち上がる。遺構の最終埋没を考える上で重要である。

SK08 (図版11、第21図)

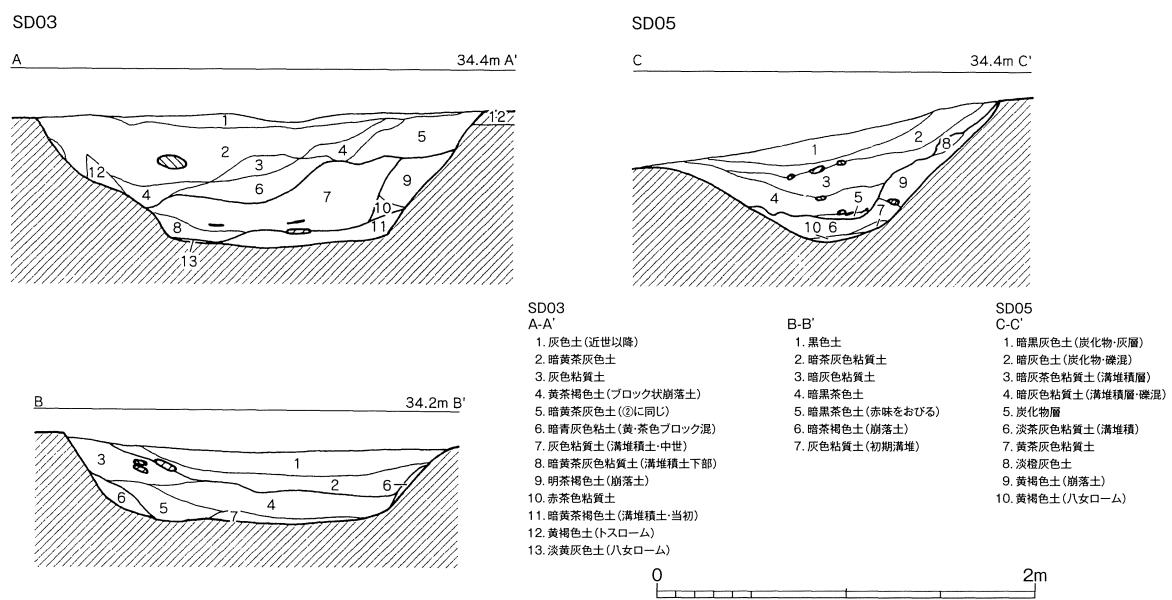
調査区中央付近で検出した。SK07を切る。長軸1.20m、短軸0.60mの長楕円形のプランを呈する。床面はほぼ平坦に掘削され、深さ0.40mを測る。主軸方位はN8°Eである。中央部床面より、土師器壺aが出土した。12世紀後半から13世紀頃であろう。

出土遺物 (図版16、第22図)

10・11は床面上より一括で出土した。10は赤焼で外底部に板状圧痕がみられる。11はやや白味が強く、糸切りとなる外底部と体部の境は強いナデ。

SK09 (第21図)

調査区中央付近で検出した。SK08西側に近接する。長軸1.30m、短軸1.20mの長楕円形を測る。床面はほぼ平坦に掘削され、深さ約0.70mを測る。主軸方位はN1°W。出土遺物はないが、SK08と近い時期であろう。



第23図 溝SD03・05・09実測図 (1/200、1/40)

(5) 溝

SD01 (第4図)

調査区東端で検出した。SA01と並走している。溝幅は上縁0.40～0.50m、深さは残りの良い所で0.15m程度を測る。この溝より東は急に地形が落ちることから、SA01と共に東側を区切る区画施設と考えられる。図示していないが、埋土中から龍泉窯系青磁碗片が出土しており、また溝周辺出土の土師器坏（第29図28）とあわせて考えると、13世紀代に比定されよう。

SD03 (図版12・13、第23図)

調査区中央付近で検出した南北溝である。今回は、約26m分を調査した。溝の幅は、上縁3.00～3.50m、深さは北側で約1.00m、南側で0.60mを測る。ちょうど北から南へ斜面を下るような状態で、北側では八女ロームを、南側では流紋岩礫層をそれぞれ掘削している。主軸方位は、北側では26°東に触れるが、南側ではほぼ真北をとる。北側の土層堆積状況から、開削して一旦溝が埋まった後、再度掘り直しされていることが分る。出土遺物の多くは、この掘り直された溝内から出土している。一方、南側約15m分は、暗茶褐色土、黒色土などほぼ連続した堆積状態で徐々に埋まっている。このような状況から北側で早い段階に溝が埋められ後も、南側の直線的な溝は埋まらず機能し続けた可能性が高い。そして、SX10の堆積に見られるように最後は湿地状態になつていったのであろう。暗渠SX11は溝北半の埋没後に築造され、一部がこの南半溝と並行している。そのため、溝埋没後にこの溝と暗渠との間に道も想定される。ただし、地盤の状態は良くない。開削期の上限は確定できないが、SB03を切ることから、それ以降に比定される。出土遺物の多くは12世紀～13世紀代であり、この時期を中心に機能したと考えられる。

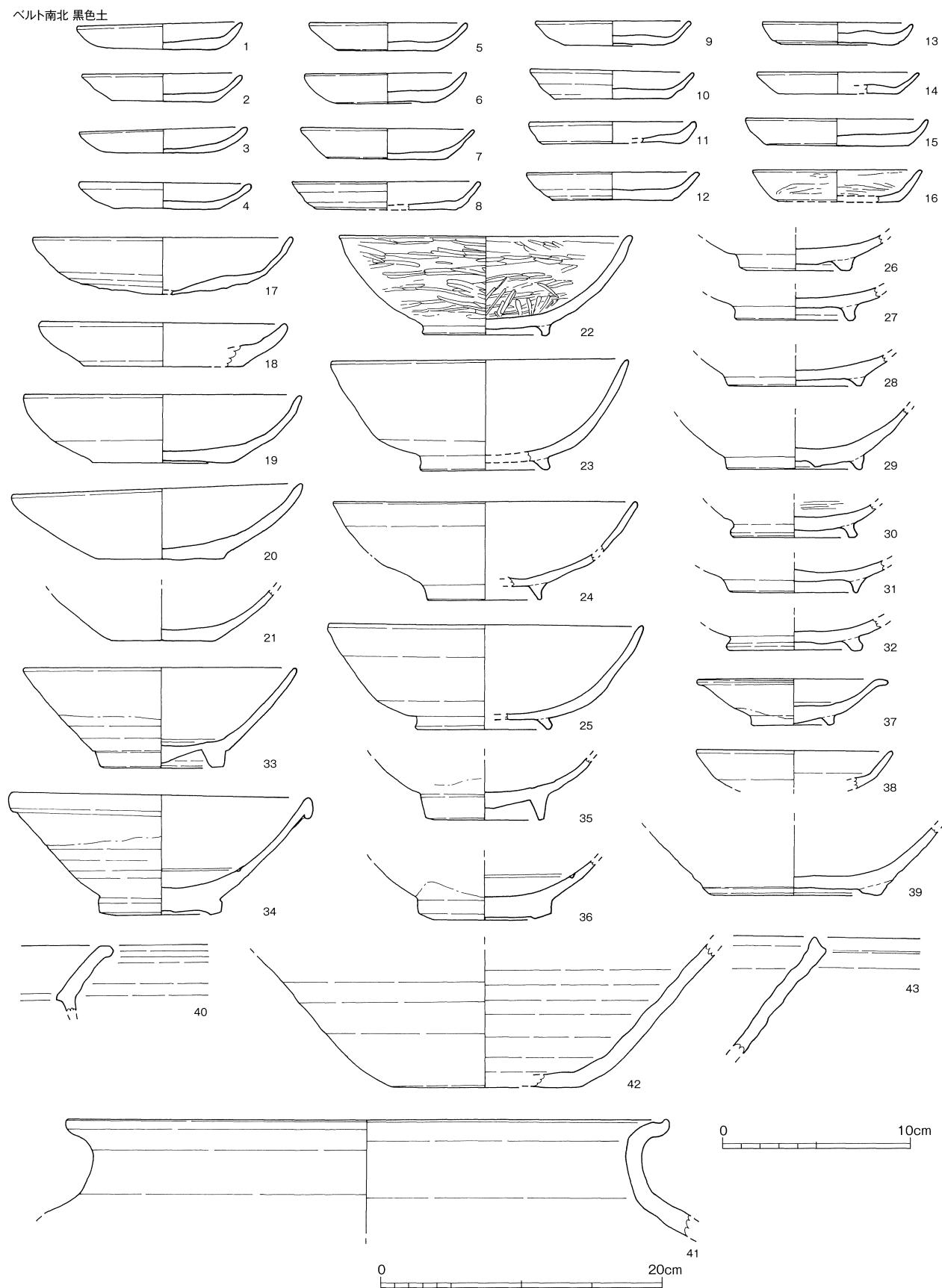
出土遺物 (図版16・17、第24～26図)

1～43は溝中央ベルト付近の黒色土中より出土。1～15は土師器小皿。口径8.4～9.7cm、底径6.0～9.7cm、器高1.2～1.5cm。特に口径は8.4cm前後、9.6cm前後にまとまる。体部は外底部付近で丸みを持って屈曲し、そのまま直線的に口縁に至るものが多い。外底部は糸切りで、大半は白橙灰色に焼成される。1は完形で内面底部が指頭圧痕によって一部窪む。6の口端部の一部は細く鋭い。13は赤褐色。15は底径7.8cm、器高は1.5cm。16は黒色で瓦質土器小皿。

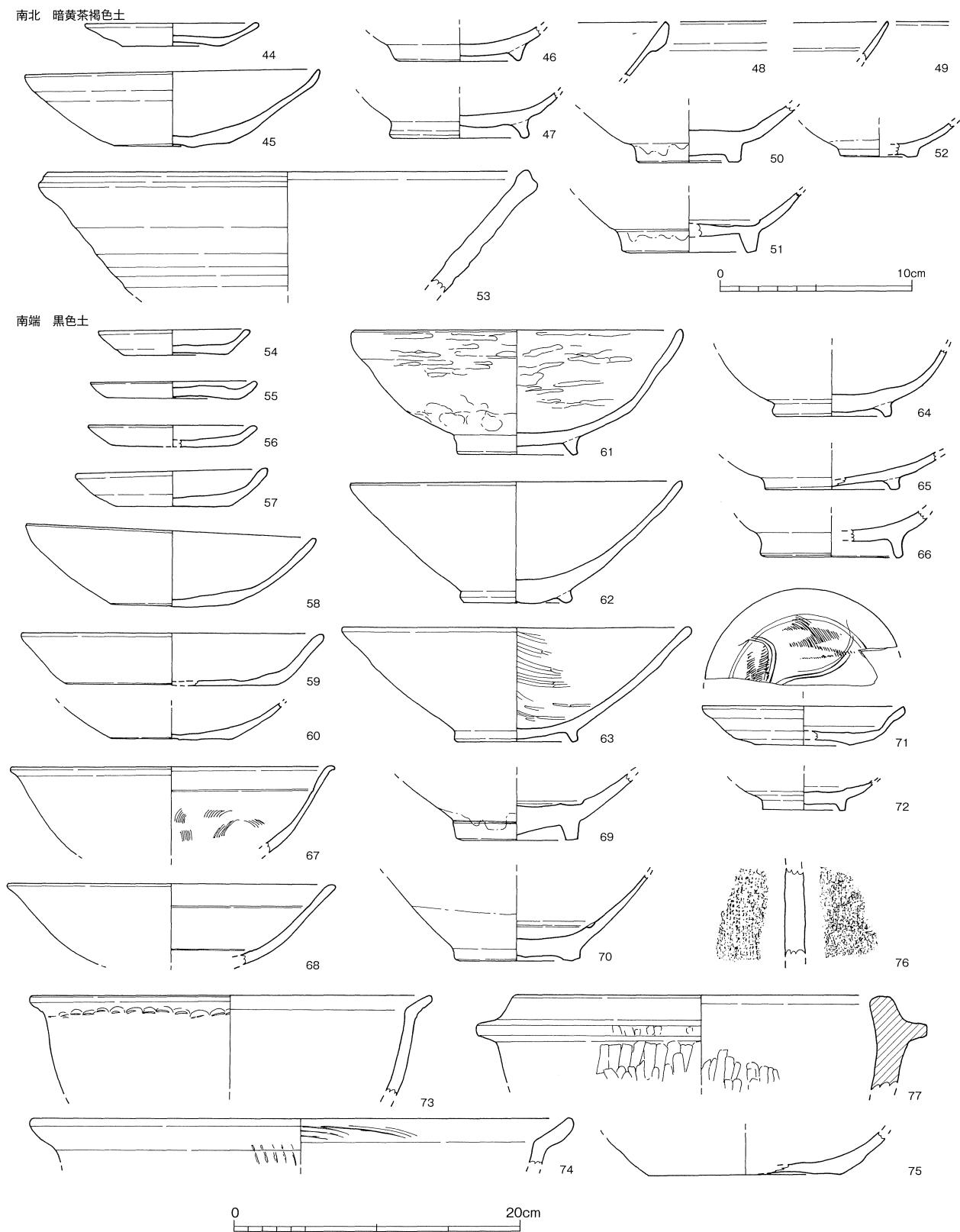
17～21は土師器坏類。17は薄手で丸みを持つ体部に3段の棱が付く。外底部は糸切り後、板状圧痕。18は赤褐色で口縁が肥厚。19は体部に丸みを持って口縁に至る。内底部は多方向のナデで外底部は糸切り。20の体部は外底部の境を強くナデた後、内湾しながら開く。底部は糸切り。口径15.5cm、底径6.7cm、器高3.6cm。21は糸切り後、板状圧痕。19～21は坏bで捉えられる。

22～32は椀類。22～25・30～32は瓦質土器椀、26～29は土師器椀。22は丸みを持った体部から口縁部へ至り、端部に沈線が入る。体部内外面共に横位の丁寧なミガキ、内底部は多方向のミガキ。灰褐色に焼している。外底部は切り離し後にナデ。口径15.6cm、底径6.8cm、器高5.2cm。23の体部は高台から大きく開きながら内湾し口縁に至る。24の底部は細く鋭い高台が取り付く。25は体部が大きく膨らみ中位で一端内湾して再び開く。30～32は底部。31の三角形状の高台は接合痕を明瞭に残す。30・32の高台は須恵器坏のように大きく踏ん張る。26～29は土師器椀底部。28は細く退化した三角形状の高台部。29はヘラ切り後、板状圧痕。

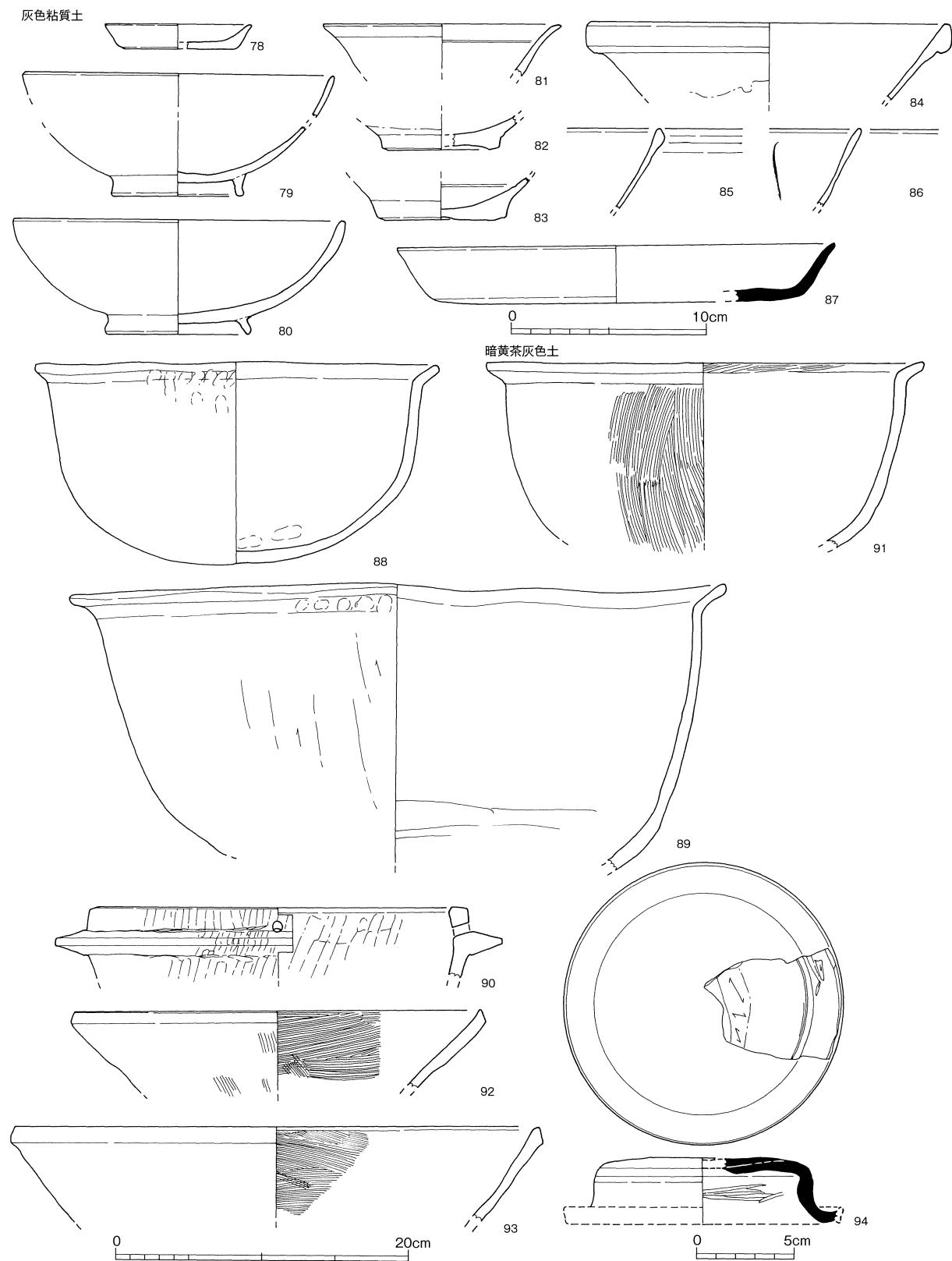
33～38は白磁類。33は直線的にたち上がる体部と内面見込みを輪状に搔き取るV字類。高台部



第24図 溝SD03出土土器・陶磁器実測図1 (1/3、1/4)



第25図 溝SD03出土土器・陶磁器実測図2 (1/3、1/4)



第26図 溝SD03出土土器・陶磁器実測図3 (1/3、1/4)

の割りは深い。34は玉縁口縁の碗IV-1a類で内面に沈線が巡る。36は割りの浅い底部。37は内面見込みを輪状に搔き取る皿白磁III-1類で釉はやや濁りが強い。38は龍泉窯系皿I類。39はケズリ出し底部で内面に目跡が残る越州窯系大碗。40は黄釉鉄絵盤の口縁部片。

41は常滑焼大甕で口縁端部は撮るように内湾する。復元口径42.8cm。42は須恵質土器の底部片で内外面は多方向のナデ。43は須恵質土器鉢の口縁部。口縁端部は肥厚し内湾する。

44～53は暗黄茶褐色土出土。44の土師器小皿は体部から口縁部へは直線的に開く。口径9.05cm、底径5.1cm、器高1.2cm。45の土師器坏は小さな底径と直線的に開く体部に特徴がある坏b。底部は板状圧痕。口径15.4cm、底径6.2cm、器高4.0cm。46・47は土師器椀底部。どちらも外底部に板状圧痕が残る。46は被熱。48・49は白磁碗の口縁部片。50は龍泉窯系青磁碗の底部片。51は白磁碗片で内面は輪状に釉を輪状に搔き取る。52は白磁皿II類-1a片。

54～75は南端黒色土出土。54～57は土師器小皿。57を除き口径8.0～8.8cm、底径6.0～7.0cm、器高1.2cm前後。57はやや大きい小皿で体部下半外面は強い横ナデによって稜が付く。口径10.0cm、底径5.8cm、器高2.0cm。

58～60は土師器坏類。58は口径15.4cm、底径6.4cm、器高4.2cmの坏bで底部は板状圧痕。45に酷似する。59は直線的に開く体部からやや肥厚して口縁端部に至る坏a。復元口径15.8cm、底径11.0cm、器高2.8cm。60は坏bで底径は6.2cm、外底部は板状圧痕。

61～66は瓦器椀類。61の体部は底部から大きく開きながら中位で一端屈曲し、再び開いて口縁に至る。高台は三角形の丁寧な作り。口径17.2cm、底径6.2cm、器高6.5cm。62・63は直線的に開く体部に特徴がある。62は小さく丸く高台が取り付く。63の内底部は多方向のミガキ、外底部は糸切り。64～66は椀の底部。65の高台部は低い方形で踏ん張る。外底部は糸切り。

67～72は磁器類。67は内面に櫛目文を施すV-4b類、68はV-4a類。69の白磁底部は内面を大きく搔き取り外底部も丁寧な削りで割る。70は白磁IV-1a類の底部片。71は同安窯系青磁皿I-2b類。72は白磁皿III-1類。

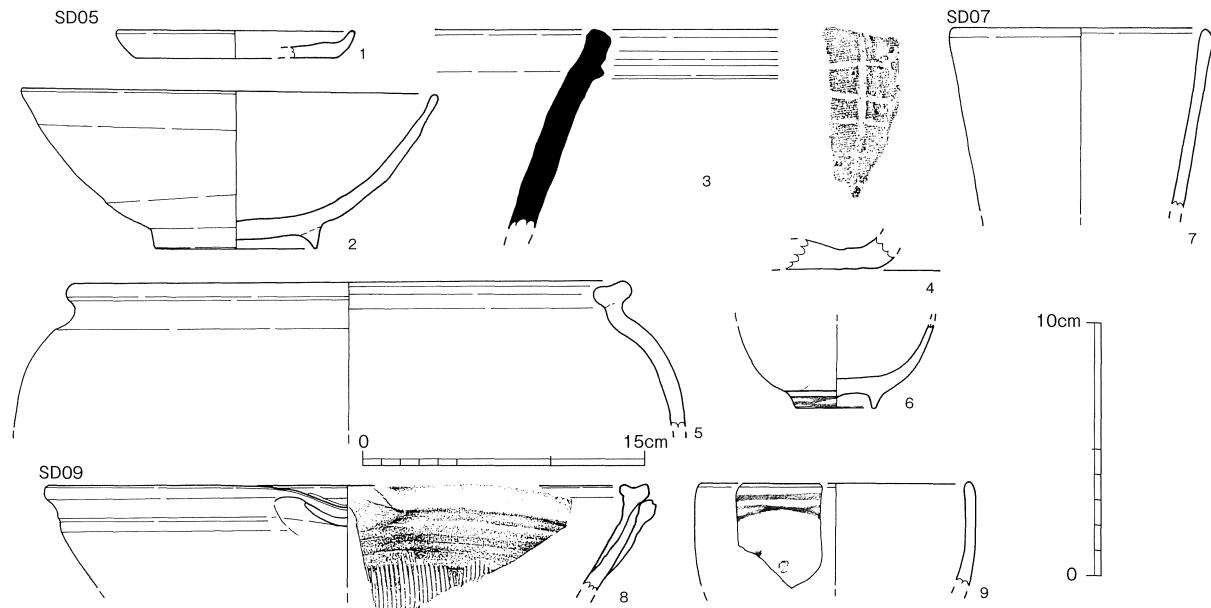
73・74は土製鍋。74は大きく外側へ屈曲する口縁部内面にハケ状の調整。76は製塙土器で内面の絹目は粗く、胎土に雲母を混入。77は鍔付きの石鍋で張出す体部から内湾しながら口縁に至る。

78～90は旧校舎基礎内の北半灰色粘質土出土。78は土師器小皿。体部と底部の境が肥厚する。79・80は瓦質土器椀。79は接合しないが胎土焼成から同一個体。比較的高く踏ん張る高台を丁寧に接合する。80は丸みを持った体部から肥厚して口縁端部に至る。高台部は細く鋭い。

81～86は白磁類。81は大きく開く口縁から白磁VII類か。82は白磁皿III-1a類。83は内面に沈線が巡る。84は玉縁を持つIV類。85は小さい玉縁からIII類であろう。86は龍泉窯系青磁の碗片。内面に蓮弁の一部が見える。87は須恵器皿片で外底部はヘラケズリ。口径22.2cm。

88・89は土製鍋。88はほぼ完形で丸底になる。外面頸部には縦位の指頭圧痕が巡る。外面胴部には煤痕跡があるが底部にはない。89の口径は45.0cm。90の滑石製石鍋は口縁を一部穿孔する。

91～93は北半暗黄茶灰色土出土。91の土製鍋は、口縁部が波打つように歪み、外面胴部は縦位のハケ、内面は口縁付近が横位のハケで胴部はナデ。92は須恵質土器鉢。93は瓦質鉢で外面体部に指頭圧痕跡があり、内面は多方向のハケ。94は溝内で出土した須恵器硯。蓋状の形態をとり、脚部の端部は跳ね上げる。天井部に墨痕は無いが、平滑で磨った痕跡がある。面径は10.6cm。



第 27 図 その他の溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3、1/4)

SD05 (図版 12、第 23 図)

調査区中央付近で検出した。SD03 と同じく、北側では東に触れるが、南半は南北軸をとる。今回は約 15 m 分を調査した。溝幅は上縁 2.50 ~ 3.00 m、深さ約 1.00 m を測る。土層観察から、埋没後に掘り直しを行っている。上層にはしまりのない炭化物や礫混じりの堆積が見られるため、開削は SB03 と同時期でも埋没は比較的新しい印象を受ける。一部、SD09 と重複する可能性もあるが、建物基礎で切られており不明である。

出土遺物 (図版 17、第 27 図)

1 は最上部出土の土師器小皿で復元口径 9.2cm。2・3 は灰色粘質土下部出土。2 は土師器椀で鋭い三角形の高台を持つ。3 は凸帯を有する須恵器鉢片。4 は上部出土の瓦器で内底部に格子状の線刻。5 は口縁部を屈曲させて肥厚する黄釉陶器の盤片。6 は最上部出土の磁器碗の破片。

SD06 (第 4 図)

調査区東側付近の南端で検出した。ちょうど SD09 の南側延長部にあたる。ただし、南端は搅乱を受けて残存しない。4.5 m 分を調査した。溝の幅は 0.60 m、深さ 0.12 m 程度である。出土遺物を見る限り、近世以降であろう。

出土遺物 (第 27 図)

7 は、口縁部が直立に立ち上がる素焼きの椀片で、近世以降であろう。

SD09 (第 4 図)

調査区東北で検出した。一部 SD05 と基礎を挟んで重複するが、堆積状況や時期の違いから別遺構として捉えた。調査では、約 7 m を調査した。深さ 0.24 m 程度の浅い逆台形状を呈しており、SD05 とは、深さも形状も異なる。この溝の南には SD06 があり、痕跡として繋がる可能性が高い。出土遺物から近世以降も機能していたとみられる。

出土遺物 (第 27 図)

8 は陶器製の摺鉢片で口縁部が湾曲する。9 は近世の磁器碗で外面の二重圈線下に一部文様がある。

SD10 (第4図)

調査区西南端で検出した。掘立柱建物 SB11 の西側に位置する南北溝で、まだ調査区南側へ延びている。今回は 4.2 m 分調査した。南側へ向かって撥状に開きながら深くなっている。溝幅 0.50 ~ 1.50 m、深さ 0.067 ~ 0.280 m。時期を特定することは困難だが、主軸はほぼ座標北に沿つており、建物群の西境となる溝の可能性もある。

(6) その他の遺構等

ここでは性格不明な遺構、あるいは整地層などについて報告する。

SX01 (第4図)

調査区東北付近で検出した。北半は搅乱に切られている。現状では、長軸 1.70 m、短軸 0.50 m、深さ 0.58 m を測る。主軸方位は N 22° E である。内部には 0.20 m 程度の円礫が落ち込んでおり、墓であったかもしれない。出土遺物などから 13 世紀代に比定され、SK01 とも同時期である。

出土遺物 (第29図)

1 の内面には煤が付着。復元口径 8.8cm。2 は長胴に近い須恵器壺の底部片。

SX02 (第4図)

調査区東で検出した。長軸 1.30 m、短軸 0.45 ~ 0.60 m、深さ 0.40 m 程度の落ちで SB13 の柱穴に切られる。主軸方位は N 75° E である。風倒木等の搅乱であろう。

出土遺物 (第29図)

3 は壺あるいは瓶の須恵器底部になるであろう。内面は赤色に焼成される。

SX03 (第4図)

調査区東で検出した。長軸 0.90 m、短軸 0.60 m の半月形で深さ 0.15 m 程度の落ち込みである。風倒木の痕跡であろう。主軸方位は N 89° E である。

SX04 (第4図)

調査区東で検出した溝状の遺構である。長軸 3.5 m、幅 0.40 ~ 0.80 m、深さ 0.80 m を測る。風倒木等の可能性が高い。主軸方位は N 53° W である。

SX05 (第4図)

調査区北側で検出した整地層である。SD03 と SE01 の間、東西 6.0 m、南北 3.5 m の範囲に広がっている。層の厚さは 0.16 m 程度ある。SE01 に切られる SX07 も同様の整地層と見られる。7 世紀以降、8 世紀代の範囲で考えることができよう。

出土遺物 (第29図)

4 は端部をやや肥厚する鉢状の器形となる土師器。

SX10 (第4図)

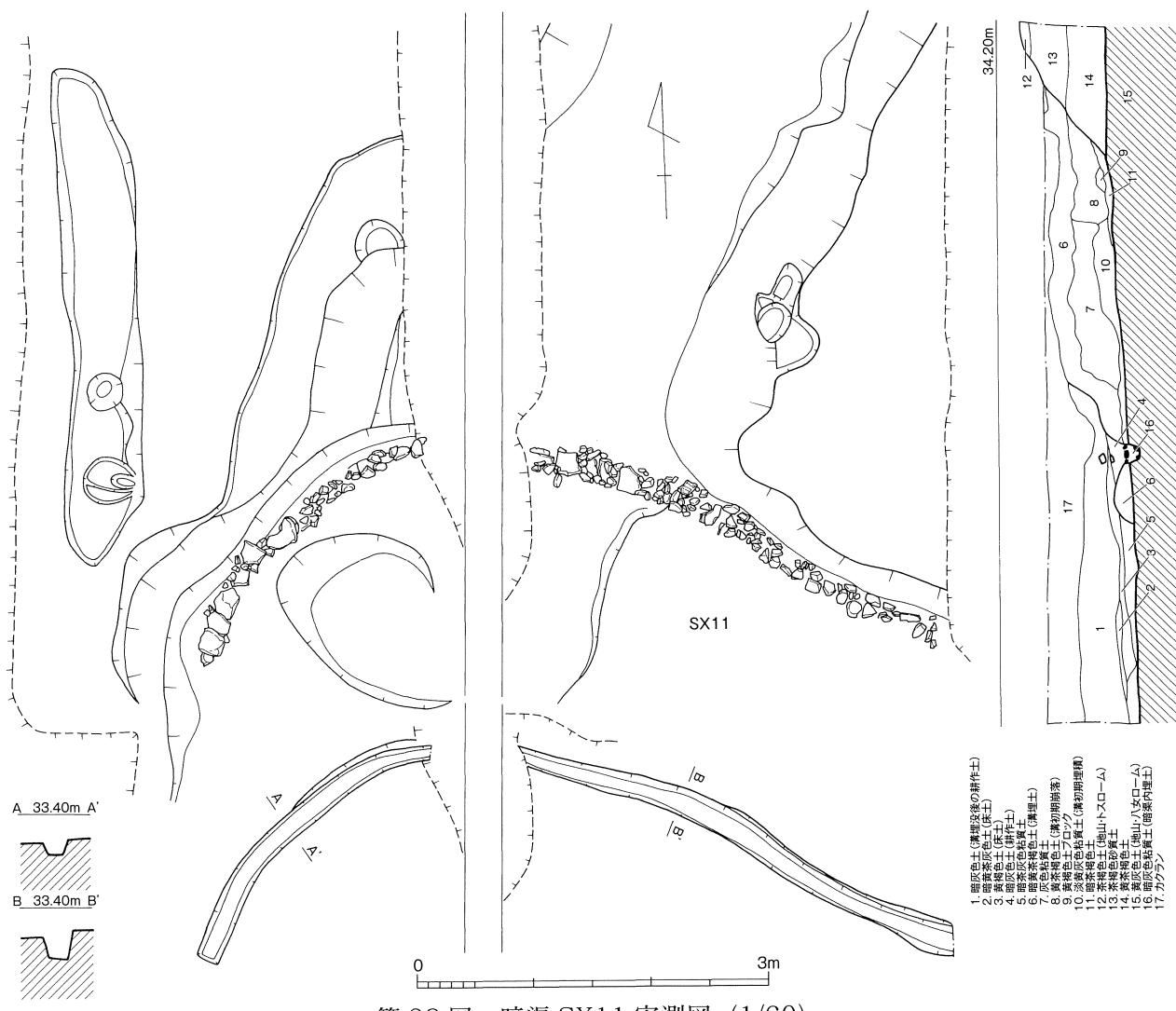
調査区南端付近で検出した黒色土である。東側に隣接するSD03埋没土となる黒色土と判別がつかない。そのため、溝埋没後の湿地状態を示す可能性もある。溝SD03の埋没過程や時期を考える上でも重要である。

出土遺物（第29図）

5は土師器小皿で、復元口径8.0cm。6は体部に稜をとりながら丸みを持つ土師器坏a。底部は糸切り。7は瓦器椀だが、焼成は須恵質に近い。鋭い三角形の高台を持つ。内外面には粗いミガキ状のナデ。8は口縁玉縁の白磁、9は緑白色の釉で内面櫛目文を持つ古瀬戸焼の碗か。

SX11 (図版13、第28図)

調査区中央北側で検出した暗渠である。溝SD03に直交する形で6.50m半円状に広がる。断面15cm程度の方形溝を掘削し、10～20cm程度の礫を使用して側石と蓋石を敷き詰めて排水溝としている。ただし蓋の上部については、耕作によって搅乱を受けている。検出状況や土層観察から、SD03埋没後、新たに壇造成を行い、その落ち際の排水施設として設置されたと考えられる。また



溝の埋没が遅れる SD03 の南半とその東側に位置する SD05 の間が幅 6 m 程度の道として機能していた可能性もある。それは、暗渠の延長となる礫敷きが SD05 に沿って巡ることからも言える。出土遺物から、14 世紀頃の設置であったと考えられる。

出土遺物（第 29 図）

10 は白磁の高台片で復元底径 7.4cm。11 は茶褐釉の陶器片で高台付碗であろう。12 は須恵器壺の底部片。高台部は大きく踏ん張っており、7 世紀末～8 世紀頃か。13 は瓦質の摺鉢片で、外面は工具によるナデ。14 は外面鉄釉壺で耳片が見られる。埋土中からの出土。10 と 11 は暗渠内より出土している。他に石臼も出土している（第 32 図 17）。

SX14（第 4 図）

調査区西南で検出した。SB10 南側の落ちを埋める堆積層である。ちょうど、 3.00×2.30 m の範囲に亘って南に拡がっている。撓乱のため、SB10 の柱穴との明確な前後関係は見出し難かった。上部では、大型甕や土師器椀などが出土しているが、下部では須恵器壺蓋等が出土している。直接層位的根拠はないが、8 世紀後半に比定される須恵器壺蓋（第 32 図 15）は SB10 造営の時期を考える上で参考になろう。

出土遺物（図版 17、第 29 図）

15 は須恵器壺蓋片で柱状に小さく取り付く撮で口縁端部を肥厚させる。16 は須恵器甕片で、外面部は縦位のタタキ、内面には工具によるナデ。胎土は緻密である。17 は土師器椀で高台は低くやや踏ん張る。18 は瓦質の大型甕で、口縁部を大きく肥厚させ、外面には一条の凸帯を有する。

SX19（第 4 図）

調査区中央付近、SD03 東側で検出した。不整形の土坑状の遺構で、平面は長楕円形を呈している。長軸 1.80 m、短軸 1.60 m、深さ 0.07 m、主軸方位は N41° E である。人為的な掘り込みであることは確かだが、時期などは不明である。当初は SK05 として登録していた。

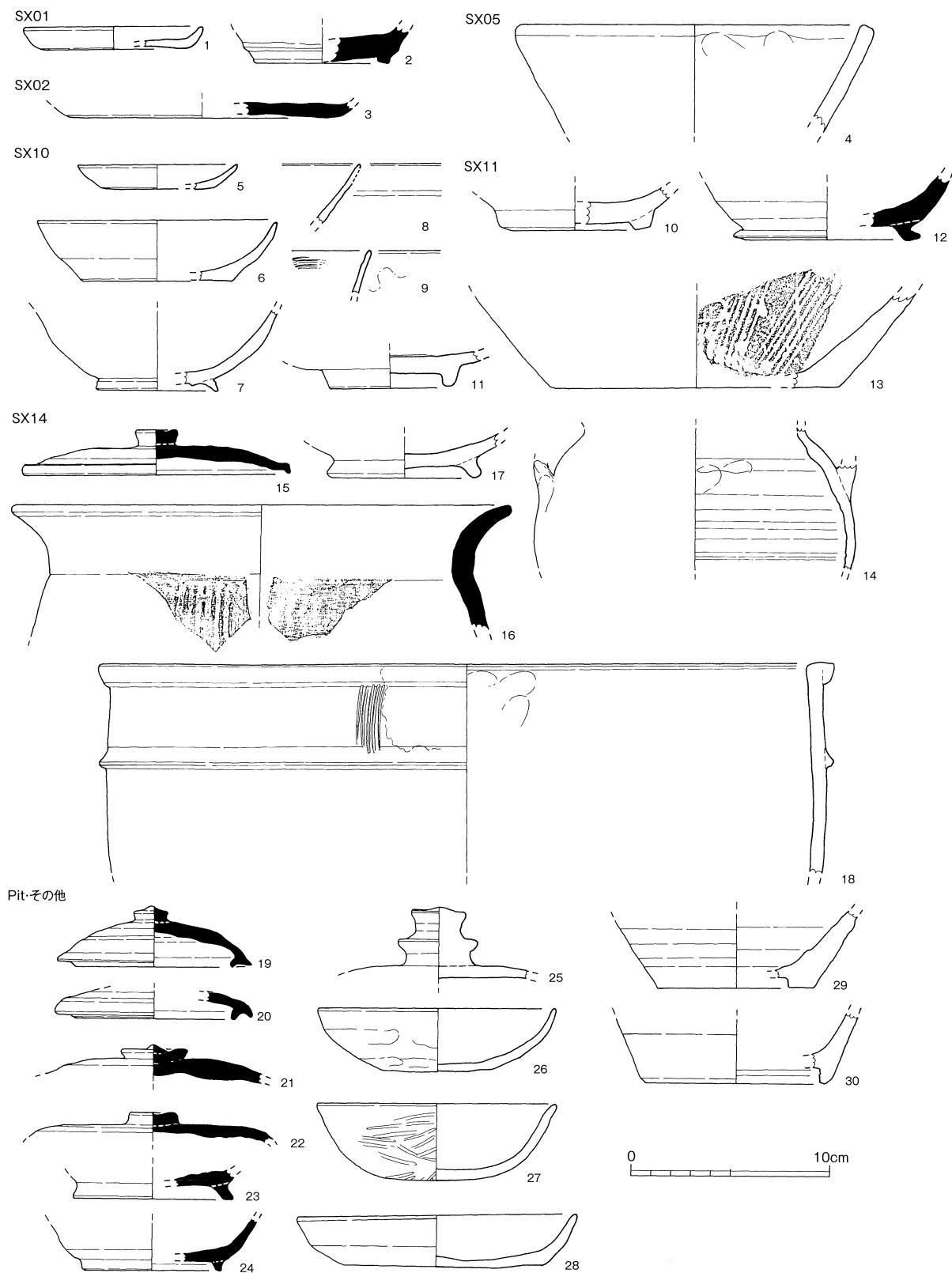
（7）その他の出土遺物

土器・陶磁器（図版 18、第 29 図）

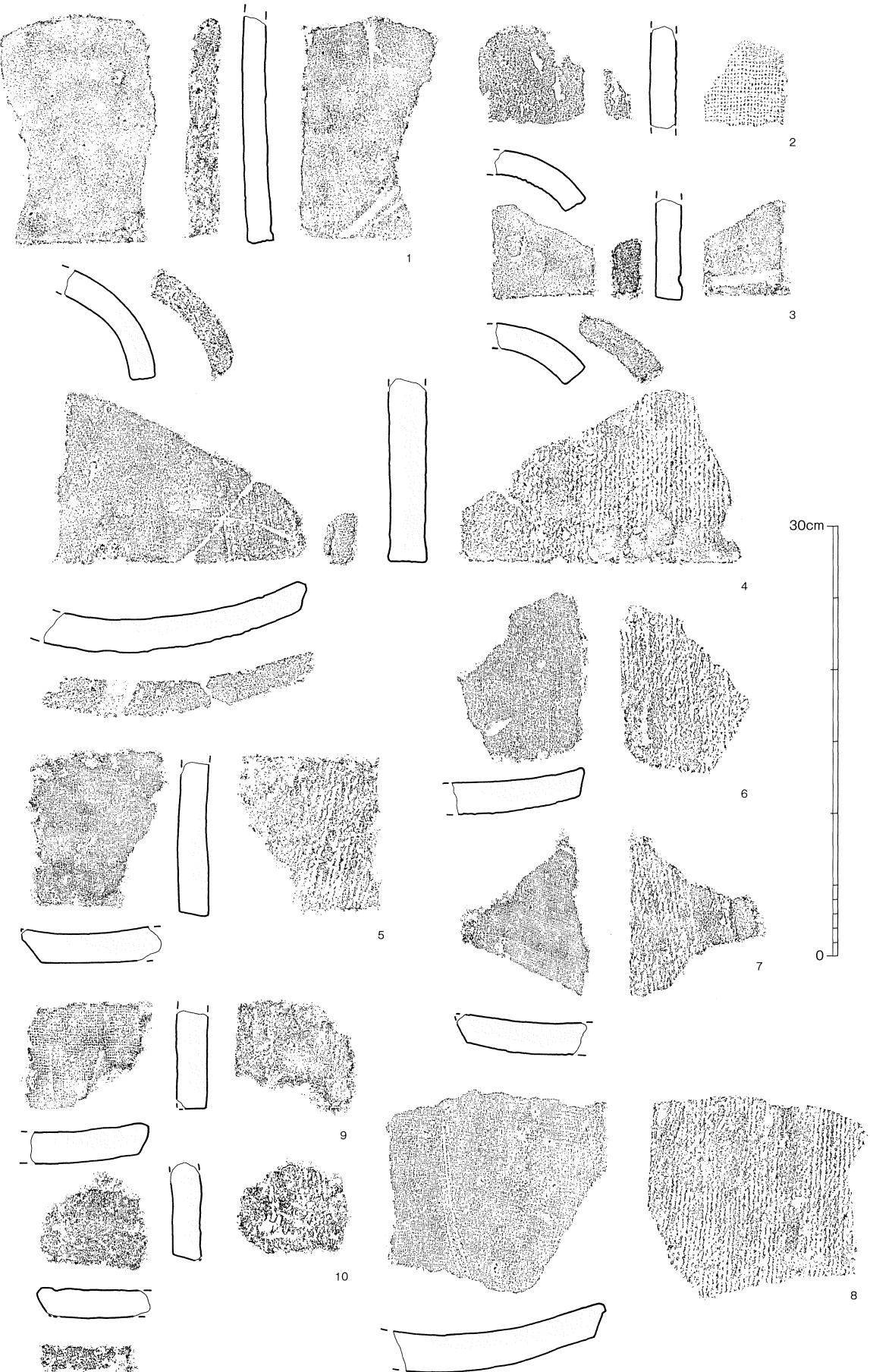
19～22 は須恵器壺蓋。19 は完形で宝珠状撮みを持ち、7 世紀前半代に比定される。P385 出土。20 も同様の資料で P523 出土。21 はボタン状の撮みを持つ 8 世紀前後の資料で調査区南端出土。22 は低い円柱状の撮みを持つ。SE01 西側整地層出土。23・24 は有高台の須恵器壺片。23 は撓乱、24 は P534 出土。25 は土師器蓋の撮み片。香炉の蓋とされるもので包含層出土。26・27 は土師器壺片。26 は赤褐色に焼成され内外面ナデ調整。8 世紀前後であろう。P554 出土。27 は外面にミガキが見られる。28 は調査区東端の溝 SD01 付近で出土した。土師器壺 a。体部は稜を持って内湾する。ほぼ完形で灰黄色に焼成される。29・30 は陶製の壺片で出土地点不明。

瓦類（図版 18、第 30・31 図）

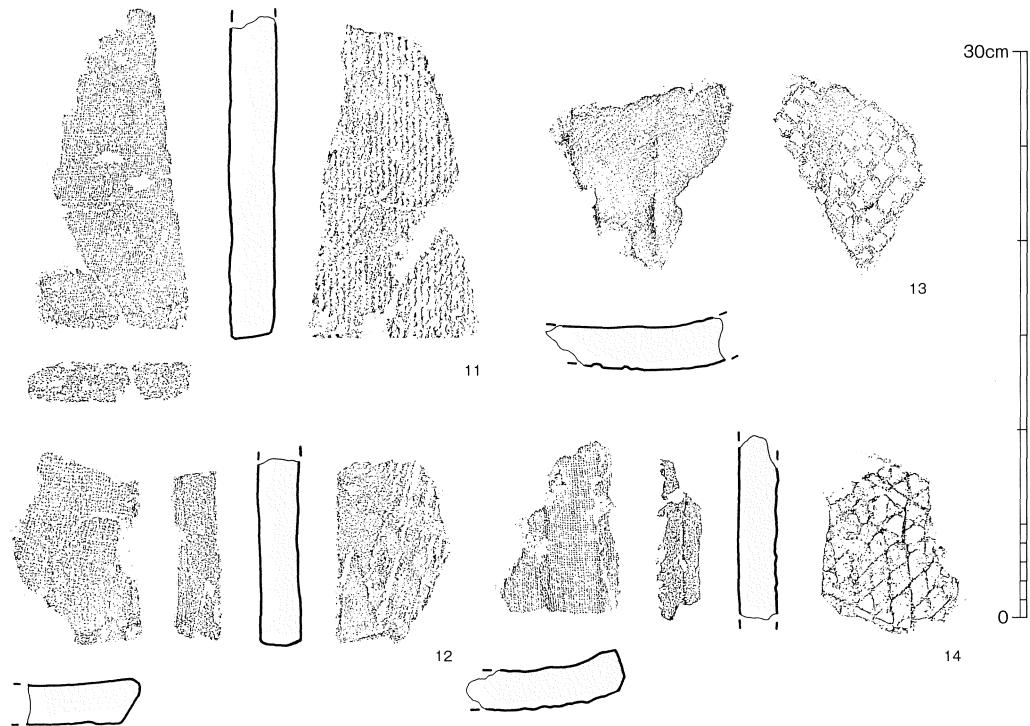
瓦類は主に SB07、SE01、SD03 等で出土している。5 × 5 cm 程度の平瓦片が多く、瓦当面資料はない。また、各破片を併せてても、数個体程度である。ここでは端面が残り、調整が分る資料



第29図 その他の遺構等出土土器・陶磁器実測図 (1/3)



第30図 出土瓦実測図1 (1/4)

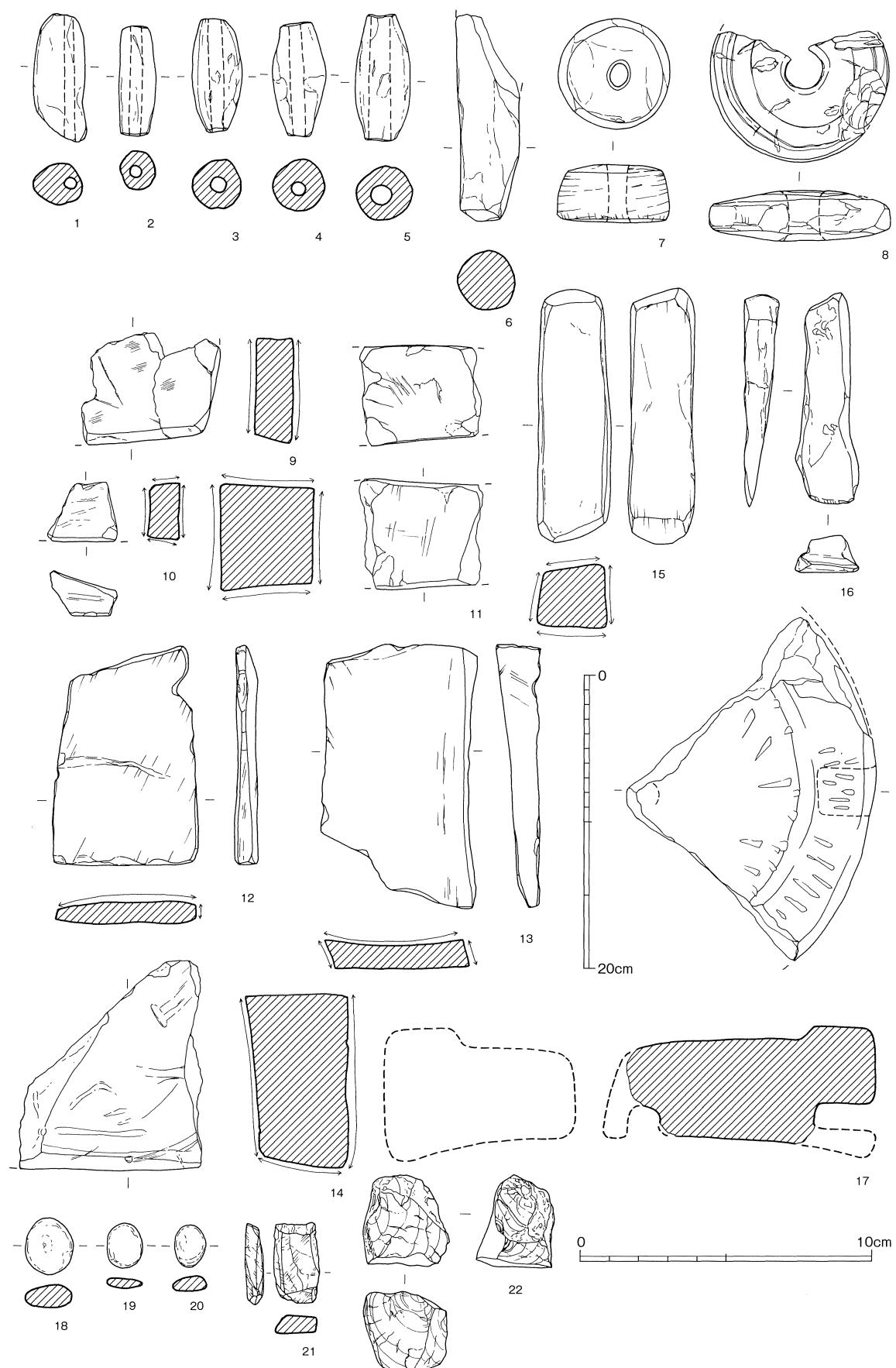


第31図 出土瓦実測図2 (1/4)

を中心に図示した。1～3は、黒褐色に焼成された丸瓦である。1の凸面はナデ、内面の布目はやや細かい。また、胎土は3mm程度の石英粒を多量に含む。外面には溶解物が二次的に付着しており、本来の用途以外に使用された可能性がある。SE01 暗茶褐色土出土。2の凸面もナデで内面は粗い布目。SD03 南端黑色土出土。3の端部は工具による丁寧なナデ調整。凹面には端面に並行して型による線状の痕跡がある。SB07P2 黒褐色土上部出土で、建物廃絶の下限を示す。4～10は凹面に縄目紋の叩打痕を持つ平瓦である。4の端面は工具による丁寧なケズリ、側面は一面の面取り。凸面端部付近は指頭圧痕により縄目紋が消える。SB07P2 上部出土。5の側面はケズリによる1面調整だが、一部潰れて2面となる。SE01 暗茶褐色土礫内出土。6はSD03 内黑色土出土。7の端部付近凸面は一部ナデにより縄目紋を消す。SE01 掘形内出土。8の凸面の縄目紋は、3条に亘って縦位にナデ消す。凹面の絹目は細かい。SB07P5 上部出土。9・10の凸面は縄目紋だが、叩打痕がナデ押えられてやや不鮮明。9・10共にSE01出土。11は器体の湾曲がなく熨斗瓦の可能性もある。SI001 周辺で出土。12は縄目紋を基調とするが全体をナデ消し、白色に焼成される。SB07P5 上部出土。13・14は外面格子の叩打痕である。13は5×7mmの長方形となる斜格子で一部ナデ消す。凹面には斜位のナデ調整、幅3cm程度の模骨痕あり。SE01 暗茶褐色土礫内出土。14の凸面叩打痕は斜格子で側面は2面のケズリ。凹面には幅2.5cmの模骨痕。SD03 南端黑色土出土。

土製品・石製品(図版18、第32図)

1～5は土錘。1は器体中央が張出しながら端部で丸くおさまる。SE01出土。2は土師質で胎土は精良でSD03出土。3～4は中央部に張りを持つ。3は表土、4・5は地点不明。6は土師質の脚部で端部を平坦に仕上げる。SD03南端出土。



第32図 その他の出土遺物実測図 (1/2、1/4)

7・8は滑石製紡錘車。7の側面は台形状で擦痕がある。重さ48.3 g、SB05P9掘形出土。8の径は6.3cm、比較的薄手で表裏に円状の線刻がある。重さ61.8 g、SE01炭化物層出土。

9～16は砥石等。9は硬質砂岩製で砥面は4面。手持ち砥石であろう、重さ39.5 gでSD08暗茶褐色土出土。10は硬質砂岩製で重さ7.3 g、調査区北西付近包含層出土。11は側面を中心4つの砥面がある。石英斑岩製で重さ82.6 g、SE01出土。12は薄い緑色片岩素材の各面を研磨して短冊状の形態をとる。重さ47.8 g、SE04黒褐色土出土。13は裏面が剥離して3つの砥面が残る。シルト岩製で重さ79.7 g、P221出土。14は被熱しており、砥面は3面ある。線状痕が深く鋭い。花崗岩製で重さ1645.9 g、SB07P5出土。15は角柱状を呈し、端部を中心に擦痕状の擦れが見られるが、明確な砥石とは言えない。可能性を含めて提示した。重さ106.4 g、SE01黒褐色土出土。16は端部が両刃状に研磨されており、縄文時代石斧の可能性もある。緑色片岩製で重さ23.3 g、SE01黒褐色土出土。

17～22はその他の石製品。17は石臼の上臼片で花崗岩製。重さ3060.0 g、SX11暗渠内出土。18～20は碁石。18は石英製でSE01出土、19・20はそれぞれ黒・白色でSI01北側出土。21は、石鍋転用の不明滑石製品。SD05暗茶褐色土出土。22は石材の表皮を残しながら一部分割した剥離面が見られる。フリント製で火打石の可能性がある。重さ31.5 g、SE01内出土。

4. その他の遺構と遺物

(1) 下層遺構

ここでは、古墳時代以前に位置づけられる下層遺構の調査と出土遺物について報告する。

調査区東側では、SB01調査中に柱穴断面に土器片等が確認され、厚い包含層の堆積が理解された。このような状況から上層遺構の調査終了後にバックホーによって弥生土器片を含む包含層を除去した後、褐色の粘質土が堆積し、遺物を包含する不成形の遺構を調査した。

SX12(図版14、第33図)

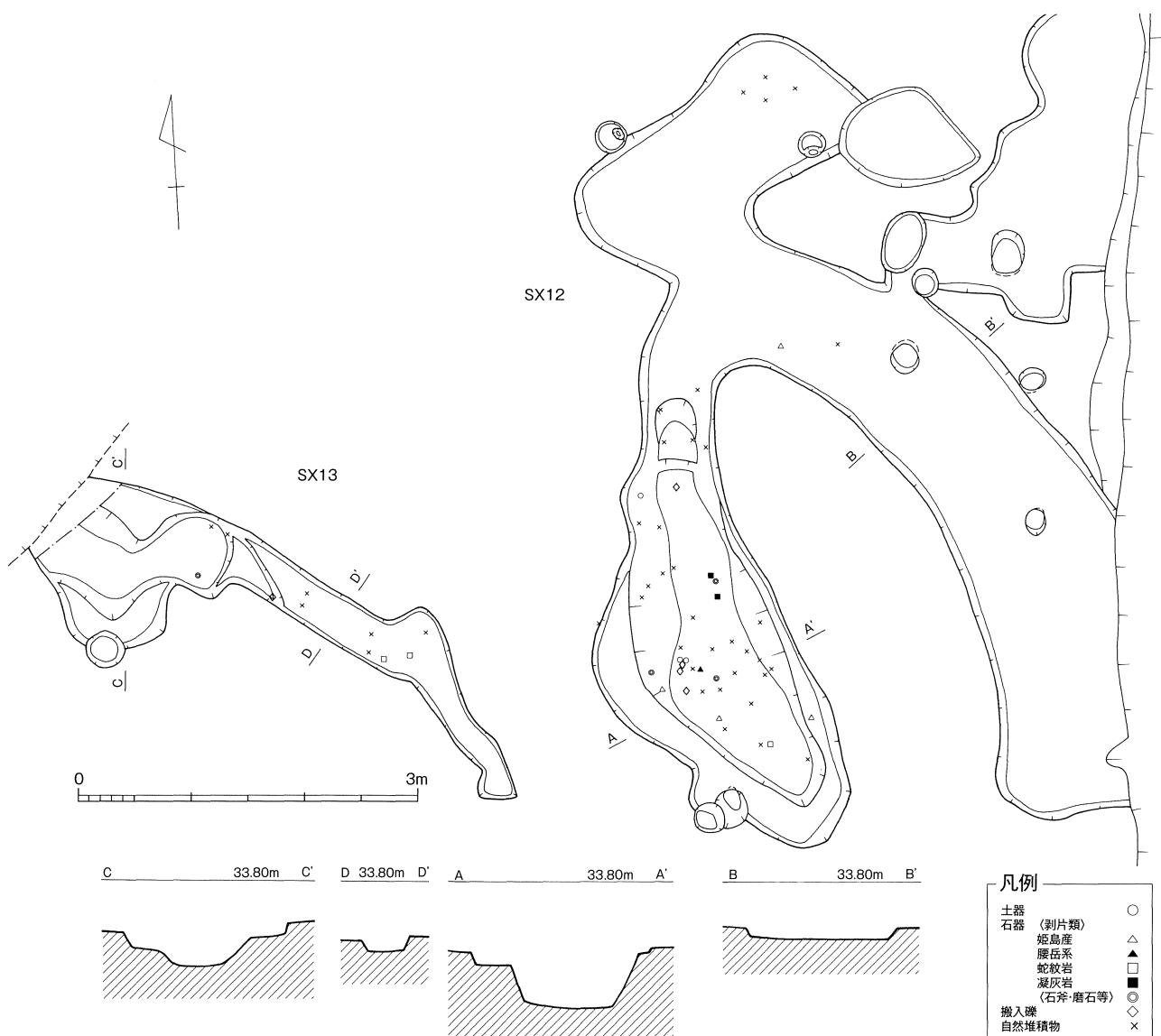
南北に長く溝状に湾曲している。長さ約13 m、幅1.3 m程度、深さ0.05～1.17 mを測る。遺物は一番深い土坑状の落ち込みから礫片等共に僅かに出土している。調査状況から明確な人為的遺構とは断定し難く、あるいは風倒木等が考えられる。縄文後・晩期頃に位置づけられる。

SX13(図版14、第33図)

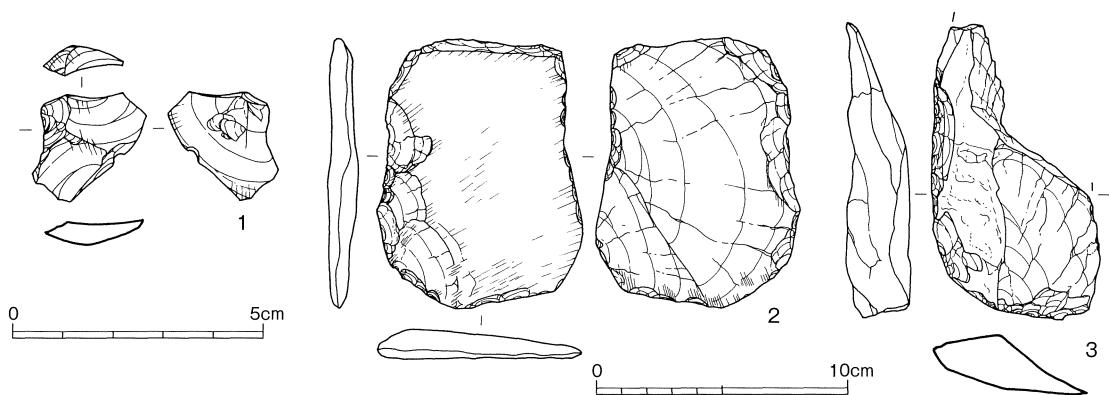
SX12西側で検出した。東西に広がる溝状遺構で長軸4.40 m、短軸0.40 m、深さ0.36 mを測る。SX12と同じく土坑状の落ち込みの一箇所にまとまって遺物・自然遺物が出土する傾向があり、風倒木等が想定される。いずれにしても、明らかに包含層下位に位置づけられる。

出土遺物(図版18、第32図)

1～3は、SX13より出土。1は姫島産黒曜石の不定形剥片で重さ1.8 g。2は緑色片岩製の板状剥片で、表面は一部研磨しており、裏面に二次加工がある。打製石斧未製品かスクレイパーであろう。重さ121.5 g。3は蛇紋岩製の剥片。明瞭な二次加工は認められないが、搬入礫で石斧の素材となりうる。重さ163.2 g。



第33図 下層遺構 SX12・13 実測図 (1/60)

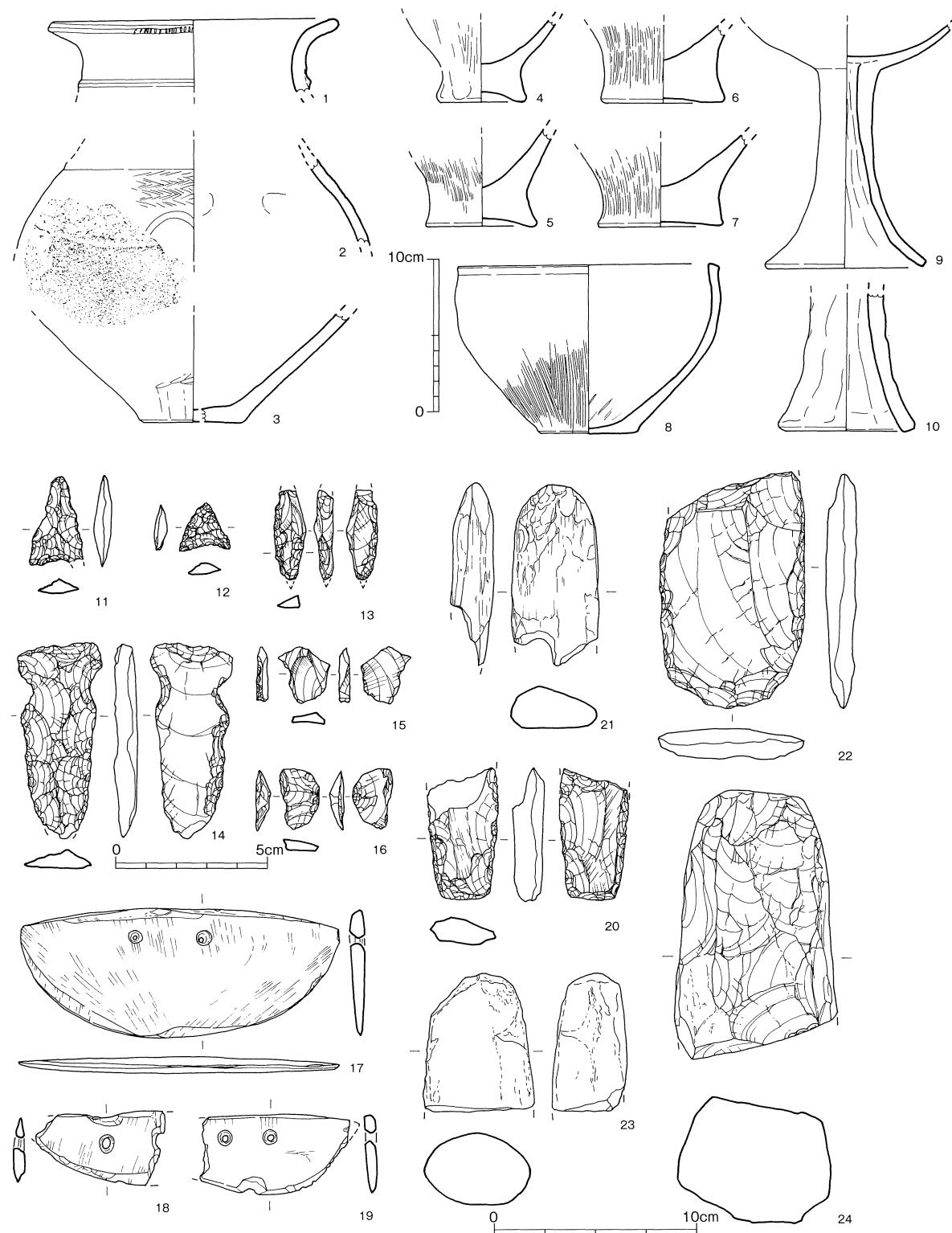


第34図 下層遺構出土遺物実測図 (2/3、1/3)

(2) その他の遺物

土器類 (図版 18、第 35 図)

1～10 は弥生土器。1 は壺片で復元口径 19cm、口端部に刻目、頸部に凸帯が巡る。SB10P2 出土。2 は胴部片で綾杉文が巡る。撹乱出土。3～10 は P505 より出土。3 は小さな底部に対して胴部が大きく開く。復元底径 7cm。4～7 は甕の底部片。いずれも外底部がやや窪み、外面に縦位のハ



第 35 図 その他の土器・石器実測図 (1/2、1/3、1/4)

ケ目。8は口縁部が丸みを持って立ち上がり、端部の断面が方形となる鉢で器高11.0cm。9の高杯は摩滅が著しいが、一部丹塗の痕跡を確認できる。10の器台の外面には絞り状の痕跡が見られる。

石器類（図版18、第35図）

11・12は石鎌。11は側縁部の調整は粗い二等辺三角形で重さ2.0g、P642出土。12は側縁部に丸みを持ち、両基端部が鋭く尖る。重さ0.7gで暗茶褐色土出土。13は石錐で縦長剥片の長軸に沿って周縁調整を行い、角錐状の形態をとる。下端部は摩滅。重さ2.3gで杭12周辺出土。14はサヌカイト製の石匙で裏面には縦長剥片素材面が残り、両側縁に僅かに抉りが入る。重さ15.7gでP184出土。15は黒曜石製の不定形剥片。重さ0.8gでP510出土。16は幅広剥片の端部を折り取って表裏に調整する二次加工剥片で黒曜石製。重さ1.2gでP184出土。

17～19は石庖丁。17は左右から刃部を研ぎ出した擦痕が明瞭に残る。砂岩製で重さ104.1g、調査区中央付近包含層より出土。18は刃部から紐部までの長さが短く、紐部の紐ズレ痕も明瞭である。砂岩製で重さ20.0g、SX05暗茶色土下部出土。19は重さ26.0g、SB13P1出土。20は両側縁が並行するよう整形から石剣の未製品であろう。粘板岩製で重さ13.3g、P640出土。

21～24は石斧。21は蛇紋岩製磨製石斧の基部で重さ32.2g、SI01出土。22は緑色片岩製の打製石斧で基部を欠損。重さ180.1g、SB03P4掘形出土。23は玄武岩製磨製石斧の基部である。緑色凝灰岩製。重さ201.7g、包含層出土。24は下半を欠損する玄武岩製石斧の未製品である。表裏面は面的調整、側面は叩打調整をしている。重さ1038.4g、SD03周辺出土。



スナップ2 伊方小学校児童現地説明会風景

IV おわりに

調査では、掘立柱建物 14 棟、柵 6 条、井戸 4 基、土坑 4 基、溝 6 条等を検出した。旧校舎の搅乱によって遺構の把握が困難であったが、それでも田川地域における古代から中世にかけての良好な資料を得ることができた。

遺構の時期と変遷

本遺跡において重要なのは、古代から中世にかけての大型建物群を検出したことである。この建物群の配置や検出状況から見た場合、幾つか特徴がある。まず、調査区中央で検出したSB04～07を中心とする一群が西偏するのに対して、SB01・13・14はいずれも東偏する。また、前者が方形の柱穴で黄褐色、茶褐色の互層の埋積土を持つのに対し、後者はプランも不明慮で埋土も黒褐色である。また、切りあいから時間的前後関係を有するのはSB05とSB06、SB07とSB08であり、それぞれ前者が後者を切る。よって、調査区中央では少なくとも2時期、調査区東で1時期が想定され、主軸方位や遺構の状況から、前者から後者へ、最低3期の建物変遷が存在する。

さらに建物群の時期を考える上で基準となるのは、SB07 柱掘形出土土師器椀（第 15 図 20）や柱痕跡出土の縄目紋の平瓦である。特に瓦類は、焼土と共に柱痕跡に落ち込んで廃絶時の状況を示すだけでなく、建物あるいはその周辺で火災があったことを窺わせる。それは、火を受けた痕跡である炭化物層と共に土器を埋めて廃絶した SE01 出土土器から 12 世紀前半頃とみられる。ここに、建物群の下限を捉えることができよう。このような状況から、12 世紀前半頃までに廃絶する SB07 以降に SB01・13・14 は位置づけられ、さらに主軸方位から、SB01 の東で並走する柵 SA01、溝 SD01 等が、概ね 12 世紀後半～13 世紀に比定される。一方、遺跡内の建物群の上限については、出土土器から SB07 の造営が 9 世紀以降であることは確かである。さらに遺跡内には 8 世紀代の土器も僅かながら出土しており、この時期以降に遺跡内で、何らかの活動が開始されたことが推測される。時間的根拠はないが、SB03、08、SB10 は、検出状況や出土遺物の希薄さから、SB07 以前に比定される可能性が高い。

こうした建物群の検出状況と出土遺物を整理した場合、概ね以下のような時期変遷を想定できる。

I 期 (8 ~ 9 世紀)	不明
II 期 (9 世紀)	SB03 · 08 · 10
III 期 (9 ~ 12 世紀)	SB04 · 06 · 07 · 09 · 11、SE01 ~ 04、SD03 (a 期) SB02 · 05 (b 期)
IV 期 (12 世紀後半 ~ 13 世紀)	SB01 · 13 · 14、SA01、SD01
V 期 (13 ~ 14 世紀)	SX11

I期は不明だが、ヘボノ木遺跡に類例がある香炉の土師器蓋（第29図25）やSD03出土硯（第26図94）から8～9世紀代にも初期活動があったことが分る。その後、SB03・08・10など倉庫とみられる建物群が配される。このII期の上限は、推定の域を出ないが、SB07の前段階として9世紀頃に想定しておきたい。さらにIII期は、SB04・06・07・09等、12世紀前半頃までおそらく小時期に亘って大型建物群が展開していくと推測される。この建物群と併せて、井戸SE01等が置かれ、下限も同じ頃に比定される。また、前後してSB02・05も置かれるが、この時期は前段階と大きくかけ離れたものではない。そして、この時期までに大溝SD03も開削されていた

とみられる。その後、建物の主体は SB01 を中心とする東に移るが、この時期は 12 世紀後半から 13 世紀頃に比定される。そして、SB13・14 という、それまでの規模と構造の異なる中世的な建物が置かれる。また、同時期に比定される SK01・07・08 がある。また、大溝 SD03 南半は少なくとも 13 世紀代頃までは機能している。

以上のような状況から、建物群はおそらく 9 世紀以降、12 世紀までを中心とする時期があり、それを継承しながら次第に主体を東へ移しながら中世へと移行したと考えられる。

出土土器

調査では、遺構の他にも幾つか良好な資料が得られた。このうち井戸 SE01 より一括性の高い土器群が出土した。炭化物層・暗黄茶褐色土出土土器は、それぞれ連続的な一括廃棄の状態で出土している。特に暗黄茶褐色土出土の土師器坏 a (第 19 図 30～33) は、口径 15.6～16.3cm、底径 10cm と齊一性が高い。底部調整は、一部板状圧痕が見られる他は糸切りである。こうした状況は炭化物層でも変わらない。そのため、瓦器椀の底部片しか確認できない暗黄茶褐色土中の土師器坏 a には、炭化物層出土の瓦器椀 (第 19 図 19・20) が伴うとみられる。瓦器椀は、体部と底部の境目付近を丁寧に仕上げており、口縁部へは丸みを持ちながら僅かに肥厚して至る。陶磁器には白磁碗 IV・V 類、同安窯系青磁碗 I 類等があり、土器群は 12 世紀前半頃までと考えられよう。

この SE01 と同時期に比定される土器群は、大溝 SD03 でも多量に出土している。概ね SE01 と時期的に重複する遺物である。このうち注意されるのが、土師器坏である。SD03 中央の黒色土中では、口径 15.5cm に対して底径が 6.7cm 程度、底部調整は糸切りで、「土師器坏 b」が主体を占める。こうした坏類は、むしろ豊前地域の特徴として理解される。同様に瓦器椀でも体部が直線的に開き丸みを持った低高台が取りくものがあり、「坏 b」と同时期に置けるであろう。筑前、豊前地域それぞれの特徴を持つ坏類の出土は、本遺跡の地理的位置を考える上でも重要である。

遺跡の背景

文献資料によれば、伊方台地を中心とした地域は、かつて「伊方（伊加田）庄」と呼ばれていた。建長五年（1253）の近衛家所領目録には、「伊方」の名が見え、近衛家領庄園であったことが分っている。さらに遡って、建久年間の源頼朝の下文では、中原俊房（宇都宮俊房）が伊方庄地頭に任命された旨を「豊前国伊方庄住人」に宛てられたとされるが、近世の偽文とする意見もある^{註)}。さらに、觀応元年（1350）には、勲功として宇都宮佐田公景に「伊加田庄」が与えられたという。

こうした記録を見る限り、伊方地域が平安時代以降、田河郡内でも庄園経営の拠点として位置づけられていたことが分る。特に遺跡の時期と重複する 12 世紀前後には、活動拠点が伊方台地内に存在したことも確かであろう。そうした視点であらためて遺跡を見ると、整然とした建物配置をとらないものの、彦山川北岸の拠点的施設として大型建物が重複しながら置かれていたことが分る。また、倉庫と考えられる大型総柱建物が多い特徴がある。

そして出土遺物から見る限り、まとまりのある土器群や豊富な貿易陶磁器は「官衙的」な内容を持つ。ただし、それを具体的に証明しうる資料に欠けている。こうした状況を踏まえると文献に見られる伊方庄の関わりの中で理解することが妥当であろう。

いずれにしても、田川郡内で文献資料と遺跡との対比が可能な数少ない遺跡であり、今後本地域の歴史を語る上でも重要な位置にあると言える。

註) 平凡社 2004 『福岡県の地名』 日本歴史大系 41

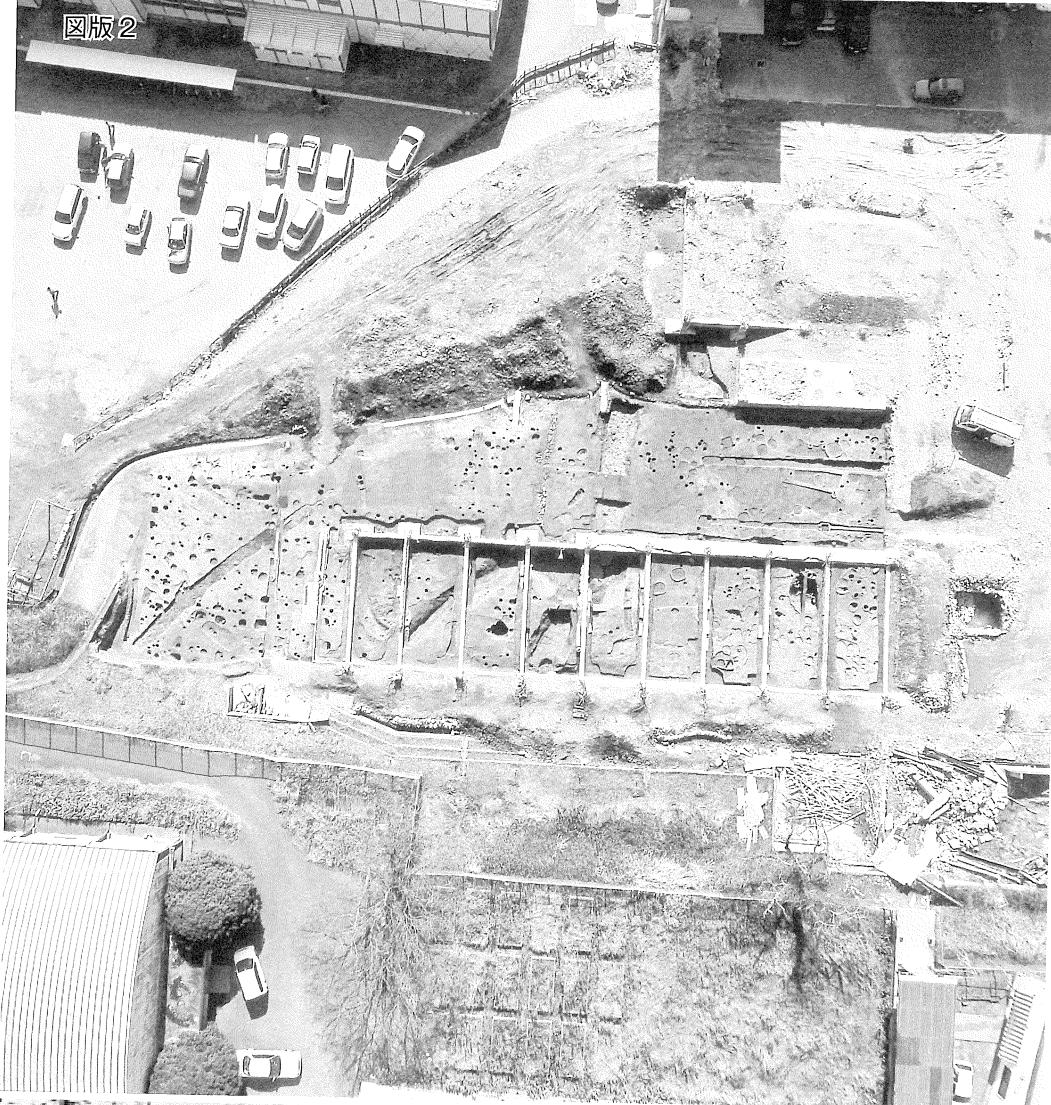
図 版



1 伊方城園遺跡遠景
(西上空から)



2 伊方城園遺跡遠景
(北上空から)



1 調査区東全景
(北上空から)



2 調査区中央全景
(北上空から)



1 調査区全景（西南から）



2 調査区東半全景
(西南から)



3 調査区西半全景
(東南から)



1 調査区西端付近（西から）



2 調査区南端付近（南から）



3 調査区基本土層（東から）

1 SB01・02
(南上空から)



2 SB01 (北東から)



3 SB03 (北から)

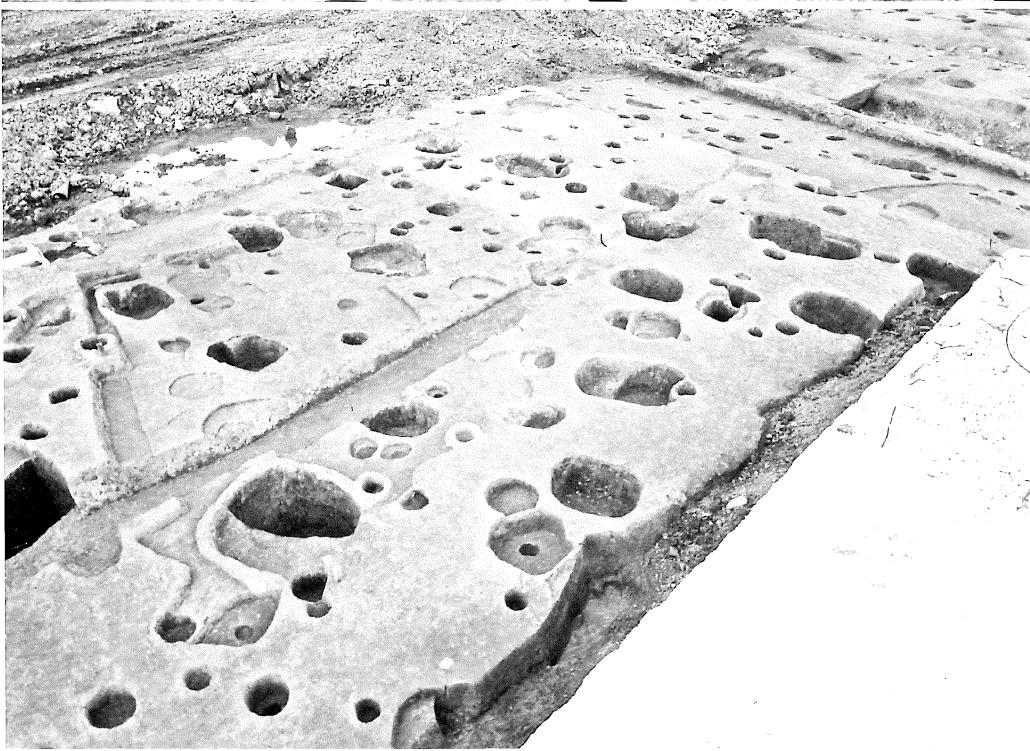




1 SB05・06 (南から)



2 SB05・06 (東から)



3 SB05・07 (南西から)

1 SB07 (東から)

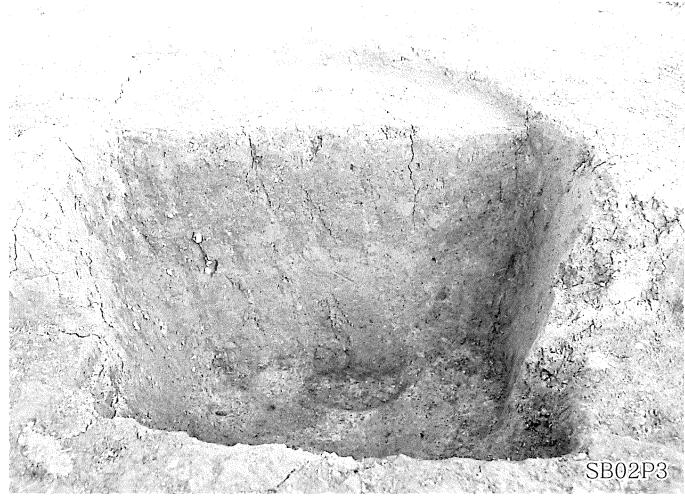
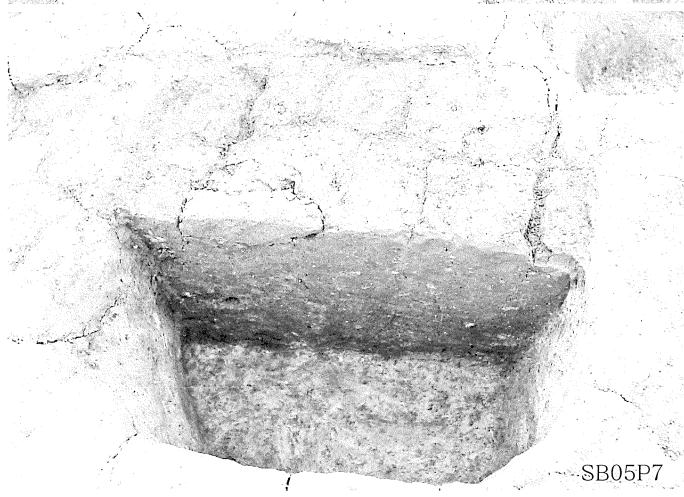
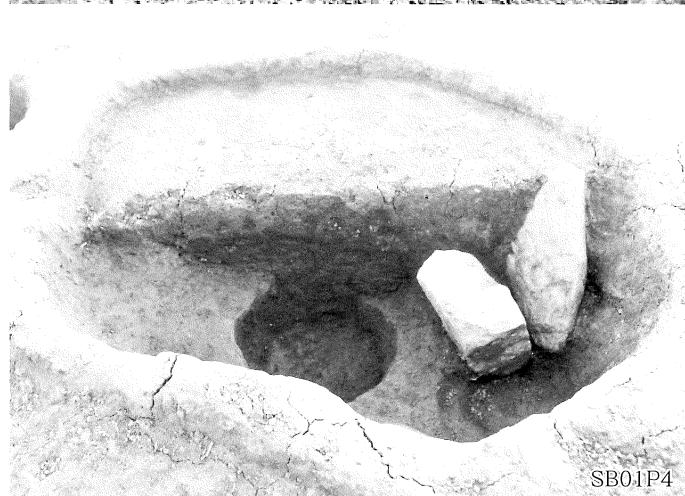
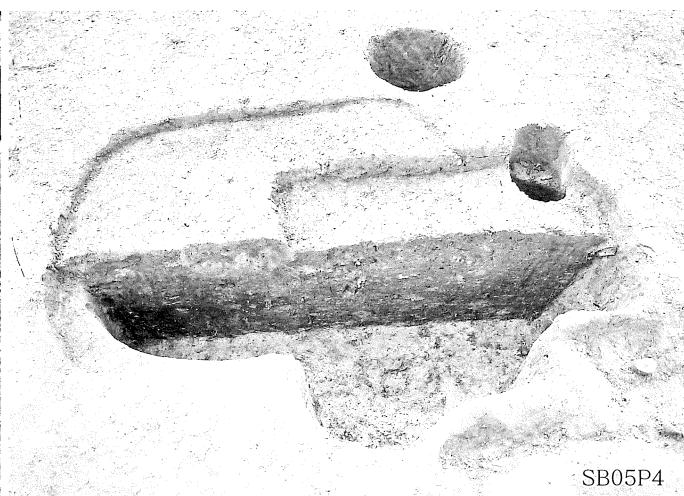


2 SB10・11 (南から)

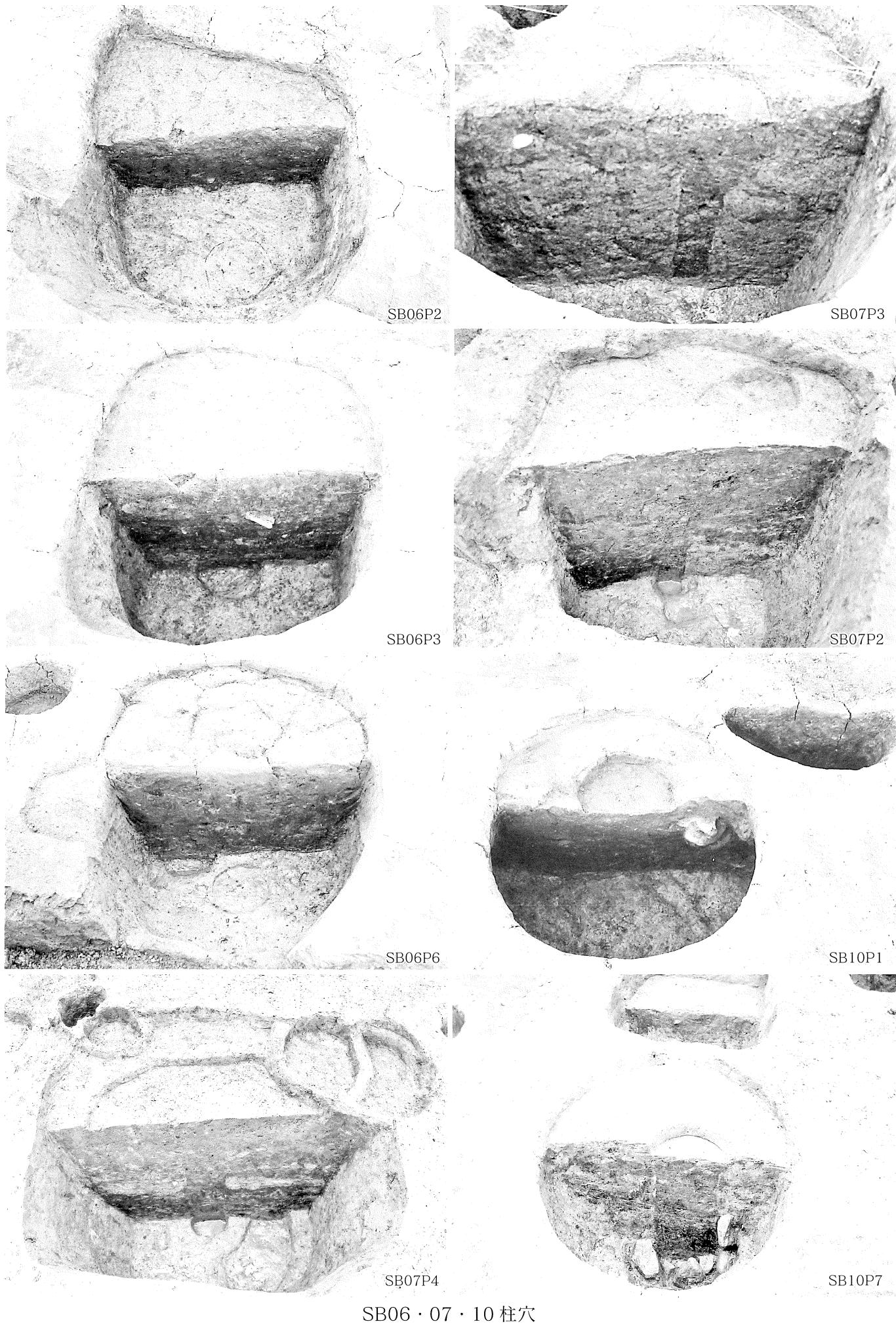


3 SB11・12 (北から)





SB01・02・05 柱穴



SB06 · 07 · 10 柱穴



1 SE01 埋積状況（南から）



2 SE01 (北から)



3 SE01 完掘状況（北から）

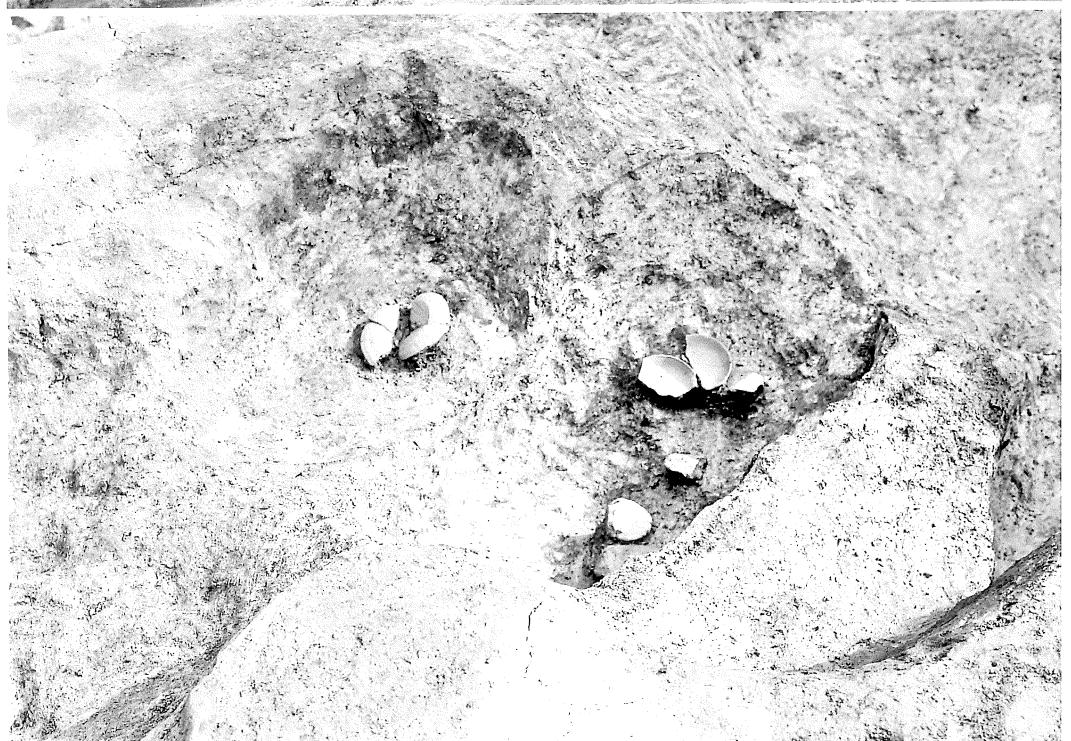
1 SE02 (北から)

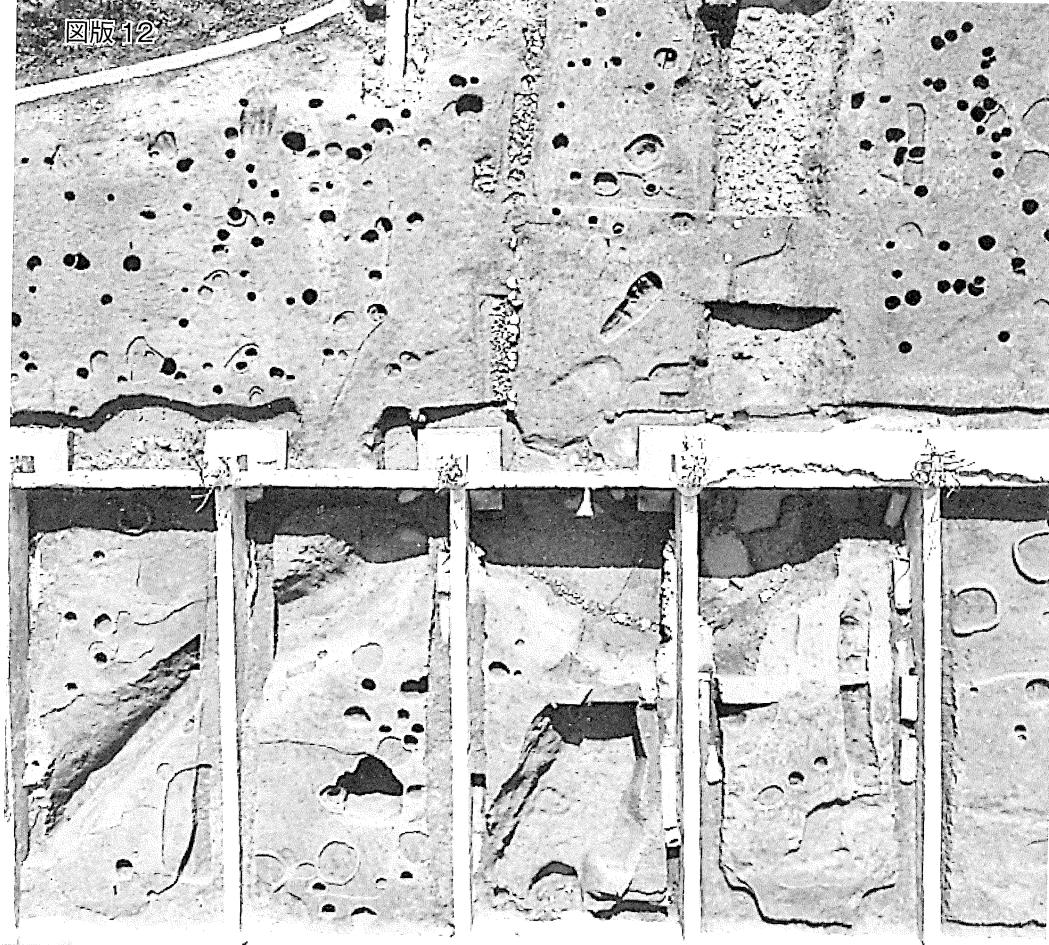


2 SE04 土層 (西から)



3 SK07・08 遺物
出土状況 (北から)





1 SD03・05 (北上空から)



2 SD03 北半 (南から)



3 SE03 北半土層 (南から)



1 SD03 南半 (南から)



2 SD03 南半土層 (南から)



3 SX11 (東から)



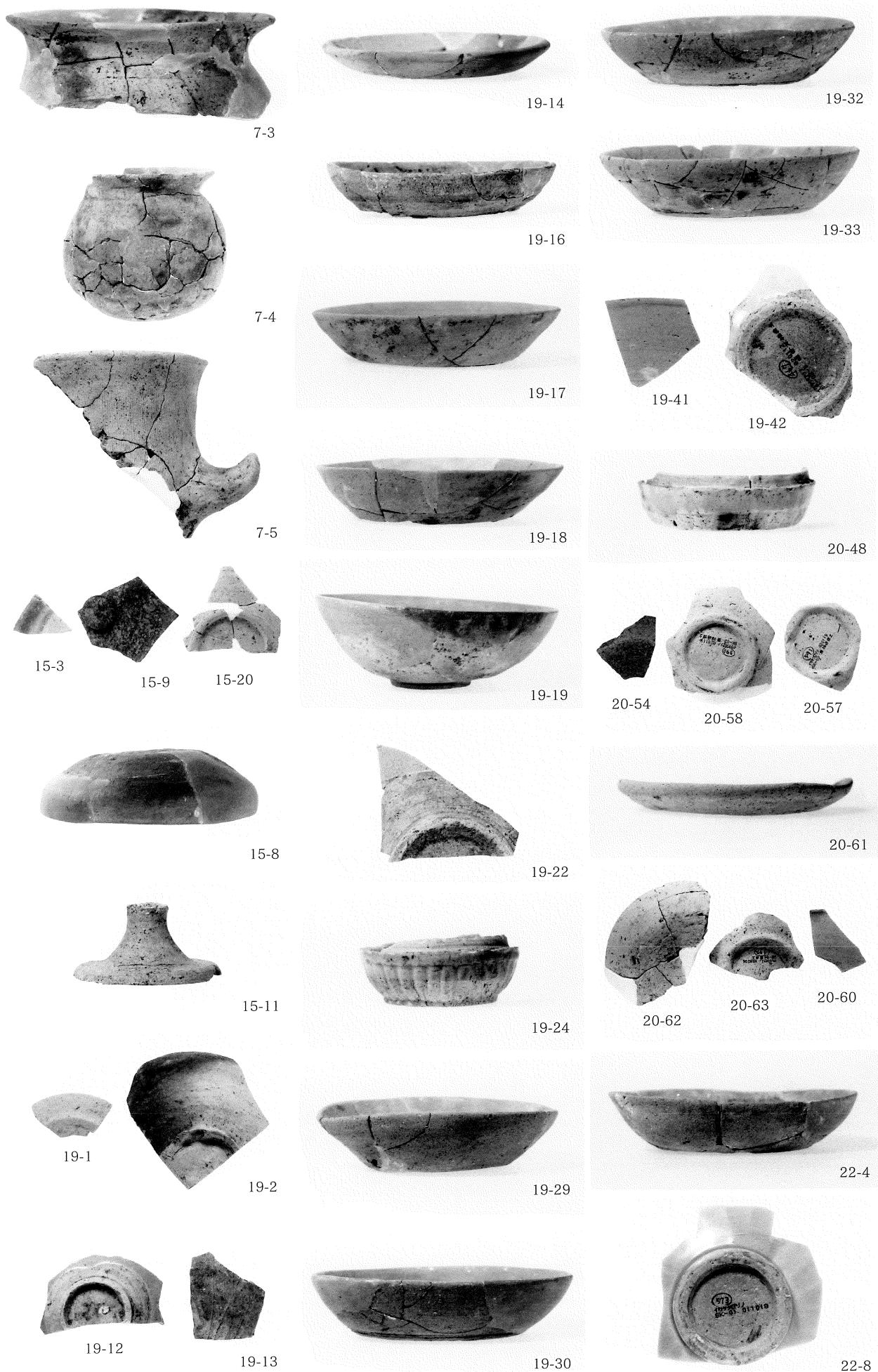
1 調査区東下層遺構（北から）



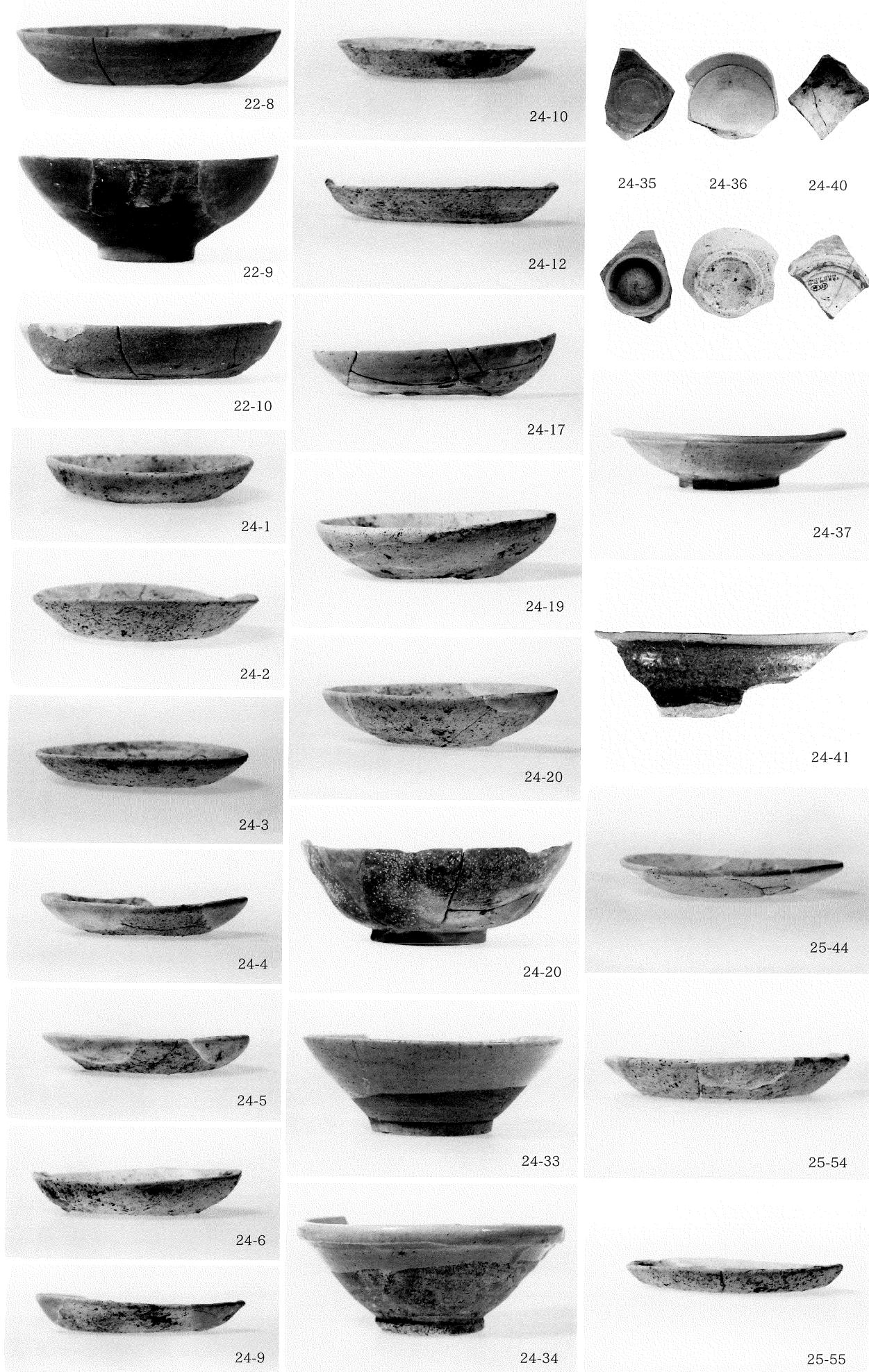
2 調査区東下層遺構（西から）



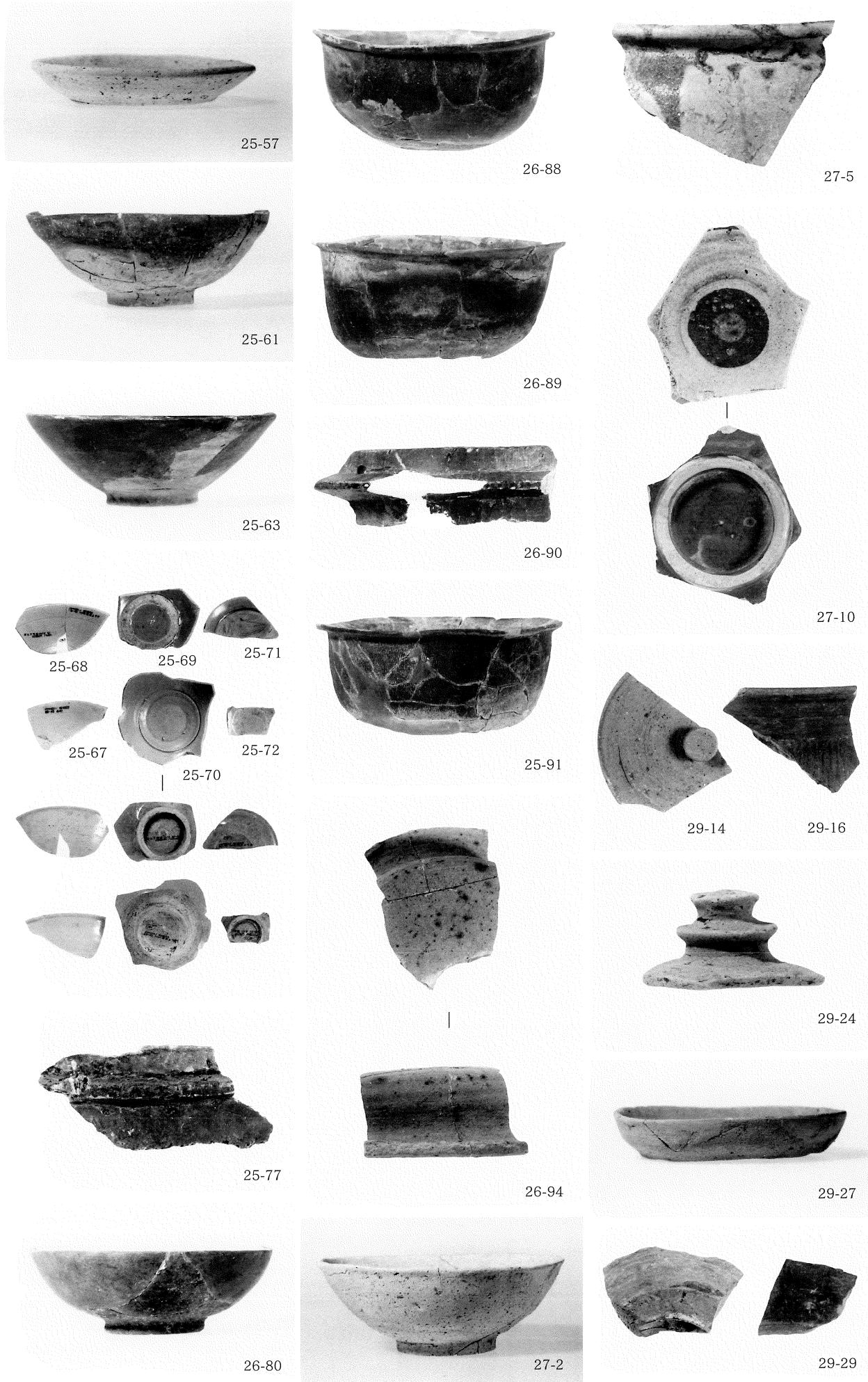
3 SX12 遺物出土状況（南から）



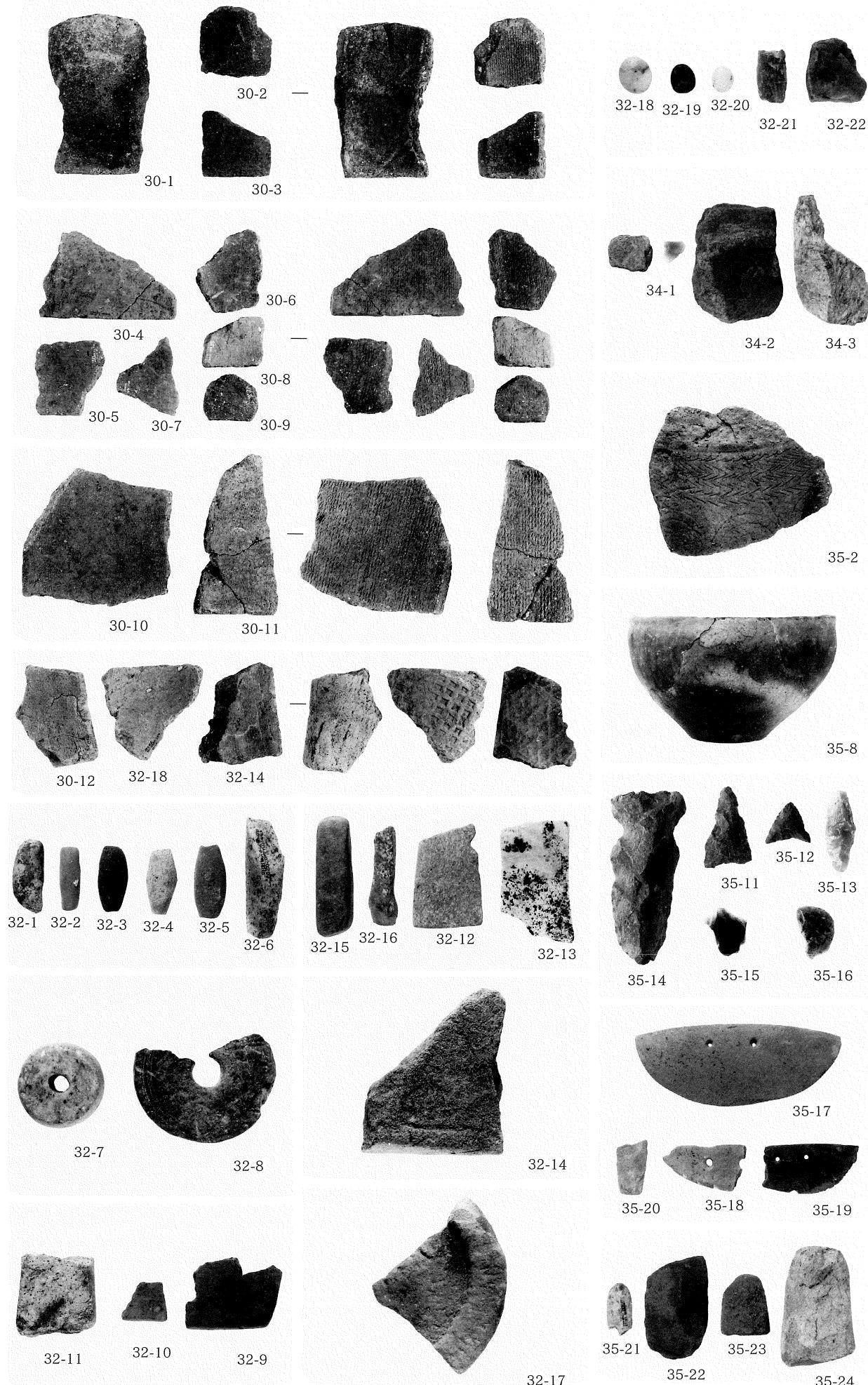
出土土器・陶磁器 1



出土土器・陶磁器 2



出土土器・陶磁器 3



出土瓦・土製品・石製品

報告書抄録

フリガナ	イカタシロゾノイセキ							
書名	伊方城園遺跡							
副書名	福岡県田川郡方城町伊方所在遺跡の調査							
卷次								
シリーズ名	方城町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	井上 勇也(編集)・杉原 敏之							
編集機関	方城町教育委員会							
所在地	〒822-1211 福岡県田川郡方城町大字伊方 4480番地							
発行年月日	平成16年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
イカタシロゾノイセキ 伊方城園遺跡	フクオカケンタガワグンホウジョウマチ 福岡県田川郡方城町 オオアザイカタ 大字伊方	市町村 406074	遺跡番号 840039	33° 40' 44"	132° 47' 53"	2001.11.1 ~ 2002.3.8	2,500m ²	方城中学校改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
伊方城園遺跡	集落	古墳時代 平安時代 鎌倉時代	古墳時代 掘立柱建物 井戸 掘立柱建物 柵、大溝	須恵器、土師器 土師器、黒色土器、瓦質土器、白磁	古代から中世にかけての建物群14棟を検出した。井戸・溝からは、土師器、瓦器、陶磁器類などが多量に出土した。			

伊方城園遺跡

方城町文化財調査報告書 第7集

平成16年3月31日

発行 方城町教育委員会

田川郡方城町大字伊方 4480 番地

印刷 日光印刷

田川郡方城町大字弁城 2341 番地 6